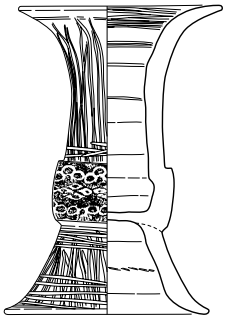
平城京左京四条六坊八坪
奈良町遺跡（HJG11次）

－令和２年度発掘調査報告書－



2022

公益財団法人　元興寺文化財研究所

平城京左京四条六坊八坪
奈良町遺跡（HJG11次）

－令和２年度発掘調査報告書－

2022

公益財団法人　元興寺文化財研究所

序

このたび、平城京左京四条六坊八坪・奈良町遺跡の発掘調査報告書が完成いたしました。古代都市平城京は和銅３年（710）の遷都､延暦３年（784）の長岡京遷都に伴う廃都を経て、平安時代以降には古代都市から中世都市への変貌を遂げます。そして度重なる兵火を経験し、現在の奈良町へと姿を変えていきます。

今回の発掘調査では、主に中世から近世の掘立柱建物や井戸などのさまざまな遺構が見つかり、土器や陶磁器を中心とした多くの遺物も出土しました。その調査状況からは、本調査地周辺では少なくとも平安時代には土地利用が行われはじめたことが分かりました。南側に隣接する率川神社は式内社であることから、周辺の歴史的環境を考えていく上で重要な成果と思われます。

一方、多くの遺構・遺物が確認されるようになるのは室町時代であり、この時期には人々が長期的に生活していたことが窺われ、多くの鉄滓や動物遺体のほか、金が付着した坩堝なども出土していることから、多様な生産活動が行われていたようです。そして、江戸時代中ごろには遺構が少なくなり、次第に生活範囲の縁辺となっていたものと思われます。江戸時代の史料では、本調査地に当たる上三条町では鍛冶作業が行われていたことが判明しており、これらの生産活動が室町時代に遡るものと思われます。

昨今、世間の風潮は文化財を観光資源・文化資源として活用してゆくべし、という方向へ流れていると聞きます。もちろん、活用して初めてその価値が生きるのが文化財であることは間違いありません。しかし、文化財を生かすためには、地道な調査研究がまず必要であることも事実です。調査研究と活用、この二項は今後も車の両輪として調和してゆくことが望まれます。

最後になりましたが、今回の発掘調査に際して多大なるご協力をいただきました開発事業者様、調整・指導いただきました奈良県、奈良市教育委員会をはじめ、関係各位に深く感謝の意を表したいと思います。

令和４年３月31日

公益財団法人　元興寺文化財研究所
理事長　辻村泰善

例言

1. 本書は、平城京左京四条六坊八坪・奈良町遺跡において、店舗建設に先立ち実施した発掘調査（HJG11次）の成果をまとめたものである。
2. 調査地は奈良県奈良市上三条町 13 番 1 に所在し、開発面積 1,468㎡のうち調査対象面積は 360㎡である。
3. 調査は、株式会社みずほ銀行から委任された清水建設株式会社関西支店より委託を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所が行い、令和２年５月 15 日～同年７月１日を現地調査、同年７月２日～令和４年３月 31 日を整理期間とした。
4. 発掘調査は佐藤亜聖（公益財団法人元興寺文化財研究所）が担当し、武田浩子（前同）、吉田芽依（大阪市立大学大学院）、大崎拳斗（天理大学）、乾弥菜子・小林友佳・三井淳（奈良大学）、小久保茉優（立命館大学）が補佐した（所属は当時）。
5. 調査地の座標および基準点の設置は、公益財団法人元興寺文化財研究所が実施し、株式会社文化財サービスが分担した。
6. 発掘調査における土工等土木部門は、安西工業株式会社が担当した。
7. 遺構写真撮影は佐藤が、遺物写真撮影は大久保治（公益財団法人元興寺文化財研究所）が担当した。
8. 出土遺物の実測・浄書等の整理作業は仲井光代、武田浩子、芝 幹、山本知佳（公益財団法人元興寺文化財研究所）が行った。
9. 本書に使用した土器の分類、編年、年代観については以下の文献を参照した。本文中で触れる分類、年代表記はこれらに依拠している。

石井啓 2013『備前窯詳細分布調査報告書』備前市教育委員会

上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

小野正敏 1982「15 ～ 16 世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995「瓦器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社

川口宏海 1990「16 世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ　日本中世土器研究会

木戸雅寿 1995「信楽」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社

木戸雅寿 1995「石鍋」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社

九州陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

佐藤亜聖 1996「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』Ⅺ　日本中世土器研究会

佐藤亜聖 2016「大和における瓦質土器擂鉢の編年」
『元興寺文化財研究所研究報告 2015　水野正好所長追悼論文集』公益財団法人元興寺文化財研究所

鈴木裕子 2015「出土資料からみた朝鮮陶磁　16 世紀以降を中心にして」『根津美術館紀要　此君』第６号　根津美術館

瀬戸哲也 2015「14・15 世紀の沖縄出土中国産青磁について」『貿易陶磁研究』No.35　日本貿易陶磁研究会

中世土器研究会事務局 2015「東播系須恵器の分類と編年」『中近世土器の基礎研究』26　日本中世土器研究会

奈良市教育委員会 2014『南都出土中近世土器資料集－奈良町高天町遺跡（HJ 第 559 次調査）出土資料－』

平尾政幸 2019「土師器再考」『洛史　研究紀要』第 12 号　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

藤沢良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
向井亙 2003「タイ産黒褐釉四耳壺の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.23　日本貿易陶磁研究会
森田勉 1982「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会
山崎信二 2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財材研究所
山崎信二 2008『近世瓦の研究』独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財材研究所
山本信夫 2000『大宰府条坊跡 XV －陶磁器分類編－』太宰府市教育委員会

10. 発掘調査および整理報告書作成にかかる費用については、株式会社みずほ銀行が全額負担した。
11. 当該調査において出土した遺物、実測図、写真は奈良市教育委員会において保管している。
12. 本書の執筆は第１・２章を江浦洋（公益財団法人元興寺文化財研究所）、第３・５章を佐藤・江浦・瀬戸哲也（公益財団法人元興寺文化財研究所）、第４章第１節を三谷智広（パレオ・ラボ）、第４章第２節を山口繁生（公益財団法人元興寺文化財研究所）、第４章第３節を植田直見（公益財団法人元興寺文化財研究所）が行った。本書の編集は瀬戸・江浦が行い、これを芝が補佐した。
13. 発掘調査および報告書作成に際しては、以下の方々からのご助言、ご協力を戴いた。記して感謝申し上げたい。
狭川真一、續伸一郎
奈良市教育委員会、奈良県教育委員会（敬称略、順不同）

目次

第１章　調査に至る経緯と調査体制 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1
　第３節　調査の経過（調査日誌抄） …… 2
第２章　周辺環境と既往の調査 …… 4
　第１節　遺跡の立地と環境 …… 4
　第２節　周辺の既往調査 …… 5
第３章　調査の成果 …… 7
　第１節　基本層序と整地土出土遺物 …… 7
　　第１項　基本層序 …… 7
　　第２項　整地土出土遺物 …… 7
　第２節　14 世紀以前の遺構と遺物 …… 11
　　第１項　遺構 …… 11
　　第２項　遺物 …… 13
　第３節　15 世紀～ 17 世紀前半の遺構と遺物 …… 16
　　第１項　遺構 …… 16
　　第２項　遺物 …… 23
　第４節　17 世紀後半～ 18 世紀の遺構と遺物 …… 38
　　第１項　遺構 …… 38
　　第２項　遺物 …… 41
　第５節　表土出土遺物 …… 41
第４章　自然科学分析 …… 43
　第１節　平城京左京四条六坊八坪・奈良町遺跡出土の動物遺体 …… 43
　第２節　鞴羽口・坩堝の自然科学分析 …… 47
　第３節　漆付不明製品の自然科学分析 …… 52
第５章　調査のまとめ …… 56
　第１節　遺構の変遷 …… 56
　第２節　手工業生産関連遺物の出土について …… 59

図版目次

図 1　調査地位置図（S=1/25,000）…… 4
図 2　今回の調査地と既往の調査地（『平城京条坊総合地図』を改変）（S=1/2,000）…… 5
図 3　全体平面図（S=1/200）…… 8
図 4　壁面土層断面図（1）（S=1/80）…… 9
図 5　壁面土層断面図（2）（S=1/80）…… 10
図 6　整地土出土遺物実測図（S=1/3・1/4）…… 11
図 7　SB120 平面図（S=1/40）…… 12
図 8　SD040 土層断面図（S=1/40）…… 12
図 9　SK090 平面・土層断面図（S=1/40）…… 13
図 10　SD040 出土遺物実測図（S=1/3）…… 14
図 11　SK063・090 出土遺物実測図（S=1/3）…… 15
図 12　SB135 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 16
図 13　SB136 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 17
図 14　SD060 土層断面図（平面 S=1/200・断面 S=1/80）…… 19
図 15　SE105 平面・土層断面図（S=1/40）…… 20
図 16　SK005 平面・土層断面図（S=1/40）…… 21
図 17　SK013 平面・土層断面図（S=1/40）…… 21
図 18　SK068 平面・土層断面図（S=1/40）…… 22
図 19　SK100 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 22
図 20　SK110 平面・土層断面図（S=1/40）…… 23
図 21　SB135・136 出土遺物実測図（S=1/3）…… 24
図 22　SP039 出土遺物実測図（S=1/3）…… 24
図 23　SD060 出土遺物実測図（1）（S=1/3）…… 25
図 24　SD060 出土遺物実測図（2）（S=1/3）…… 27
図 25　SD060 出土遺物実測図（3）（S=1/3・1/2）…… 28
図 26　SD060 出土遺物実測図（4）（S=1/3）…… 29
図 27　SD060 出土遺物実測図（5）（S=1/3）…… 30
図 28　SD071 出土遺物実測図（S=1/3）…… 30
図 29　SE105 出土遺物実測図（1）（S=1/3・1/2）…… 31
図 30　SE105 出土遺物実測図（2）（S=1/3・1/4）…… 33
図 31　SE105 出土遺物実測図（3）（S=1/3）…… 34
図 32　SE105 出土遺物実測図（4）（S=1/3）…… 35
図 33　SK013・068・092 出土遺物実測図（S=1/3）…… 36
図 34　SK100・110 出土遺物実測図（S=1/3）…… 37

図 35　SK020 平面・土層断面図（S=1/40）…… 39
図 36　SK050 平面・土層断面図（S=1/40）…… 40
図 37　SK070 平面・土層断面図（S=1/40）…… 40
図 38　SK050 出土遺物実測図（S=1/3）…… 41
図 39　表土出土遺物実測図（S=1/3・1/6）…… 42
図 40　出土動物遺体 …… 46
図 41　鞴羽口 …… 49
図 42　鞴羽口元素マップ（上段より内側、外側、端面、左より Fe、Cu、Ag、Au）…… 49
図 43　坩堝（1 ～ 3：XRF 箇所） …… 50
図 44　坩堝元素マップ（上段より内側、外側、左より Fe、Cu、Ag、Au） …… 50
図 45　金色粒の顕微鏡観察像（左より観察箇所図 43-1、図 43-2） …… 50
図 46　金色粒の XRF スペクトル（分析箇所図 43-1）…… 51
図 47　金色粒の XRF スペクトル（分析箇所図 43-2）…… 51
図 48　坩堝内側 Cu 付着箇所の XRF スペクトル（分析箇所図 43-3）…… 51
図 49　微小部観察箇所（白枠部分 A ～ D）…… 52
図 50　図 53 に示した破片の赤外吸収スペクトル …… 53
図 51　実体顕微鏡による微小部観察像（左：図 49-A　右：図 49-B）…… 54
図 52　実体顕微鏡による微小部観察像（左：図 49-C　右：図 49-D）…… 54
図 53　実体顕微鏡による（上図左：繊維状物質有、上図右繊維状物質無）微小部観察像 …… 54
図 54　顕微鏡による断面観察像（全体）（左：透過、右：落射） …… 55
図 55　顕微鏡による断面観察像（左上：図 54-①、右上：図 54-②、左下：図 54-③、右下：図 54-④）…… 55
図 56　顕微鏡による断面観察像（左：全体、右：繊維状物質の断面の拡大（矢印部分））…… 55
図 57　今回の調査地と周辺の古墳…… 56
図 58　遺構変遷図 …… 57
図 59　検出遺構配置略図（S=1/200） …… 63

表目次

表１　出土動物遺体一覧 …… 45
表２～８　報告遺物一覧（1）～（7）…… 64～70
表９～14　検出遺構および出土遺物一覧（1）～（6）…… 71～76

写真図版目次

図版 1
　調査前風景
　西区全景（東から）
図版 2
　東区全景（西から）
　東区全景（東から）
図版 3
　西区南壁土層断面（北から）
　鉄刀（15）出土状況（南から）
図版 4
　SD040 完掘状況（東から）
　SK090 土層断面（南から）
図版 5
　SK090 完掘状況（東から）
　SB135c 土層断面（西から）
図版 6
　SB136a 土層断面（南から）
　SB136b 土層断面（南から）
図版 7
　SB136c 礎石検出状況（南東から）
　SB136d 礎石検出状況（北から）
図版 8
　SD060 土層断面 a-a'（東から）
　SD060 土層断面 b-b'（東から）
図版 9
　SE105 土層断面（南から）
　SE105 完掘状況（西から）
図版 10
　SK005 土層断面（南から）
　SK013 土層断面（南から）
図版 11
　SK005・013 完掘状況（東から）
　SK068 完掘状況（南から）
図版 12
　SK100 土層断面（西から）
　SK110 土層断面（北から）
図版 13
　SK020 完掘状況（南から）
　SK050 土層断面（南西から）
図版 14
　SK050 丸太材出土状況（北西から）
　SK050 完掘状況（東から）
図版 15
　SK050 切り株除去後（南から）
　SK070 完掘状況（南から）
図版 16
　SX080、6 層出土遺物
図版 17
　66 層、SD040、SK063 出土遺物
図版 18
　SK090 出土遺物
図版 19
　SK090、SB135・136、SP039、SD060 出土遺物
図版 20 ～ 22
　SD060 出土遺物
図版 23
　SD060・071、SE105 出土遺物
図版 24 ～ 27
　SE105 出土遺物
図版 28
　SE105、SK068・092 出土遺物
図版 29
　SK100 出土遺物
図版 30
　SK100・110・050 出土遺物
図版 31
　SK050、表土出土遺物

第１章　調査に至る経緯と調査体制

第１節　調査に至る経緯

令和元年 12 月 26 日付けで株式会社みずほ銀行より、店舗新築に伴う埋蔵文化財発掘調査の届出が提出された。これを受けて奈良県は、当地が平城京の範囲であり、また中近世の都市である奈良町遺跡の範囲に含まれていることから、発掘調査が必要との判断を行い、令和２年２月 20 日付文保第 3801 号において発掘調査の実施が指示された。これを受けて奈良市教育委員会は発掘調査実施に向けた協議を開始したが、工期を勘案した結果、公共機関による発掘調査は困難と判断されたため、公益財団法人元興寺文化財研究所へ発掘調査を依頼することとなった。

同年３月４日に奈良県より発掘調査の依頼（文保第 328 号－３）を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所は、同年４月 28 日、平城京左京四条六坊八坪・奈良町遺跡発掘調査業務に係る委託契約を、株式会社みずほ銀行より委任された清水建設株式会社関西支店と締結、同年５月 11 日に発掘調査届出を提出のうえ、同年５月 15 日より現地調査を開始した。

現地調査は同年７月１日に終了し、その後すみやかに整理・報告書作成業務に移行した。現地調査から報告書作成に至る間、株式会社みずほ銀行、清水建設株式会社の全面的な支援・協力があった。また、奈良県文化財保存課、奈良市教育委員会からの適切なご指導を賜った結果、調査・整理作業を無事に終了することが出来た。関係各位に感謝する次第である。

第２節　調査体制

発掘調査並びに整理・報告書作成は以下の体制で実施した。

（発掘調査）

調査指導：奈良県文化財保存課・奈良市教育委員会

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理 事 長　辻村泰善

所　　長　辻村泰善（兼務、令和２年７月まで）

田邉征夫（令和２年７月から）

事務局長　江島和哉

総合文化財センター長　塚本敏夫

文化財調査修復研究グループ

リーダー　金山正子

主　務　佐藤亜聖（現地調査担当）

研究員　村田裕介

研究員　坂本　俊

現地作業員：安西工業株式会社

測　　量：公益財団法人元興寺文化財研究所・株式会社文化財サービス

（整理報告）

調査指導：奈良県文化財保存課・奈良市教育委員会

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理 事 長　辻村泰善

所　　長　田邉征夫

事務局長　江島和哉

総合文化財センター長　塚本敏夫

文化財調査修復研究グループ

リーダー　金山正子

研究員　村田裕介

研究員　坂本　俊

研究員　瀬戸哲也　（令和３年６月から）（整理報告担当）

技　師　江浦　洋　（令和３年６月から）（整理報告担当）

第３節　調査の経過（調査日誌抄）

令和２年

5 月 18 日（月）　重機、機材搬入。奈良市教育委員会立会のもと、調査区の設定および重機掘削を行う。

5 月 25 日（月）　重機掘削と並行し、遺構掘削作業開始。SK020 から唐津焼などが出土し、近世の遺構と認識。

6 月 1 日（月）　SK050 を掘削。加工痕のある大型の木の根を検出。SD060 は部分的に南側に湾曲していることを確認。

6 月 2 日（火）　調査区南半で東西方向の柱列を検出する。全体図を作成。

6 月 3 日（水）　SK050 の調査を進め、切り株の下部に大量の礫を埋置していることが判明。

6 月 4 日（木）　西半部全景写真撮影。奈良県文化財保存課宇野隆志氏、奈良市教育委員会原田香織氏・鐘方正樹氏・中島和彦氏来訪。

6 月 5 日（金）　土層断面図作成。

6 月 8 日（月）　SK050 切り株の取り上げ、下層の礫群の実測、写真撮影、取り上げ。調査区東半部の重機掘削開始。

6 月 10 日（水）　SD060 の掘削を行う。多くの遺物が出土、輸入陶磁器が目立つ。東半部ではベースが整地土であることが判明。

6 月 11 日（木）　雨天のため現場図面の点検、整理を行う。

6 月 17 日（水）　SD060 完掘。SK090 掘削、鞴羽口・鉄滓が目立つ。

6 月 18 日（木）　雨天のため現場図面の点検、整理を行う。

6 月 19 日（金）　雨天のため現場図面の点検、整理を行う。

6 月 22 日（月）　SB136 を構成する柱穴の底面から扁平な石を検出する。

6 月 24 日（水）　調査区中央部で方形掘方の柱穴列を検出。梁行二間、桁行一間以上の掘立柱建物で SB120 とする。

6 月 25 日（木）　東半部全景写真撮影。全体図作成。調査区南東の整地土を掘削除去。

6 月 26 日（金）　整地土除去後の第 2 遺構面を掘削調査。平面図作成。写真撮影。奈良市教育委員会秋山成人氏来訪、完了確認。

6 月 27 日（土）　壁面土層図を作成。

6 月 29 日（月）　埋め戻し作業開始。SK050 出土木材のサンプル採取。

7 月 1 日（水）　埋め戻し完了、機材撤収、調査終了。

第 2 章　周辺環境と既往の調査

第 1 節　遺跡の立地と環境

調査地は奈良市上三条町 13 番 1 に所在する。当該地は奈良盆地の北東に位置し、平城京の条坊復元では、外京域で左京四条六坊八坪にあたる。

地形を概観すると、調査地は佐保田撓曲が南東から北西にのびるライン上に位置し、低位段丘面と分類されている（産総研 2014）。また、土地分類基本調査における地形分類図においては、「緩傾斜扇状地」に分類されている（奈良県 1983）。

また、調査地は興福寺がのる北側の台地と元興寺がのる南側の台地に挟まれた鞍部の出口部分に位置し、東側から菩提川（率川）が流れ込み、率川神社の南辺を西流していた箇所にあたる。

なお、佐保田撓曲が形成する段丘崖については中世都市奈良の市街地西辺に一致することが明らかにされている（佐藤 2005）。このことは、奈良の都市景観と密接に関係する地質条件であり、調査地は佐保田撓曲のライン上に位置しており、縁辺部における土地利用を考える上においても重要な位置を占めている。

また、調査地は巨視的にみるといわゆる能登川扇状地に位置し、当該扇状地では古墳時代を通して集落や古墳が検出されており、考古地理学的視点による検討も行われている（安井 2007）。

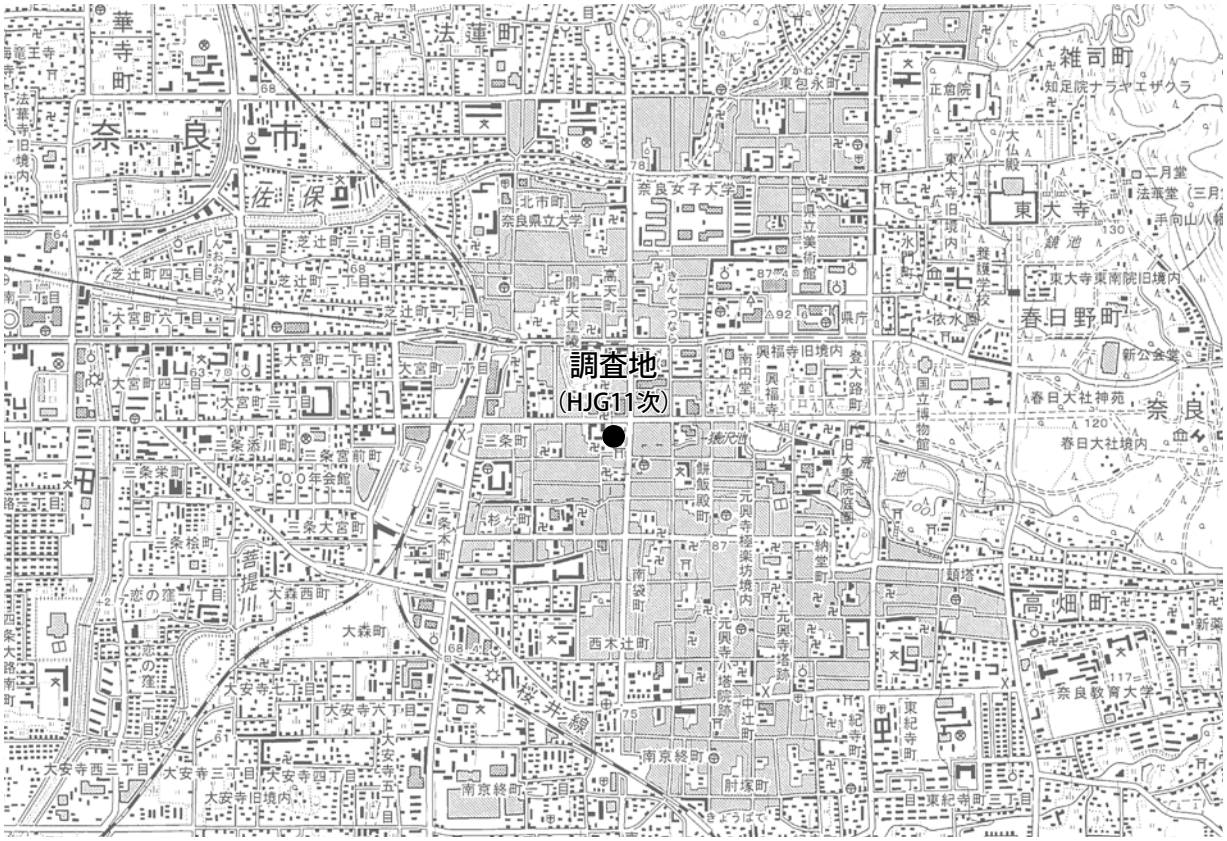


図 1　調査地位置図（S=1/25,000）

第２節　周辺の既往調査

既往の調査では、調査地東側のやすらぎの道を挟んだ場所で行われた奈良市 86-19 次調査で直径約 10 mの円形の墳丘の一部が検出され、率川古墳という名称が与えられている。この調査では上層遺構の検出により、９～ 11 世紀後半までの間に古墳が削平されたことが明らかにされており、奈良時代には墳丘が残されていたとされる。このほか、北側には坂上山古墳（伝開化天皇陵）の東側で検出された漢国神社南東古墳があり、少し離れるが南東でも脇戸古墳などの埋没古墳の存在が確認されている（鐘方 2009）。そのほか、西側の奈良市 251 次調査での奈良時代以前の流路が検出され、埴輪片が出土することから周辺に古墳が存在していたことが示唆されている（奈良市 1993）。

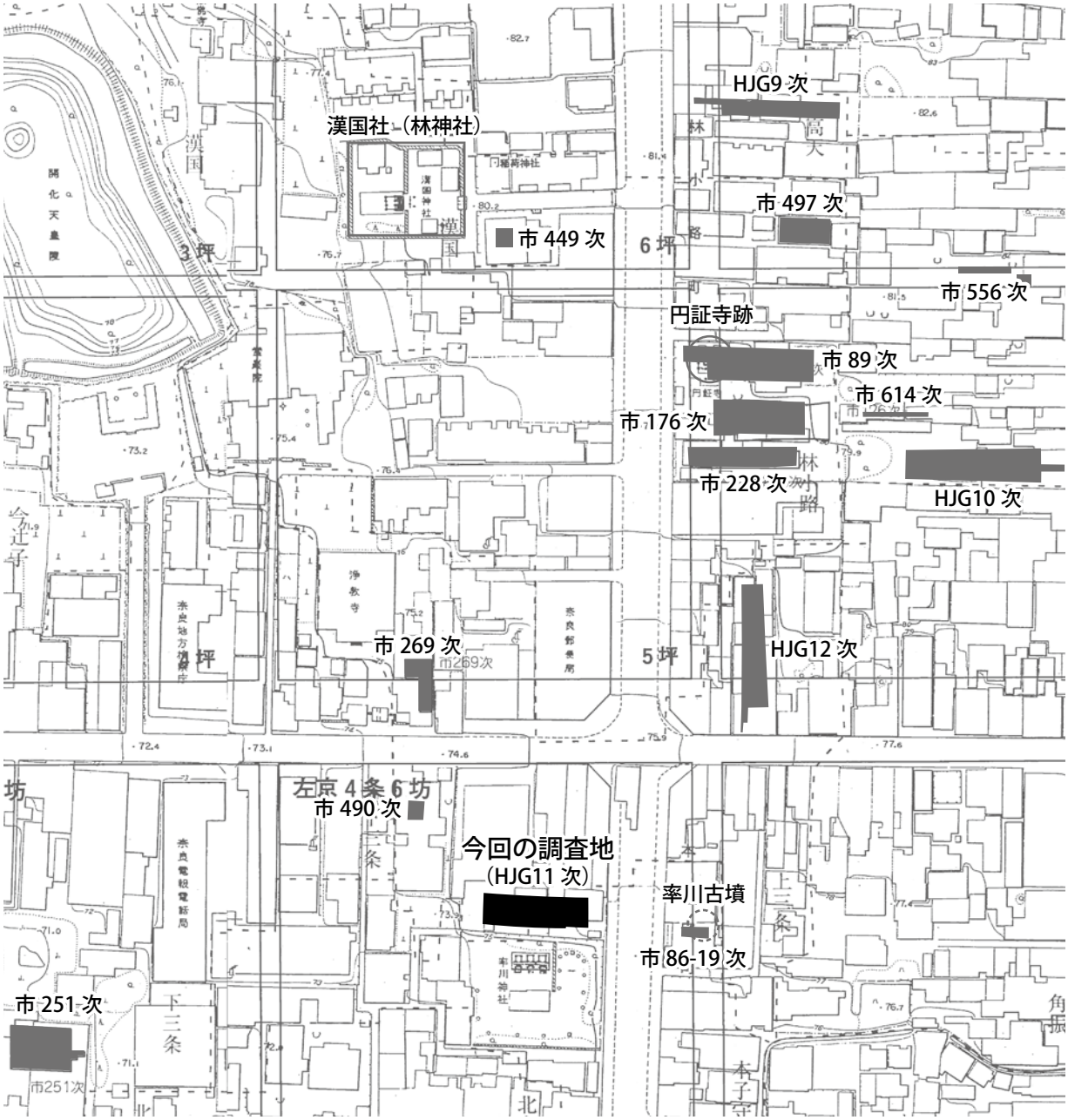


図 2　今回の調査地と既往の調査地（『平城京条坊総合地図』を改変）（S=1/2,000）

奈良時代の遺構については、散発的に検出例があるのみである。奈良市 251 次調査では柱根が残る柱穴（奈良市 1993）、奈良市 176 次調査では井戸（奈良市 1990）、奈良市 228 次調査では土坑（奈良市 1992）などが検出されている。

先に掲げた率川古墳が検出された奈良市 86-19 次調査地は条坊復元図では六坊坊間路に該当する場所であったが、遷都後も古墳が削平されることなく残っていたことが指摘されており、考古学的には当該地には条坊道路は存在しなかったとされる（鐘方 2009）。東六坊における条坊道路に関しては、地上に残る遺存地割と一致しないことから西側にずれていることが指摘されており（西崎 1985）、奈良時代の遺構が希薄であることと相まって、いまだ結論をみていない。

一方、平安時代にはいると遺構検出件数が増加し、中世都市奈良の形成時期に重なる 11 世紀後半から末葉にかけての遺構は飛躍的に増加する。

調査地南側に隣接する率川神社は、『延喜式神名帳』に「率川坐大神神御子神社 三座」と記される式内社である。神社は推古天皇元年（593）2 月 3 日、大三輪白堤が勅命により奉斎したと伝わり、文徳天皇仁寿 2 年（852）11 月 9 日に従五位下を授けられ、神封 6 戸（左京 4 戸、丹波国 2 戸）を与えられている。治承 4 年（1180）12 月、平重衡の乱によって社殿が消失している（『玉葉』）。中世以降は春日若宮神官によって管理され、興福寺との関係が強かったとされる（奈良市 1985）。率川神社は平城京遷都以前から当地に所在したと考えられる神社であり、周辺の歴史的環境を考えるうえで重要な存在である。近世の地誌である『奈良坊目拙解』には当社の本地として子守町南西部、率川西畔に蛸薬師堂（川崎寺）があり、興福寺宝蔵院支配にあったと記す。

また、『奈良坊目拙解』上三条町の項には、不開門郷・南円堂郷として上三条が記載されている。東辺は現在のやすらぎの道に面しているが、これについては東六坊坊間路との関係が推定されている。『奈良坊目拙解』では「自レ辻二至本子守町一小路ノ上」を「金房辻子」と呼び、その名の由来を刀鍛冶金房政治が西側南門限に居住していたことに求めている。また、同じく近世地誌である『奈良曝』においても、上三条町に隣接する本子守町に「与十郎」、子守北向町に「権三郎」「善左衛門」という刀鍛冶が記載されるが、同書にみられる奈良の刀鍛冶が、ほぼ当地に限定されていることは注意を要する。今回の調査では当地一帯が継続して鍛冶関連作業を行う場であったことが判明しており、『奈良坊目拙解』の記述との関係が注目される。

《参考文献》

鐘方正樹　2009「率川古墳と外京条坊および出土埴輪について」『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成 18（2006）年度　奈良市教育委員会
佐藤亜聖　2005「中世都市奈良の成立と変容」『中世の都市と寺院』高志書院
独立行政法人産業技術総合研究所　2014『平成 25 年度「活断層の補完調査」成果報告書奈良盆地東縁断層帯』
奈良県（企画部開発調整課）　1983『土地分類基本調査　奈良、大阪東北部、大阪東南部』
奈良県（企画部開発調整課）　1983『土地分類基本調査　桜井』
奈良市　1985『奈良市史　社寺編』
奈良市教育委員会 1990「平城京左京 三条六坊十 二坪 の調査 第 176 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成元年度』
奈良市教育委員会 1992「平城京左京三条六坊十二坪の調査 第 228 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 3 年度』
奈良市教育委員会 1993「平城京左京四条六坊一坪の調査 第 251 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 4 年度』
奈良市教育委員会 2002「平城京左京三条六坊六坪・奈良町遺跡の調査第 449 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 12 年度』
西崎卓哉　1985「平城京外京の地割計画寸法」『奈良市埋蔵文化財センター紀要 1985』奈良市教育委員会
西村嘯月堂 1687『奈良曝』（奈良市史編集審議会 1963『奈良市史会報　付録』）
村井勝九郎（古道）1735『奈良坊目拙解』（奈良市史編集審議会 1963『奈良市史会報　付録』）
安井宣也　2007「能登川扇状地における古墳時代の開発史の検討～集落遺跡の発掘調査成果や周辺の古墳の様相をもとにして～」『ヤマトの開発史（1）』（『奈良女子大学 21 世紀 COE プログラム報告集 vol.17』奈良女子大学 21 世紀 COE プログラム古代日本形成の特質解明の研究教育拠点

第３章　調査の成果

第１節　基本層序と整地土出土遺物

第１項　基本層序（図３～５）

調査区周辺は既存建物の建設に伴って 0.4 ～ 0.5m にわたって造成盛土が行われている。この盛土下面は攪乱も多く、層厚が約 1.4m に及ぶ部分もある。

盛土直下には地山ブロックおよび礫を含む層厚 0.4 ～ 1.2m の整地土がある。この整地土は江戸時代の整地土と考えられ、大きく上下２層に分かれ、中位には 0.1m 前後の水平な土層が重層的に堆積する部分がみられ、これらは段階的に行われた整地に伴うものであると考えられる。

その下層では東側を中心に層厚 0.4 ～ 0.6m で礫・炭化物を多量に含む土層（３・22・54・70 層）が堆積しており、これについては出土遺物からみて中世後期の整地土であると考えられる。

さらに、その下層では層厚 0.2 ～ 0.3m 前後の土層が堆積し（SX080　17 層）、出土遺物から 14 世紀の整地土であると考えられる。また、部分的ではあるが、さらに古い段階の整地土（66 層）も残り、当該層に関しては 12 世紀以前の整地土であると考えられる。なお、この土層の調査区東端から４ｍの北壁際の地点で鉄刀が置かれたようにも見える状況で出土した。

今回の調査では、基本的に地山面で遺構検出を行ったが、調査区東端においては 14 世紀の整地土（17 層）を挟んで２面の遺構面を確認している。第２遺構面で確認された遺構からの出土遺物は小片であったため掲載できなかったが、11 ～ 12 世紀ごろのものを主体とする。また、遺構面の標高は 73.4 ～ 73.8 ｍでほぼ平坦である。

第２項　整地土出土遺物

SX080 出土遺物（図 6、図版 16）

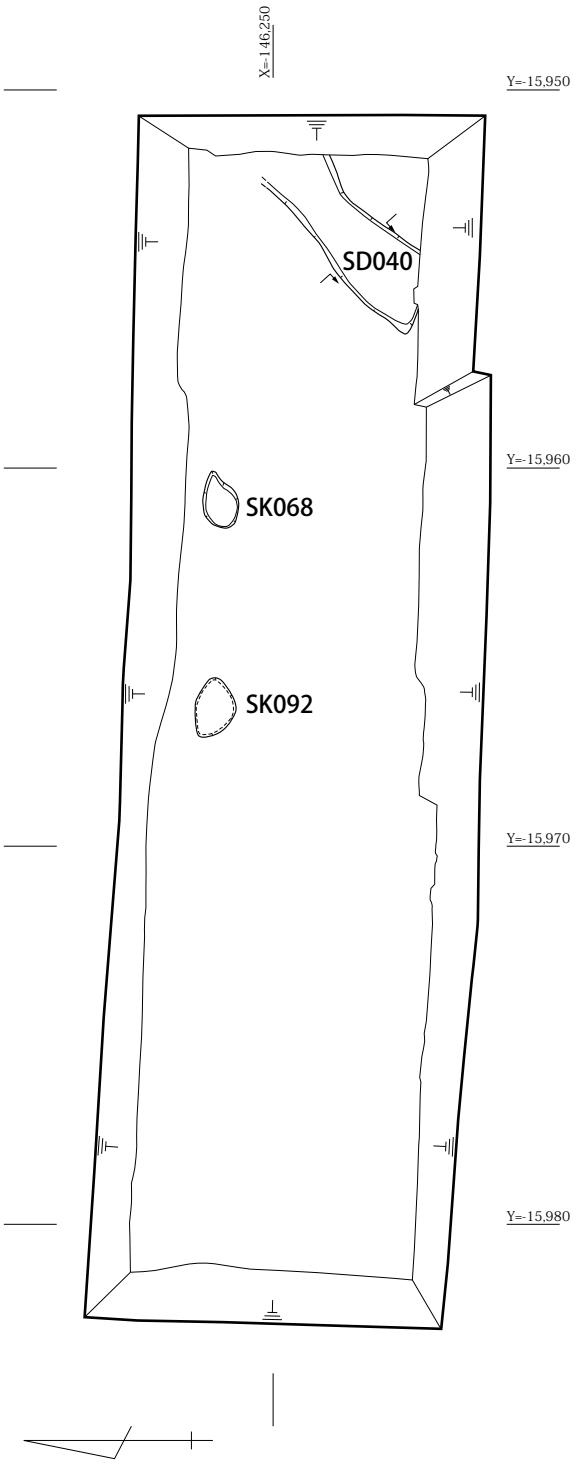
土師器皿（1 ～ 8）　これらは橙系の色調であるが、形態では浅いもの（1 ～ 7）と、やや深めのもの（8）がある。前者は、口径 6cm 台（1）、8 ～ 9cm 台（2 ～ 4）、12 ～ 13cm 台（5 ～ 7）がある。これらは口縁に強いナデ調整を行うもので厚手であるが、7 は比較的薄手で口縁はあまり開かない。胎土では、３・４・６・７には雲母が目立つ。後者の８は体部が大きく外に開くもので、胎土は前者に比べると比較的精良である。前者は 1 段階後半で、後者は２段階前半のものと思われる。

須恵器鉢（9・10）　東播系のものである。共に口縁部が灰色で周辺より濃くなっており、9 は端部がわずかに上方へ拡張する B1 －Ⅱ類、10 は上下に厚く拡張する B3 －Ⅱ類である。

瓦器椀（11 ～ 13）　これらは口縁端部に段をもつ大和型のもので、口径 12 ～ 13cm 台、ミガキ調整は外面が上半３分の 1 に数条、内面が幅２～ 3mm と間隔が広いことから、Ⅲ段階 C 型式のものと思われる。

これらの遺物は 13 世紀代のものが主体だが、8 のように 14 世紀前半のものも含まれる。

第１遺構面上



第１遺構面下

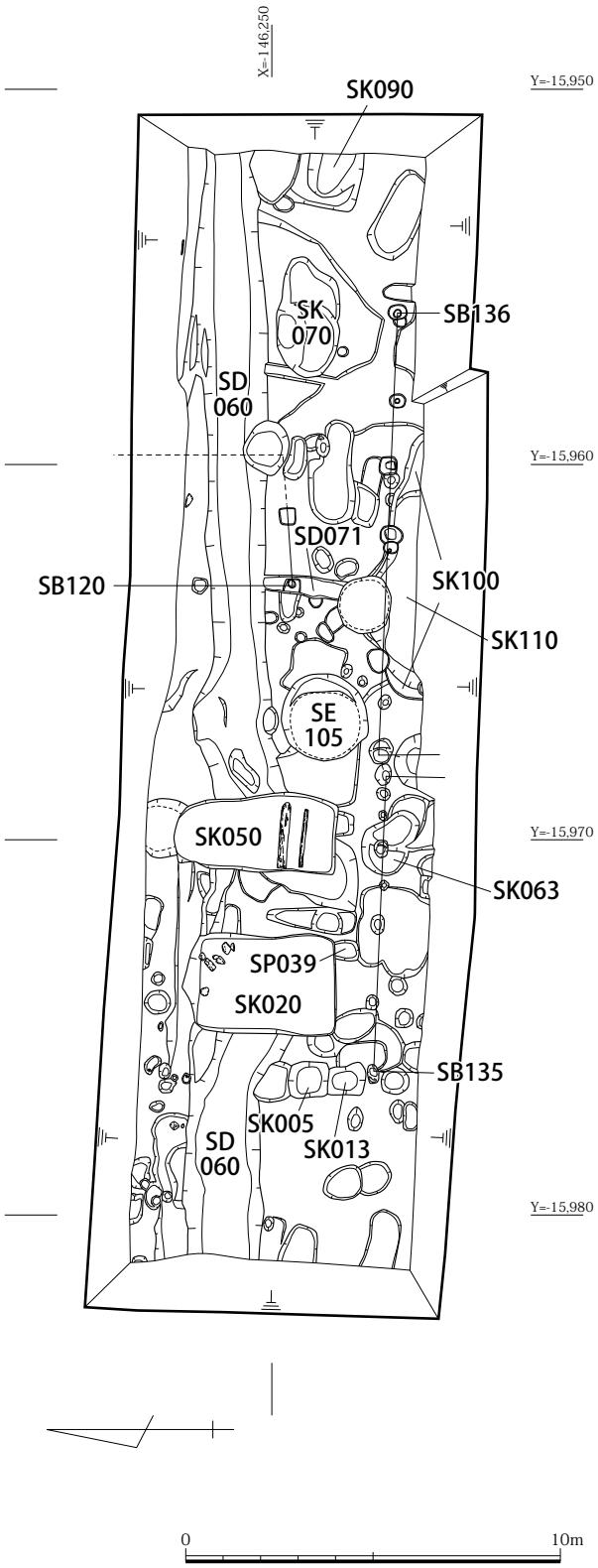
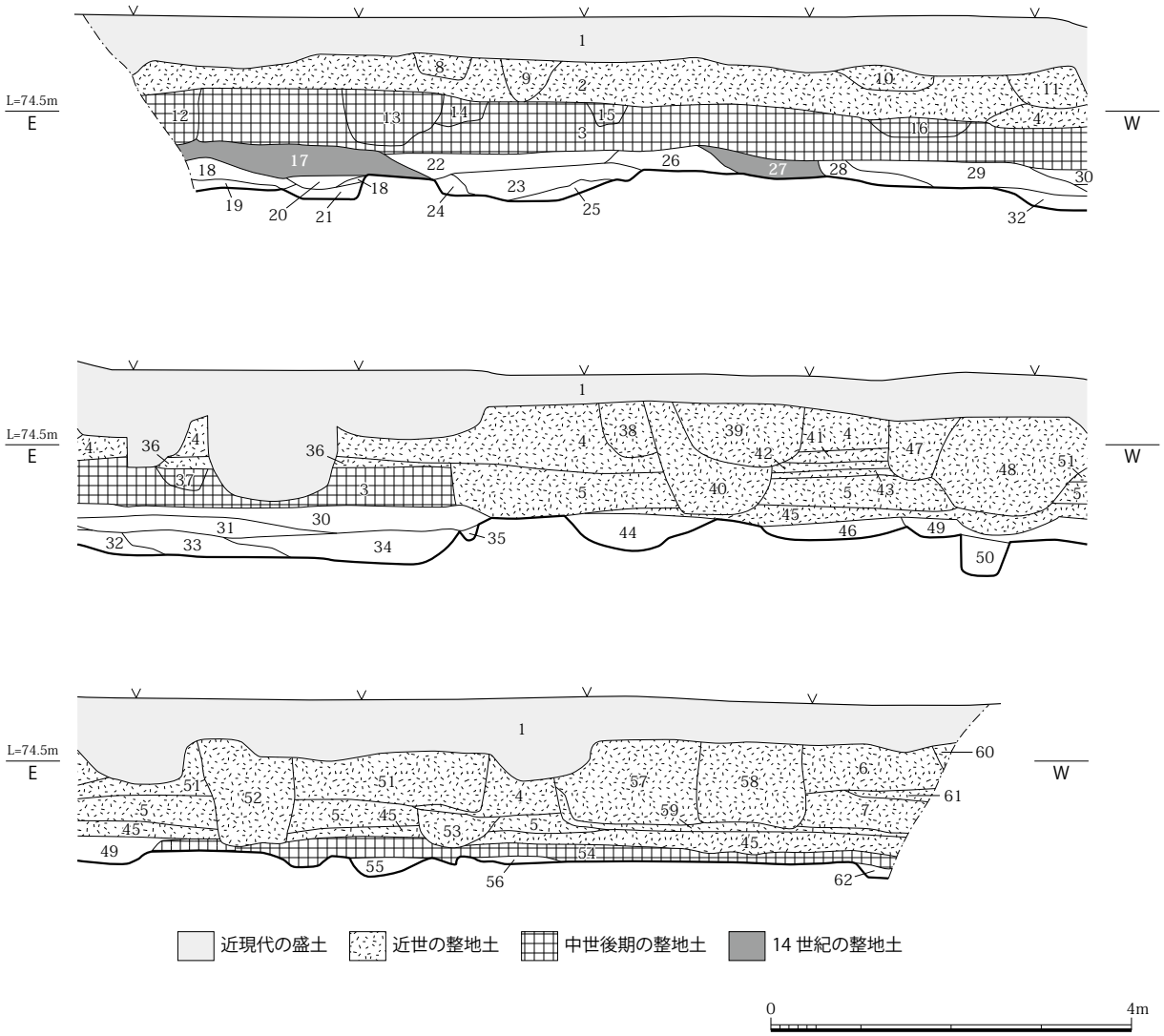


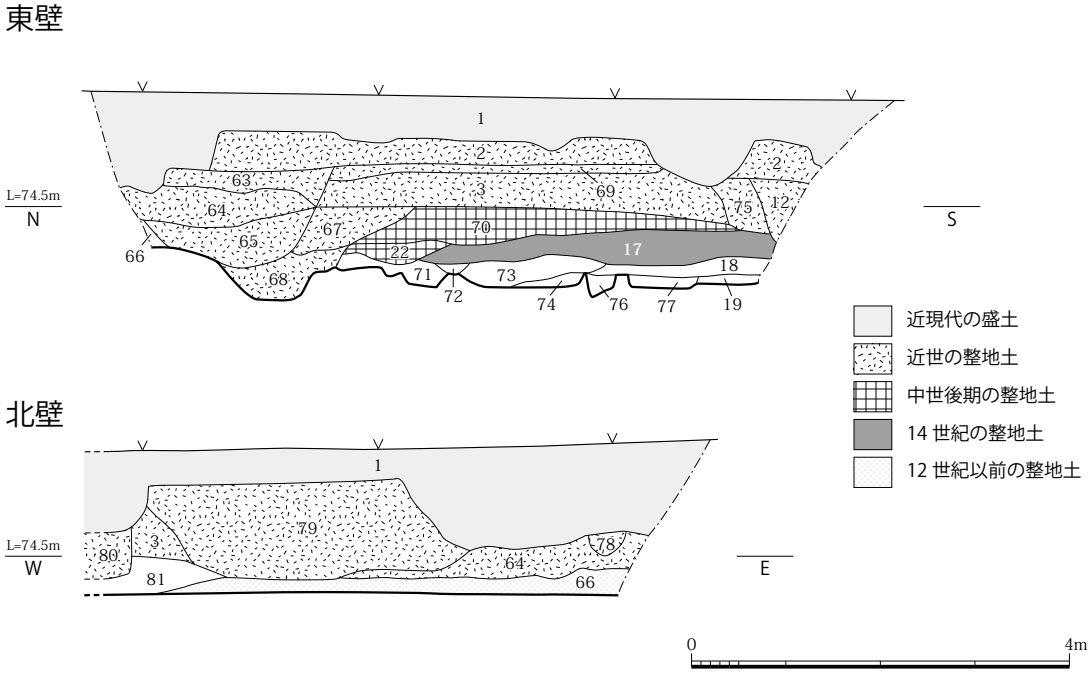
図３　全体平面図（S=1/200）

南壁



1. 盛土
2. 暗灰黄 2.5Y4/2 中粒砂（炭化物多量に含み、上部に亜角礫状地山ブロック集積）（18 世紀頃の整地土）
3. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 中粒砂（礫、炭化物多量、径 10 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロック少量含む）（中世後期の整地土）
4. 暗灰黄 2.5Y5/2 中粒砂混細砂（径 10mm 程度の礫、亜角礫状地山ブロック多量に含む）（近世の整地土）
5. オリーブ黒 2.5Y4/3 中粒砂（礫、焼土、炭化物均等に含む）（近世の整地土）
6. にぶい黄褐 10YR4/3 粗砂混シルト～細砂（径 30 ～ 50mm の亜角礫、径 10 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロックを含む）（近世以降の整地土）
7. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混細砂（径 5 ～ 50mm の亜角礫状地山ブロックを含む）（近世以降の整地土）
8. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 中粒砂（炭化物多量に含む）
9. オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂混中粒砂（礫、炭化物多量に含む）
10. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 中粒砂（炭化物多量に含む）
11. オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂混中粒砂（礫多量に含む）
12. オリーブ褐 2.5Y4/3 中粒砂（礫、焼土、炭化物少量含む）
13. 黄褐 2.5Y5/3 中粒砂（上部に多量の地山ブロック集積）
14. 暗灰黄 2.5Y4/2 中粒砂（土器片、焼土均等に含む）
15. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 粗砂混中粒砂（炭化物多量に含む）
16. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混中粒砂（礫多量に含む）
17. 黒褐 2.5Y3/2 粗砂混中粒砂（土器多量に含む）（SX080）
18. 黄褐 2.5Y5/4 粗砂（S-123）
19. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混中粒砂（S-123）
20. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 中粒砂（径 10mm 程度の亜角礫状地山ブロック少量含む）（S-77）
21. オリーブ褐 2.5Y4/3 中粒砂（径 10mm 程度の亜角礫状地山ブロック多量に含む）（S-129）
22. オリーブ褐 2.5Y4/3 中粒砂混細砂（径 20mm 程度の亜角礫状地山ブロック多量に含む）（SD040）
23. オリーブ褐 2.5Y4/3 中粒砂（径 10mm 程度の亜角礫状地山ブロック多量に含む）（S-130）
24. 黄褐 2.5Y5/6 細砂（地山ブロックが主体）（S-130）
25. 暗灰黄 2.5Y4/2 中粒砂（土器、焼土、炭化物少量含む）（S-130）
26. 黄褐 2.5Y5/4 粗砂混中粒砂（地山に起因する粗砂多量に含む）
27. オリーブ褐 2.5Y4/4 中粒砂（径 5 ～ 10mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）（段差を埋める整地土）（S-95）
28. オリーブ褐 2.5Y4/3 細砂混中粒砂（礫少量含む）（SK100）
29. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 中粒砂（52 層に比して礫少量）（SK100）
30. オリーブ褐 2.5Y4/3 細砂（礫、土器多量に含む）（SK100）

図 4　壁面土層断面図（1）（S=1/80）



31. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 中粒砂混細砂（礫、土器多量に含む）（SK100）
32. オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂混中粒砂（地山に起因する粗砂多量に含む）（S-117）
33. オリーブ褐 2.5Y4/4 粗砂（地山に起因する粗砂が主体）（S-117）
34. 暗オリーブ褐 5Y4/4 細砂（径 10mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）（SK110）
35. 暗オリーブ褐 5Y4/4 中粒砂（礫少量含む）（S-122）
36. 黄褐 2.5Y5/3 粗砂（礫多量に含む）（近世整地土）
37. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 中粒砂（圧縮された地山ブロック多量に含む）
38. オリーブ褐 2.5Y5/6 中粒砂混粗砂（礫多量に含む）
39. オリーブ褐 2.5Y5/6 細砂（ブロック土が主体）
40. にぶい黄 2.5Y6/3 中粒砂（径 50 ～ 100mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
41. オリーブ褐 2.5Y4/3 細砂（礫、炭化物多量に含む）（近世整地土）
42. オリーブ褐 2.5Y4/4 中粒砂（地山ブロックが主体）（近世整地土）
43. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 中粒砂（炭化物多量に含む）（近世整地土）
44. 暗灰黄 2.5Y4/2 中粒砂（S-124）
45. にぶい黄褐 10YR4/3 細砂（径～ 10mm の亜角礫状地山ブロック、径 20 ～ 50mm の亜角礫を含む）（近世の整地土）
46. 黄褐 2.5Y5/4 中粒砂（礫、径 30 ～ 50mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）（S-57）
47. 黄褐 2.5Y5/3 細砂混中粒砂（瓦多量に含む）
48. 黄褐 2.5Y5/3 中粒砂（礫、径 50 ～ 100mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
49. 黄褐 2.5Y5/3 細砂（礫、径 10mm 程度の亜角礫状地山ブロック少量含む）
50. オリーブ褐 2.5Y4/4 中粒砂（径 10 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）（S-43）
51. にぶい黄 2.5Y6/4 細砂（地山ブロックが主体）（近世の整地土）
52. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂混中粒砂（礫、瓦、径 30mm 程度の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
53. オリーブ黒 2.5Y4/3 中粒砂（礫、径 30mm 程度の亜円礫状シルトブロックを含む）
54. 暗褐 10YR3/3 粗砂混シルト（炭化物少量含む）（16 世紀後半～ 17 世紀前半の堆積）
55. 黄褐 2.5Y5/4 細砂（径 30 ～ 50mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）（S-21）
56. 明黄褐 2.5Y6/6 細砂（瓦、径 50mm 程度の亜角礫状地山ブロックを含む）（S-4）
57. オリーブ褐 2.5Y4/3 中粒砂（径 50 ～ 100mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）（近世の整地土）
58. 黄褐 2.5Y5/3 粗砂混中粒砂（径 200mm 程度の礫、径 50 ～ 100mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）（近世の整地土）
59. 暗褐 10YR3/3 細砂（径～ 10mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）（近世の整地土）
60. にぶい黄褐 10YR4/3 粗砂混細砂（径 300mm 程度の礫を含む）（カクラン）
61. 褐 10YR4/4 粗砂混細砂（径 5 ～ 20mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）（近世以降の整地土）
62. 暗褐 10YR3/4 細砂～粗砂（径 5 ～ 30mm の亜角～亜円礫が主体）（ベース）
63. 明黄褐 2.5Y6/8 粗砂（塊状構造を持ち、礫多量に含む）
64. 黄褐 2.5Y5/3 粗砂混中粒砂（径 10 ～ 50mm の亜角礫状地山ブロック、礫多量に含む）
65. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂混中粒砂（径 10 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロック、礫多量に含む）
66. オリーブ褐 2.5Y4/3 シルト混細砂（整地土）
67. 黒褐 2.5Y3/2 中粒砂（炭化物、礫多量に含む）
68. 灰オリーブ 5Y4/4 細砂（SD060）
69. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂（径 10 ～ 30mm の礫多量に含み、非常に良く締まる）（江戸時代後期の整地土）
70. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 中粒砂（礫、炭化物を均等に含む）（中世後期の整地土）
71. オリーブ褐 2.5Y4/3 細砂（地山ブロックが主体）（S-77）
72. 暗灰黄 2.5Y5/2 中粒砂（土器、礫多量に含む）
73. 黒褐 2.5Y3/2 細砂（SK090）
74. オリーブ褐 2.5Y4/3 細砂（地山ブロックが主体）（SK090）
75. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 中粒砂（礫、炭化物多量に含む）
76. オリーブ褐 2.5Y4/3 中粒砂（径 10 ～ 20mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）（S-134）
77. オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂混中粒砂（径 10mm 程度の亜角礫状地山ブロック、炭化物少量含む）（S-128）
78. オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂混中粒砂（礫多量に含む）
79. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 中粒砂（径 100 ～ 200mm の大型礫多量に含む）
80. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂混中粒砂（径 50 ～ 100mm の礫多量に含む）
81. 黄褐 2.5Y5/3 中粒砂（径 20 ～ 50mm の亜角礫状シルトブロック多量に含む）

図 5　壁面土層断面図（2）（S=1/80）

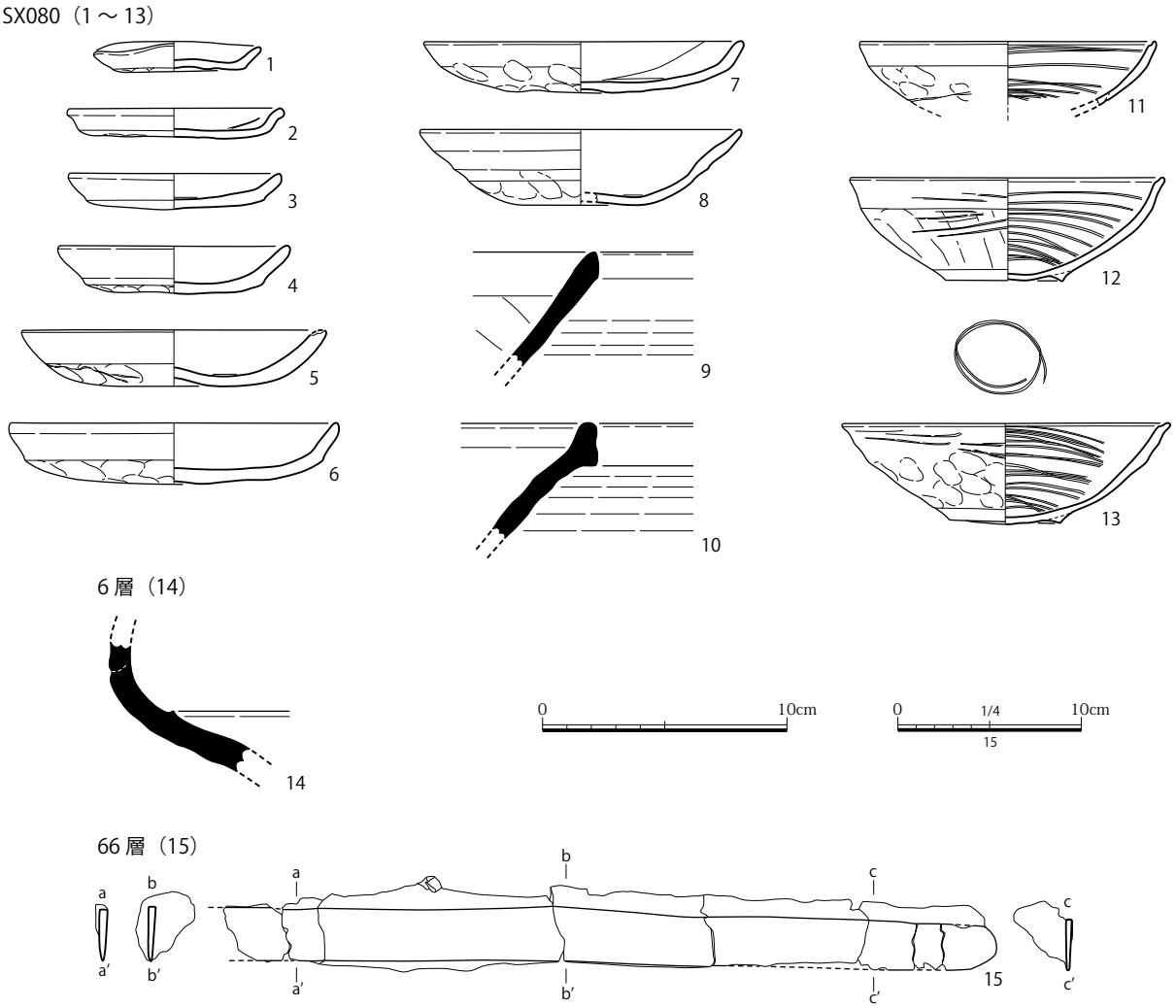


図６　整地土出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

6 層出土遺物（図 6、図版 16）

輸入陶器壺（14）　タイ産の黒釉壺の頸部である。1 条の突線を有するもので、胎土は灰色で砂粒を少量含み、外面は緑黒色の釉が掛けられるが、二次焼成を受け器面が泡立ち灰白色に変色している。シーサッチャナライ窯の長頸壺で、15 世紀代のものである。

66 層出土遺物（図 6、図版 17）

金属製品（15）　直刃の鉄刀で、銹化が激しく、最大幅 2.9cm、最大厚 0.4cm、現存長 42.2cm を測る。刃先はやや丸みを帯び、刀身は直線的である。刃部が非常に薄いのが特徴であり、実用品であるか疑問である。年代等についても不明である。

第 2 節　14 世紀以前の遺構と遺物

第 1 項　遺構

建物

SB120（図 7）

調査区東半で検出した掘立柱建物で、SD071 の下層から確認されている。後世の遺構で柱穴が削平

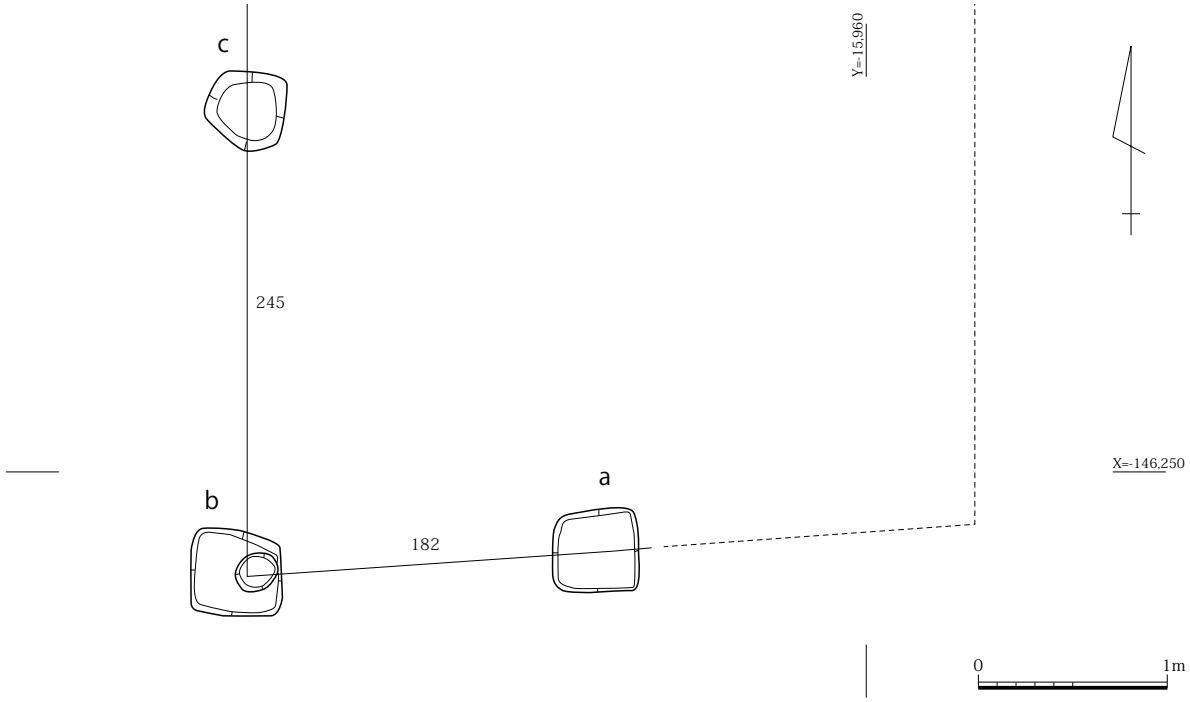


図 7　SB120 平面図（S=1/40）

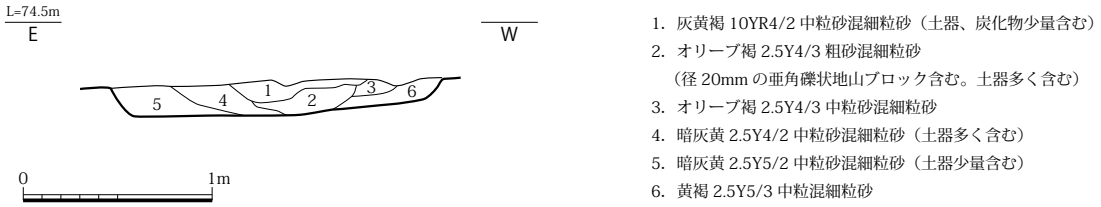


図 8　SD040 土層断面図（S=1/40）

されている部分もあるが、隅丸方形を呈する柱穴が矩形に並ぶことから掘立柱建物とした。東西二間、南北一間以上で、南北柱筋はほぼ座標北に一致する。北半部は調査区外に延びるため、全形は不明である。柱間は東西 1.8m、南北 2.5m を測り、柱穴は一辺 0.5m 前後の隅丸方形を呈するが、北側の柱穴はやや不整形である。残存する柱痕跡からは直径約 0.2m の柱の存在が想定される。深さ 5 ～ 10cm と浅く、削平を受けているものと思われる。

中世後期である SD071 の下層から検出されたことと柱穴の形状から、古代に遡る可能性が高い。ただ、柱穴の出土遺物が小片であるため、時期の特定は困難である。

溝

SD040（図 8、図版 4）

調査区東端で SK090 などの上面で検出した溝である。南西から北東に向き、平面形態は直線的で、幅 1.6 ～ 2.0 m、現存長 5.6 m、深さ 0.2 ～ 0.3 mである。北東側が調査区外に延びるため、全形は不明である。その形状や規模から、何らかの区画の可能性などが考えられる。

出土遺物には、中世の土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器類、瓦、鉄滓などがあり、その時期は 12 世紀半ば～ 14 世紀前半である。

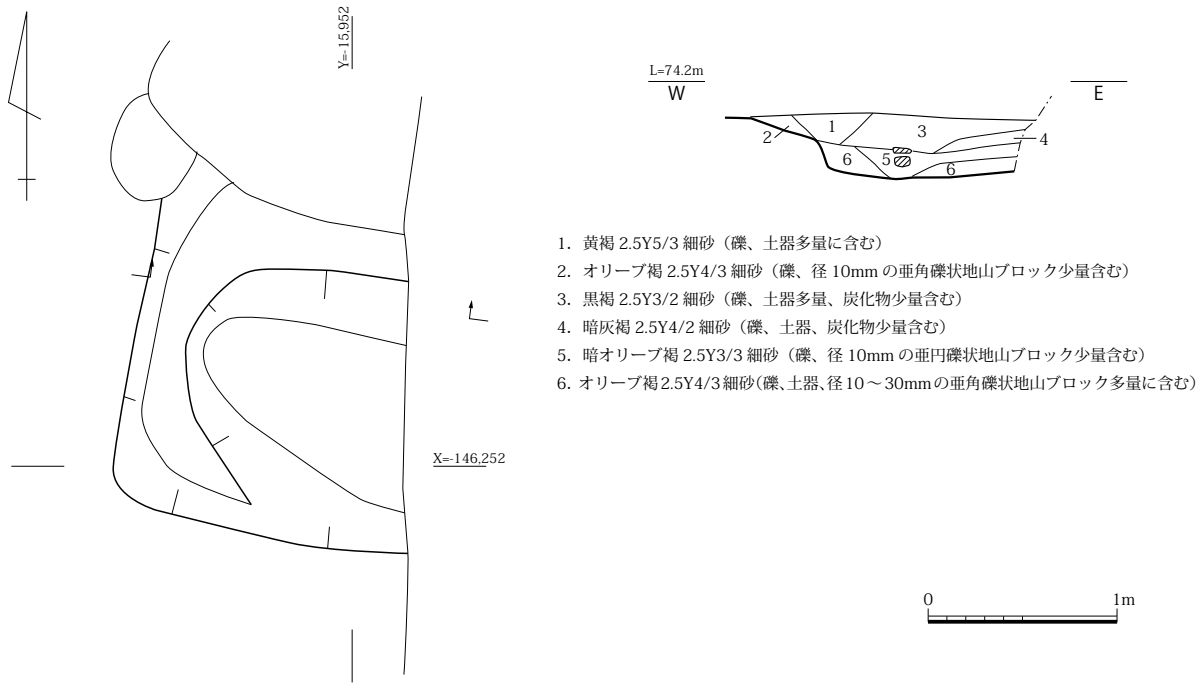


図９　SK090 平面・土層断面図（S=1/40）

土坑

SK063

調査区中央で検出した土坑である。平面形態はややいびつな楕円形を呈し、東西長 1.9 m、南北長 1.2 m、深さ 0.2m 前後を測る

出土遺物には、中世の土師器、瓦質土器、陶磁器類、瓦、鉄滓などがあり、その時期は 13 世紀後半～ 14 世紀前半である。

SK090（図 9、図版 4・5）

調査区東端で検出した土坑である。東側は調査区外に延び、北側は新しい段階の遺構に切られている。検出部分での平面形態は隅丸方形状を南北長 1.9m、東西長 1.6m、深さ 0.4m を測る。底面は南半が楕円形にさらに窪んでいる。埋土は礫や土器、炭化物を含む細砂である。

出土遺物には古代の須恵器、中世の土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器類、瓦類、鞴羽口、鉄滓のほか、土馬や埴輪などがある。主体的な遺物は 13 世紀前半のものである。

第２項　遺物

溝

SD040 出土遺物（図 10、図版 17）

土師器皿（16 ～ 18）　これらは橙系の色調で口縁に強いナデ調整を行う厚手の一群であるが、口縁端部が直立気味である。口径が分かるもの（16・17）は、12cm 台である。1 段階前半～中頃にあたるものと思われる。

土師器釜（19）　口縁端部を内側に折り曲げる器壁が厚いもので、大和 H_2 型である。

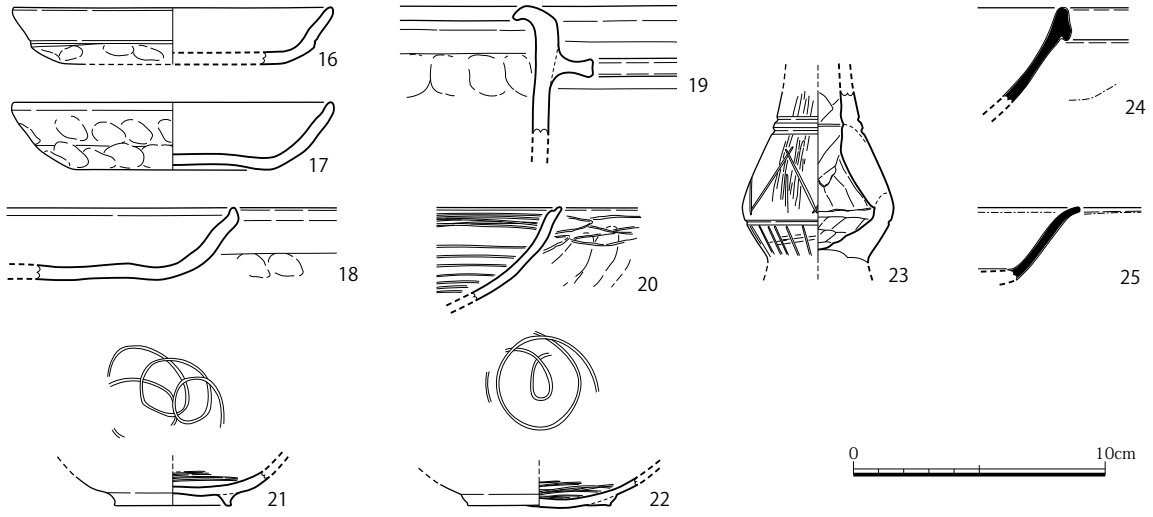


図 10　SD040 出土遺物実測図（S=1/3）

瓦器椀（20 ～ 22）　これらは口縁端部に段をもつ大和型のもので、内面のミガキ調整は隙間がみられつつも比較的密であるが、21・22 の見込みのらせん状暗文はやや粗く、Ⅱ段階 B ～Ⅲ段階 B 型式に収まるものである。

瓦質土器瓶（23）　脚台が付く花瓶である。算盤珠状の胴部に下半は縦方向のみ、上半は山形状に短沈線を描く。焼成はやや不良で、かなり厚めの紐もしくは板状の粘土をつなぎ合わせて成形している。

輸入白磁椀（24）　玉縁状口縁で、胎土には気泡がみられる。椀Ⅳ類である。

輸入白磁皿（25）　口縁端部を釉剥ぎした口禿のものである。A 群である。

これらの遺物は、12 世紀半ばのものを含むが、下限は 14 世紀前半である。

土坑

SK063 出土遺物（図 11、図版 17）

土師器皿（26 ～ 30）　これらは橙系の色調で口縁に強いナデ調整を厚手の一群であるが、口縁端部が直立気味である。口径 9cm 台（26 ～ 28）、11cm 台（29・30）がある。概ね 1 段階後半にあたるものと思われる。

これらの遺物は、13 世紀後半～ 14 世紀前半のものである。

SK090 出土遺物（図 11、図版 18・19）

土師器皿（31 ～ 37）　これらは橙系の色調で口径 8 ～ 9cm 台（31 ～ 34）、12 ～ 13cm 台（35 ～ 37）がある。口縁に強いナデ調整を施す厚手の一群であるが、後者は口縁端部が直立気味である。概ね 1 段階中頃にあたるものと思われる。

瓦器皿（38・39）　共に見込みにジクザク状の暗文ミガキを施したものであるが、38 は丸底、39 は平底である。

瓦器椀（40 ～ 45）　これらは口縁端部に段をもつ大和型のもので、口径 13 ～ 14cm 台である。ミガキ調整は外面が上半 3 分の 1 に数条だが、内面見込みにらせん状の暗文がみられることから、Ⅲ段階 B 型式のものと思われる。

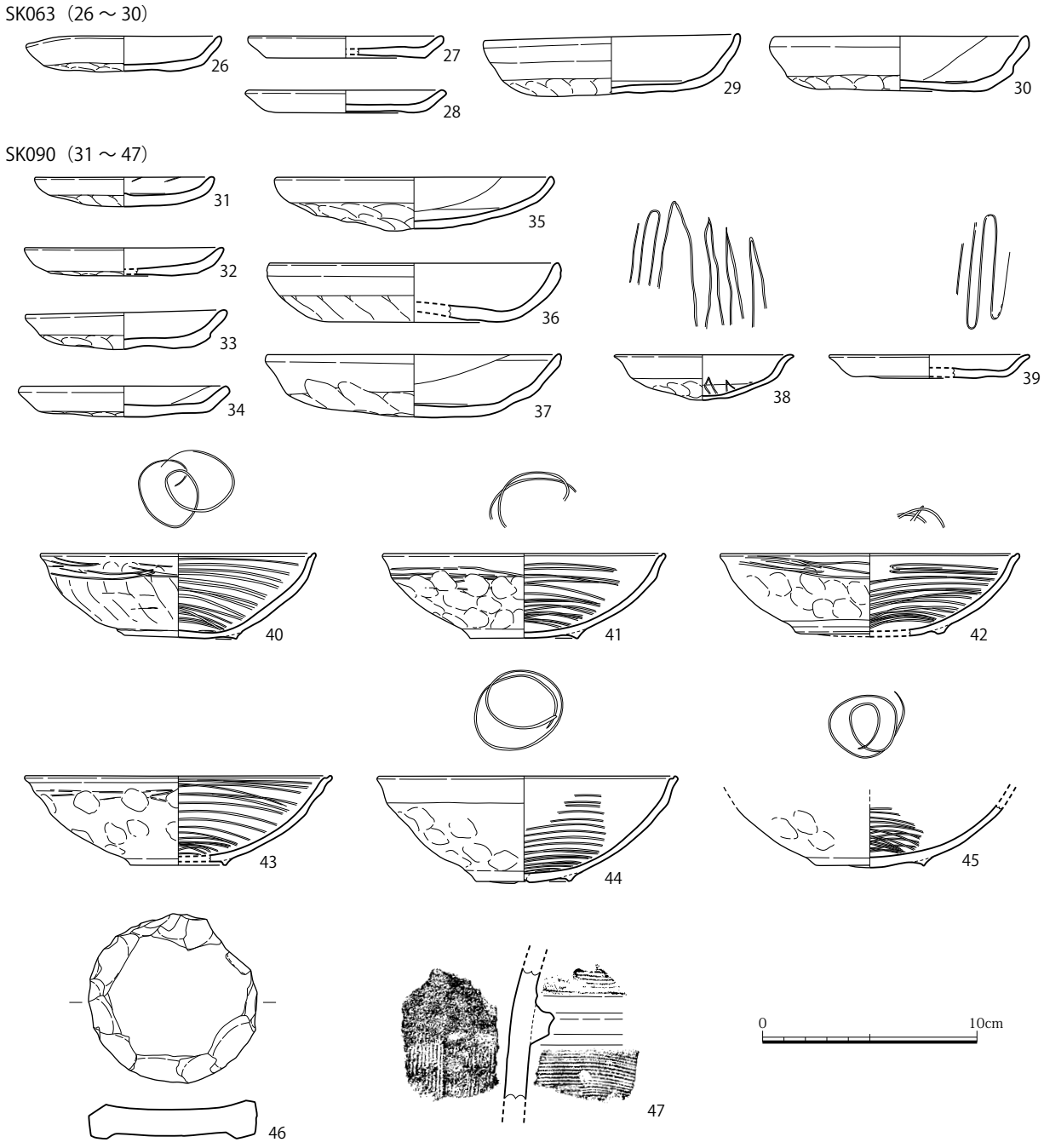


図 11　SK063・090 出土遺物実測図（S=1/3）

土製品（46）　11 世紀後半～ 12 世紀前半の白磁椀Ⅳ類の底部を素材とした土製円板である。

埴輪（47）　円筒埴輪で浅いＭ字状のタガを有し、外面はＢ種ヨコハケ調整、内面はタテハケ調整が残る。

これらの遺物は、埴輪（47）は古墳時代中期、土製円板（46）は 12 世紀前半のものだが、主体は 13 世紀前半のものである。

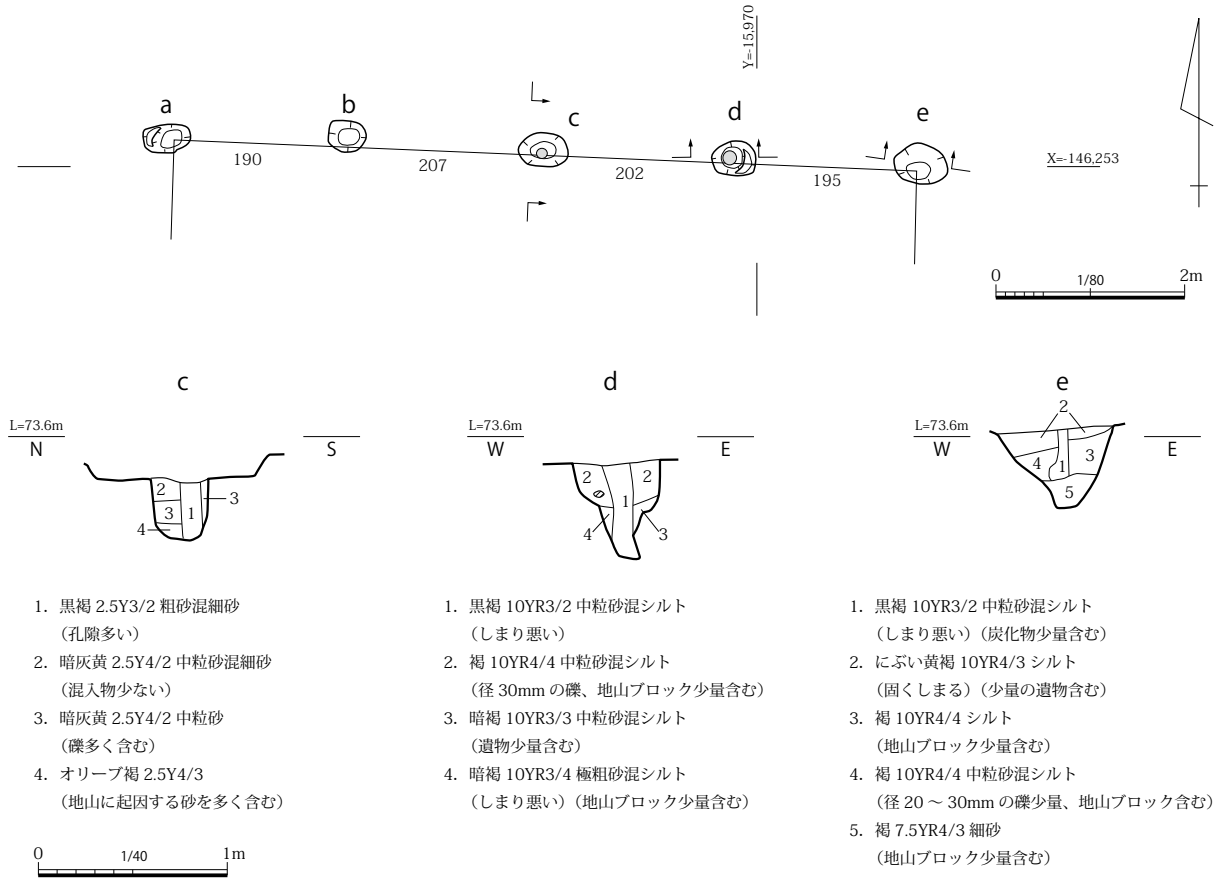


図 12　SB135 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

第 3 節　15 世紀～ 17 世紀前半の遺構と遺物

第 1 項　遺構

建物

SB135（図 12、図版 5）

調査区南側の西寄りで検出した掘立柱建物である。調査区南端近くで東西方向に四間分の柱穴列が検出され、調査区外に柱列が連続すると想定し、掘立柱建物とした。東西四間、南北は不明であり、東西は 7.9m を測る。方位は東側で南に 2° 24′ 振っている。柱間はもの 1.9 ～ 2.1m で西端柱間のみ 1.9m とやや狭い。柱穴は直径が 0.4 ～ 0.6m 前後であり、東西方向に長い不整な楕円形を呈するものが多い。残存する柱痕跡からは直径約 0.1m の柱の存在が想定される。

なお、掘立柱建物としたが、今回の調査地は南側に率川神社が隣接しており、神社の北側を画する何らかの柵列である可能性もあることを付記しておく。

柱穴からは古代の須恵器、中世の土師器、瓦質土器、陶磁器類、瓦類、鉄滓などが出土しており、16 世紀後半を下限とする。

SB136（図 13、図版 6・7）

調査区南側の東寄りで検出した掘立柱建物である。東西方向に五間分の柱穴列を直列した形で検出しており、柱間寸法にばらつきはあるが、掘立柱建物とした。西側の SB135 とは近接し、両者の柱穴列はほぼ一直線上に並ぶ。東西は 11.7m を測り、各柱間は柱穴の芯々間で西から 2.5m、3.4m、1.8m、1.7m、

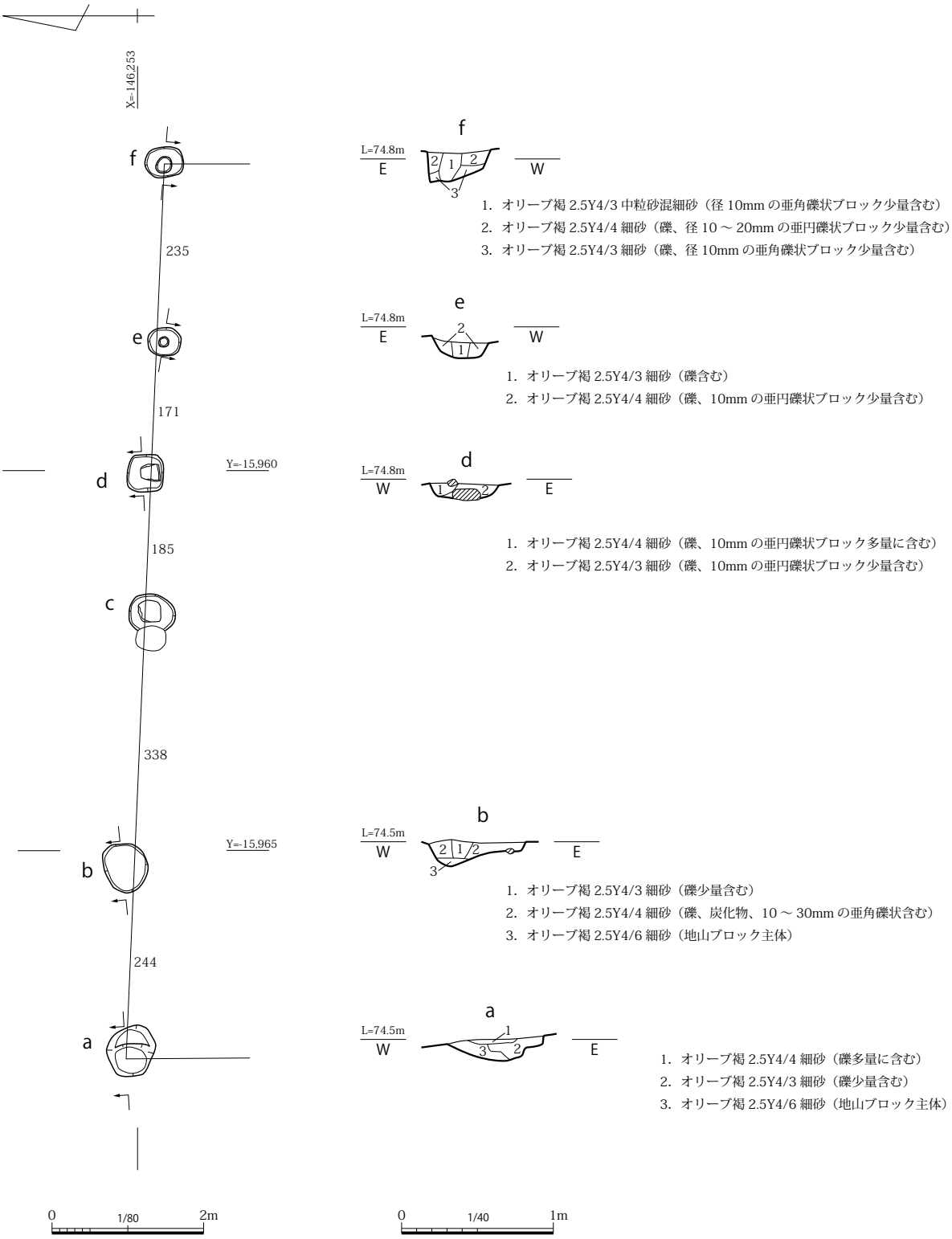


図 13　SB136 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

2.3m である。方位は東側で南に 2° 26′ 振っており、SB135 とほぼ同じである。柱穴の径 0.4 ～ 0.7m 前後、深さ 0.1 ～ 0.2m 前後で全体に浅い。柱穴 d が隅丸方形を呈する以外は不整な円形である。柱穴 c、d では柱穴掘方中央から扁平な石が底面に接する形で出土しており、柱穴底面の地盤が強固であることを考えると、礎板というよりも礎石としての機能を考えるのが穏当である。また、柱穴 e、f では平面・断面の観察により、土質の違いによる直径約 0.1m の柱痕が確認されている。

当該建物についても、柱間間隔にややばらつきがあるなど、SB135 と同様、東西方向の柵列であった可能性が残されているが、柱穴の深さや、礎石の存在を考慮すると、建物と考えるべきであろう。

柱穴からは古代の須恵器、中世の土師器、瓦質土器、陶磁器、瓦類、鉄滓のほか、埴輪などが出土しており、16 世紀を下限とする。

柱穴

SP039

調査区西半部で検出したピットで、重複関係より SK020 より古い。平面形態は不整な楕円形で、径 0.5 ～ 0.6 m、深さ 0.1m 前後である。

出土遺物には、古代の土師器、中世の土師器、瓦器、瓦質土器、陶磁器類、瓦、鉄滓などがあり、その主体は中世後期のものである。

溝

SD060（図 14、図版 8）

調査区北寄りを東西に貫く溝である。検出長は 29.5m で、ほぼ正方位である。幅 1.7 ～ 1.9m、深さは 0.4 ～ 0.8m を測り、底面の標高は東側で約 73.5m、西側で 73.0m で、東から西に向かって緩やかに傾斜している。埋土下層には細粒～中粒砂がラミナを形成して堆積しており、流水があったことが窺われる。西半部では埋土の上層から礫のほか土器、鉄滓、獣骨が多量に出土しており、埋没過程で廃棄されたものと考えられる。

出土遺物には古代の須恵器、中世の土師器、瓦質土器、陶磁器類、瓦類、鉄滓のほか、埴輪などがある。下層では 15 世紀代のものがやや多くみられるが、全体的には 15 世紀～ 16 世紀前半と時期幅がある。

なお、この溝は西半部の SK020・050 付近において、南側に 2m ほど意図的に湾曲させている。溝の掘削段階において、その直線上に避けなければいけない施設等があった可能性が想定される。SK050 に埋置されていた根切りされた切り株がその候補となりうるものの、それを確定づける痕跡は確認できなかった。

この溝は位置や規模などから土地を区画するものと考えられるが、南側で検出している 2 棟の建物跡の柱穴列が柵などの施設であった場合、調査区南側に隣接する率川神社と関連する区画溝であった可能性もある。

SD071

調査区中央で検出された溝である。長軸はほぼ真北を向け、平面形態は長方形であるが両端とも他の遺構で切られ、幅 0.6 m、現存長 2.0 m、深さは 5cm である。形状、規模からは素掘り小溝の可能性もあるが、本調査区では同種のものはみられない。

出土遺物には、古代の須恵器、中世の土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器類、瓦、坩堝、鞴羽口、鉄滓、獣骨などがあり、その主体は中世後期のものである。

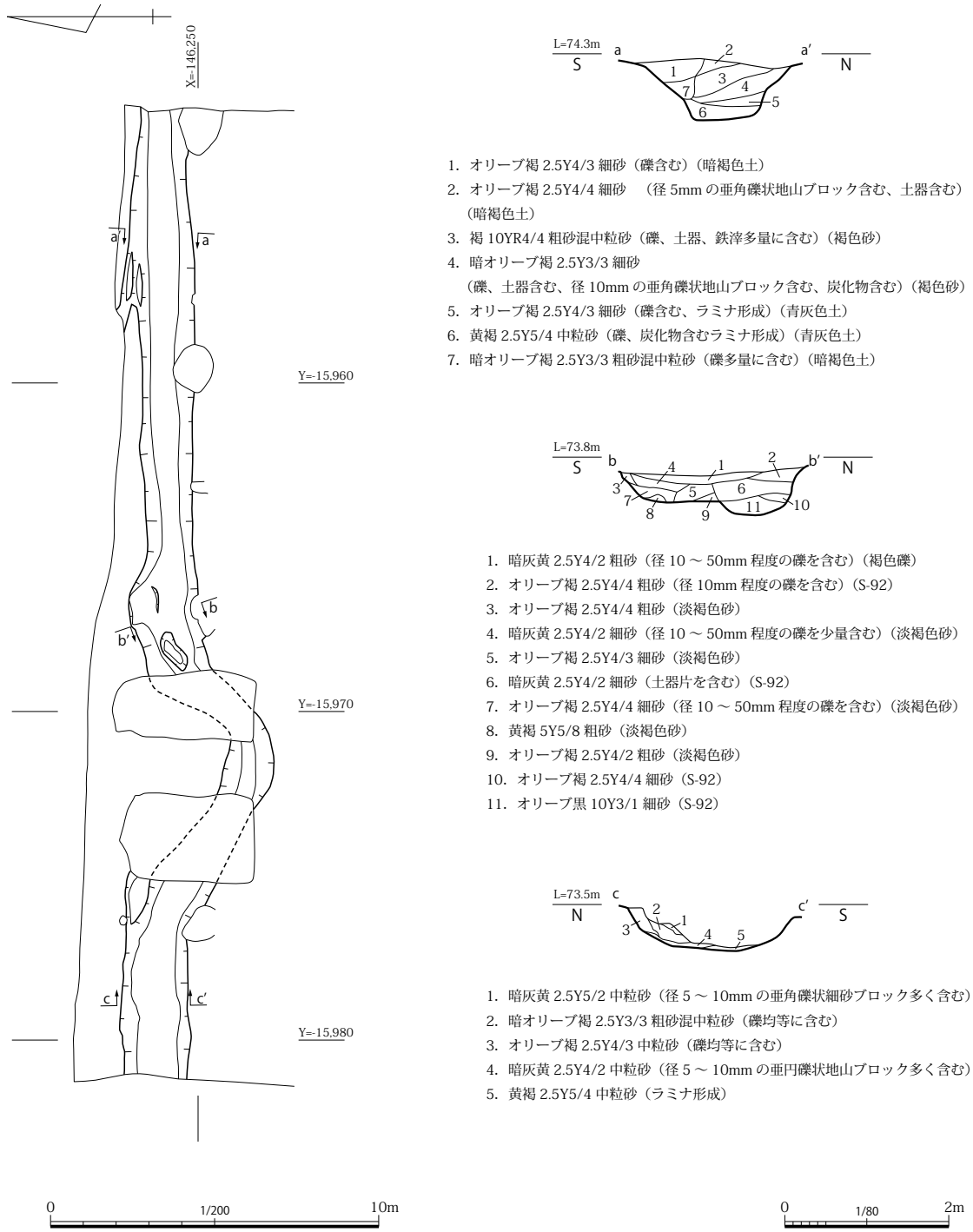
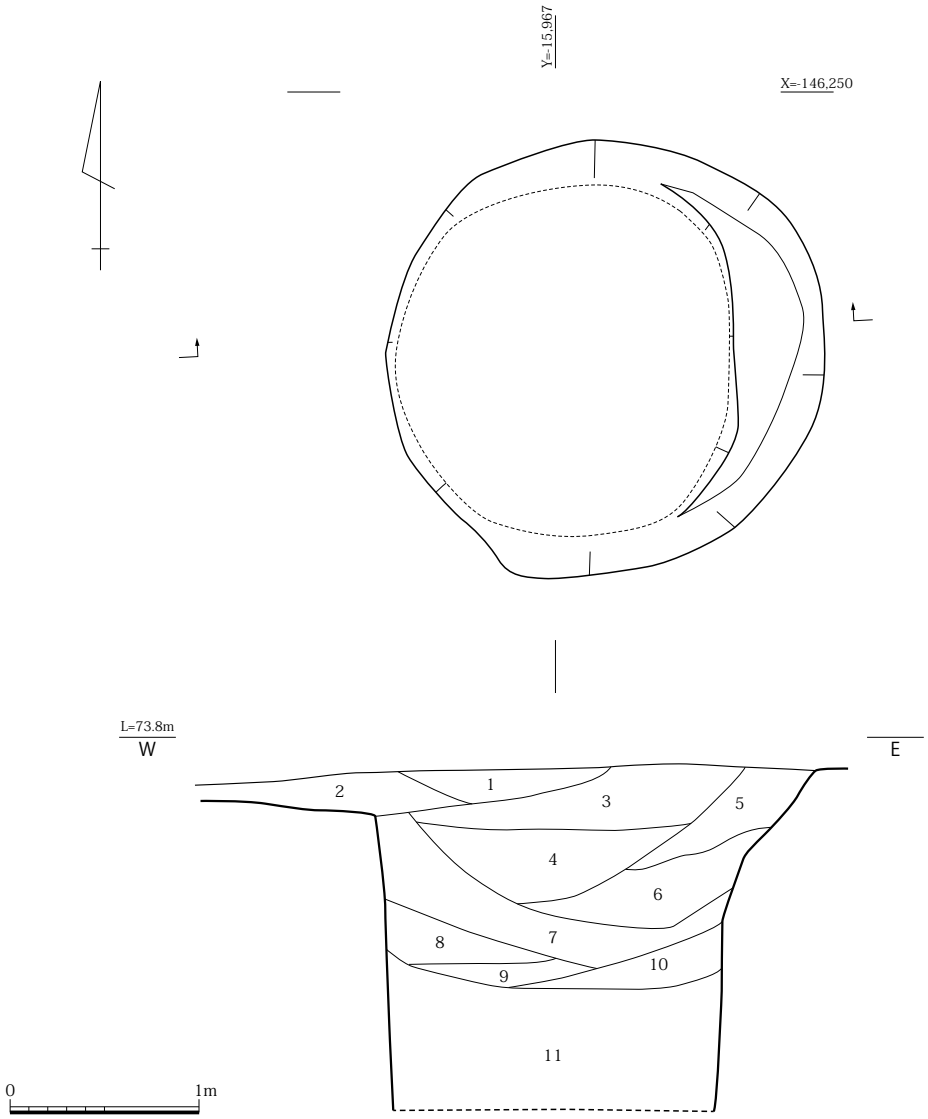


図 14　SD060 土層断面図（平面 S=1/200・断面 S=1/80）

井戸

SE105（図 15、図版 9）

調査区中央で検出した井戸である。検出面では直径 2.3m 前後を測り、円形を呈する。検出面から -1.8m まで掘削したが、井戸底面を確認できず、工事との関係上、断ち割りもできなかった。したがって、正確な深さと下層の堆積状況等の詳細は不明である。掘削限界での井戸の直径は 1.7m である。井戸枠はその痕跡を含めて確認できなかった。埋土は地山ブロックや炭化物を含んでおり、機能時の堆積



1. オリーブ褐 2.5Y4/4 細砂（S-103）
2. オリーブ褐 2.5Y4/3 細砂（S-103）
3. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 細砂（径 10 ～ 80mm 程度の礫、炭化物を含む）（黒褐色土）
4. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 細砂（土器片、径 30mm 程度の亜角礫状地山ブロックを含む）（黒褐色土）
5. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 細砂（炭化物を含む）（黒褐色土）
6. 黒褐 2.5Y3/2 細砂（径 10 ～ 30mm の礫、土器片を含む）（暗灰色土）
7. 黒褐 2.5Y3/2 粗砂混中粒砂（炭化物を多く含む）（暗灰色土）
8. 黒褐 2.5Y3/3 粗砂混中粒砂（礫、径 30mm 程度の亜角礫状地山ブロック多く含む）（暗褐色土）
9. 黒褐 2.5Y3/3 中粒砂（径 30 ～ 50mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）（暗褐色土）
10. 暗灰黄 2.5Y4/2 中粒砂（径 30mm 前後の亜角礫状地山ブロックを含む）（暗褐色土）
11. 黒褐 2.5Y3/2 粗砂混中粒砂（炭化物、亜角礫状地山ブロックを含む）（暗褐色土）

図 15　SE105 平面・土層断面図（S=1/40）

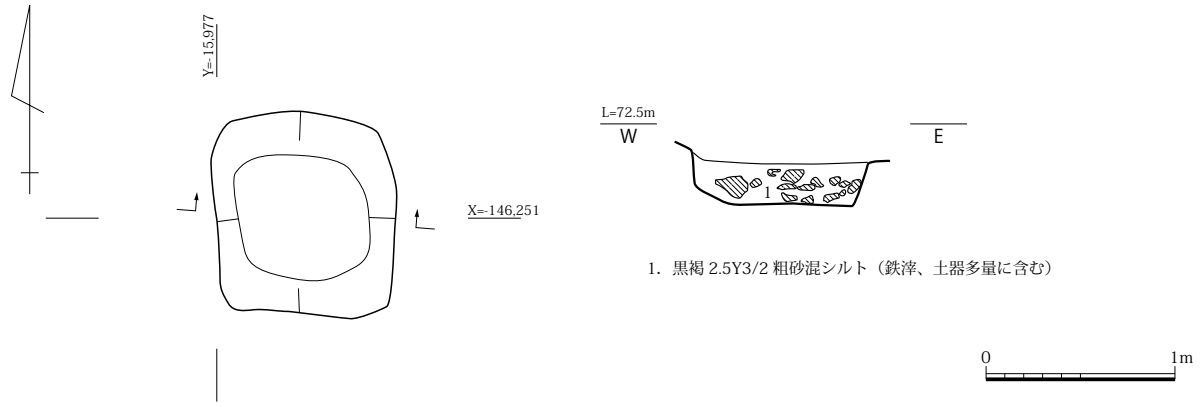


図 16　SK005 平面・土層断面図（S=1/40）

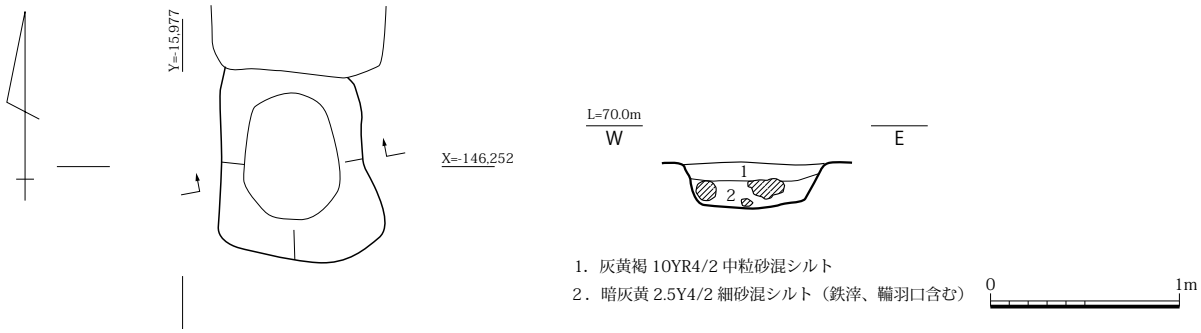


図 17　SK013 平面・土層断面図（S=1/40）

ではなく、廃絶後の人為的な埋め戻し土である。

出土遺物には、古代の須恵器、中世の土師器、瓦質土器、陶磁器、瓦類、漆器、鉄滓などがある。下層は 16 世紀後半のものが主体で、上層では唐津焼や小片のため図化できなかった肥前産染付が出土していることから、17 世紀前半以降が下限である。

土坑

SK005（図 16、図版 10・11）

調査区西寄りで検出した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し、南北長 1.1m、東西長 1.0m、深さ 0.2m を測る。埋土は黒褐色を呈する単一土であり、全体に椀形鉄滓を含む鉄滓や土器などを多量に含んでいる。

出土遺物には、中世の土師器、須恵器、瓦質土器、瓦類、鞴羽口、大量の鉄滓がみられ、土器類は中世後期のものが主体である。

当該土坑のみならず、調査区の西半部では鉄滓や鞴羽口などが集中して出土しており、炉跡などの検出はみられないものの、調査区周辺近くで鍛冶が行われていたと考えられる。そのような観点で当該土坑をみた場合、鉄滓などの廃棄土坑と考えることも可能である。

SK013（図 17、図版 10・11）

調査区西寄りで検出した土坑である。平面形態はややいびつな隅丸方形を呈し、南北長 1.0m、東西

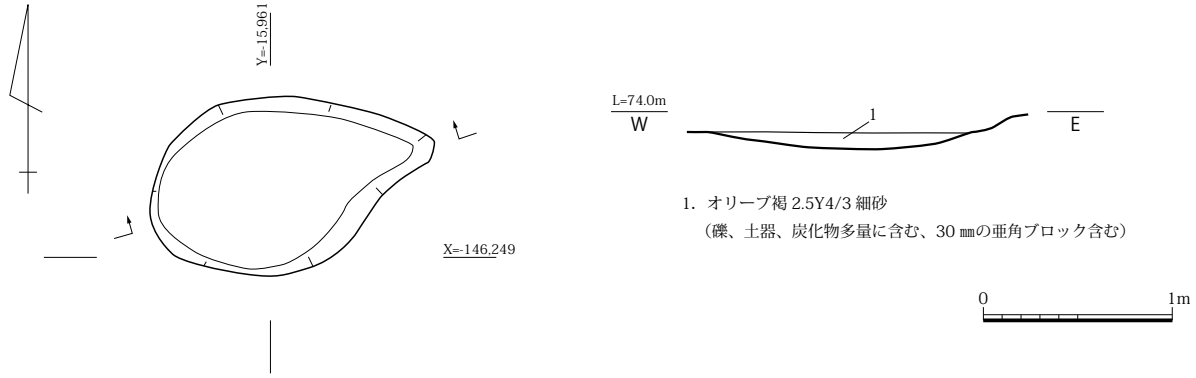


図 18　SK068 平面・土層断面図（S=1/40）

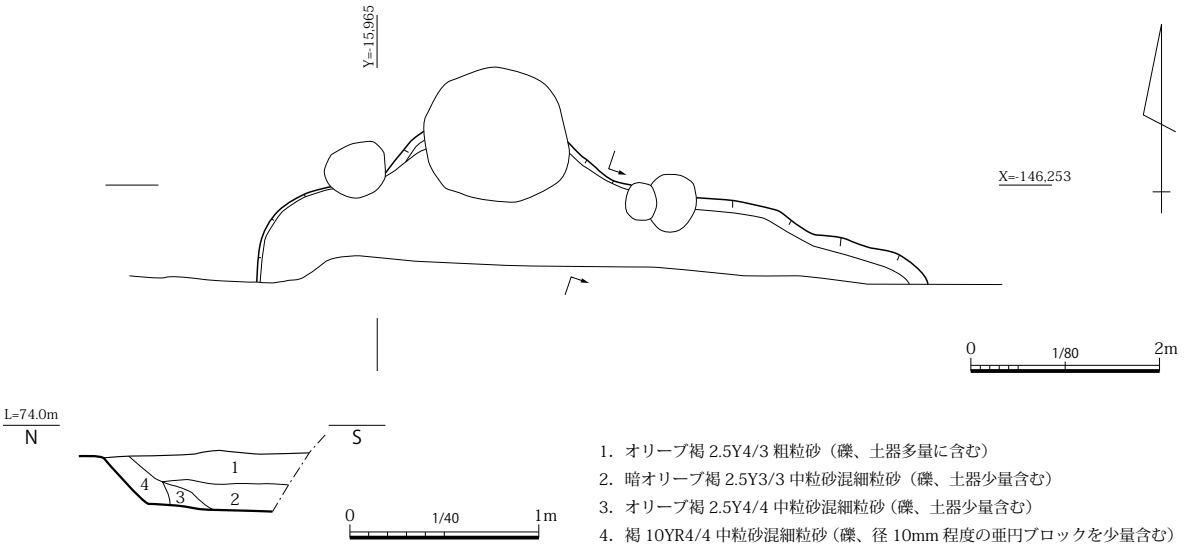


図 19　SK100 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

長 0.9m、深さ 0.2m である。形状・規模からは隣接する SK005 と類するが、埋土はやや明るく褐色系を呈している。

出土遺物には、中世の土師器、瓦質土器、陶磁器類、瓦、鞴羽口、鉄滓、骨などがあり、その主体は中世後期のものである。

SK068（図 18、図版 11）

調査区東寄りで、SD060 の上面で検出した土坑である。平面形態はややいびつな楕円形で、南北長 1.0 m、東西長 1.5 m、深さ 0.1m である。埋土には礫、炭化物、遺物が多く含まれる。

出土遺物には、中世の土師器、瓦質土器、陶磁器類、瓦、鉄滓、漆付不明製品などがあり、17 世紀のものである。

SK092

調査区中央で、SD060 の上面で検出した土坑である。平面形態はややいびつな楕円形で、南北長 1.0 m、東西長 1.6 mを測る。

出土遺物には、古代の須恵器、中世の土師器、瓦質土器、陶磁器類、瓦などがあり、中世後期のものである。

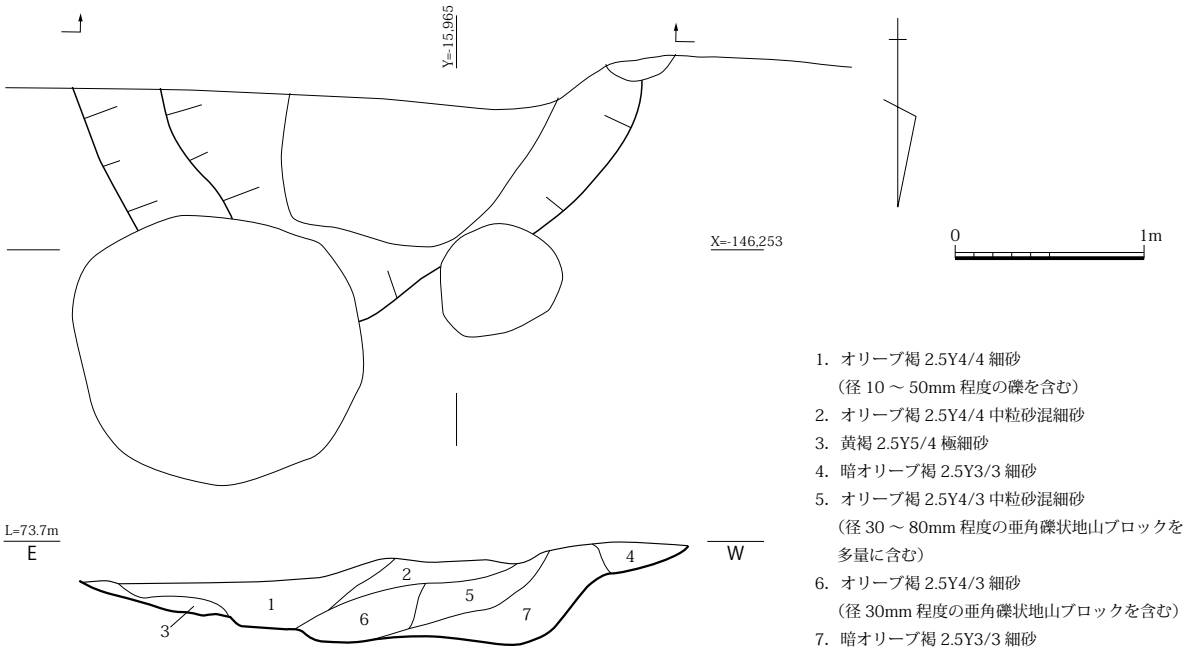


図 20　SK110 平面・土層断面図（S=1/40）

SK100（図 19、図版 12）

調査区中央の南壁際で検出した土坑である。南側は調査区外に延びるため全形は不明で、現存長 7.1 m、深さ 0.3m である。埋土には礫が含まれる。

出土遺物には、古代の須恵器、中世の土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器類、瓦、鉄滓、埴輪、貝殻などがあり、その主体は 16 世紀前半のものである。

SK110（図 20、図版 12）

調査区中央の南壁際で SK100 の上面より検出した土坑である。南側は調査区外に延びるため全形は不明で、現存長 3.2 m、深さ 0.4m である。埋土には礫や地山ブロックが含まれる。

出土遺物には、中世の土師器、瓦器、瓦質土器、瓦、鉄滓、埴輪などがあり、その主体は中世後期のものである。

第２項　遺物

建物

SB135 出土遺物（図 21、図版 19）

土師器皿（48・49）　これらは橙系の色調で、どちらも小片のため正確な口径は不明だが、48 は 7 ～ 8cm 台、49 は 11 ～ 13cm 台のものと思われる。口縁に強いナデ調整を施す厚手の一群であるが、後者は口縁端部が直立気味である。概ね 1 段階中頃にあたるものと思われる。

土師器釜（50）　口縁端部が上方に拡張する大和 I_2 型Ⅲ－ 1 型式と思われる。

瓦質土器鉢（51）　口縁端部を内側に引き出す円形浅鉢で、外面へ平滑に仕上げられている。胎土には石英、長石などの微小な砂礫が含まれる。

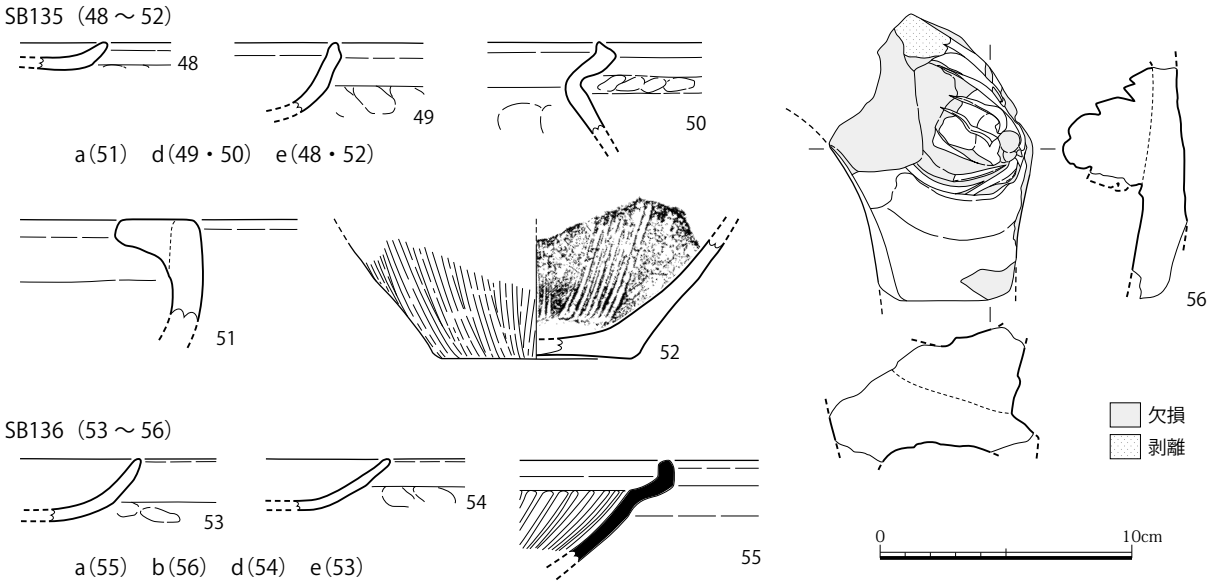


図 21　SB135・136 出土遺物実測図（S=1/3）

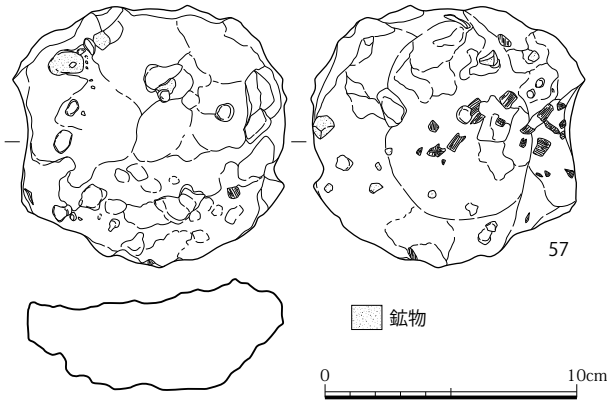


図 22　SP039 出土遺物実測図（S=1/3）

瓦質土器擂鉢（52）　内面に放射状の施文具幅 8 本 /2.2cm の擂目がみられ、外面は粗いハケ調整が施され、やや焼成不良のためか器面の崩落がみられる。

これらの遺物は、13 世紀代のものを含むが、下限は 16 世紀代である。

SB136 出土遺物（図 21、図版 19）

土師器皿（53・54）　53 は橙系の色調で口縁に強いナデ調整を施す厚手のもので、1 段階中頃にあたる。54 は灰白系の色調で、体部が大きく開く浅形で薄手のもので、3 段階にあたる。

輸入青磁盤（55）　口縁端部を上方に摘みあげ、内面には放射状に幅 5mm の凹線を配する盤の口縁である。釉は淡緑色、胎土は白色で、龍泉窯系のものである。

鬼瓦（56）　右半の一部で、上向きの髭が貼り付けられており、長石・雲母・褐色粒を多く含んでいる。

これらの遺物は、13 世紀代のものを含むが、下限は 16 世紀後半である。

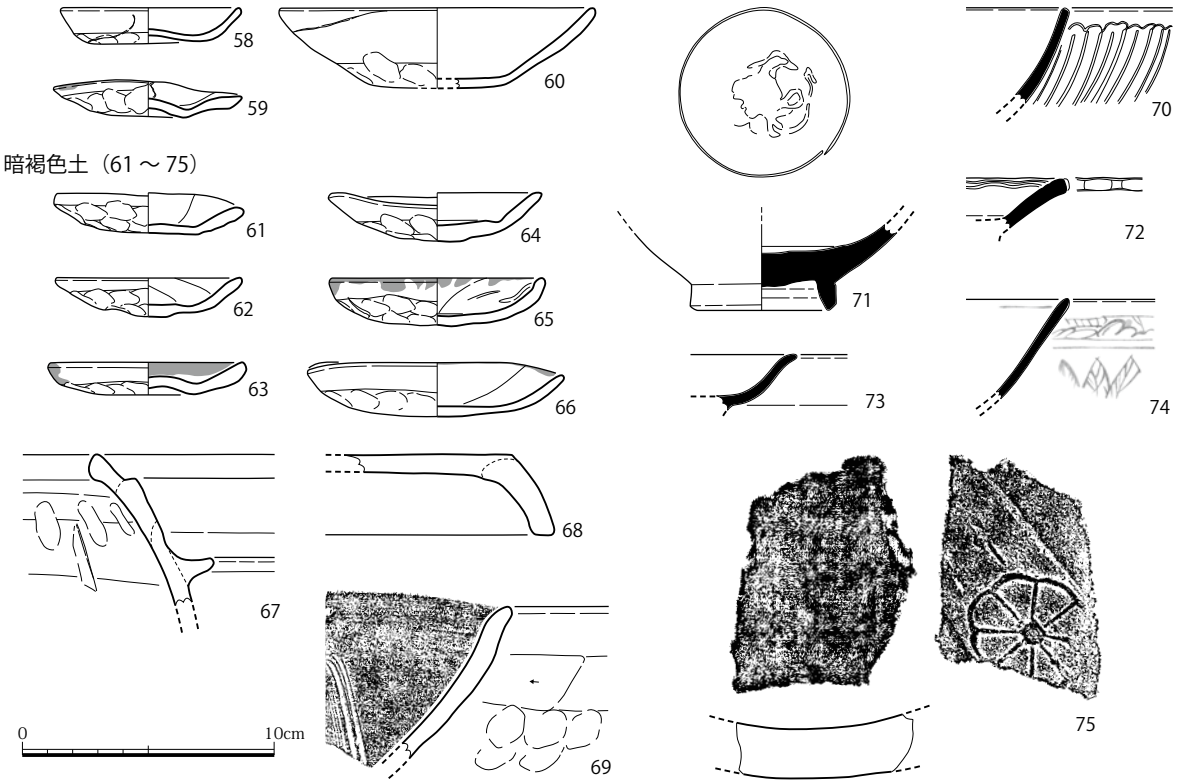


図 23　SD060 出土遺物実測図（1）（S=1/3）

柱穴

SP039 出土遺物（図 22、図版 19）

鉄滓（57）　椀形鉄滓である。536g を量る。

　土器類は小片のため図化できなかったが、概ね中世のものである。

溝

SD060 出土遺物（図 23 ～ 27、図版 19 ～ 23）

土師器皿（58 ～ 60）　58・59 は黄橙系の色調で口径 7cm 台のものであるが、58 は内湾する器形に見込みがわずかに突出するものである。59 は口縁が大きく外反するいわゆる「へそ皿」で、口縁端部に煤が付着する。60 は白系の色調で体部が大きく開く深めの器形である。これらは 2 段階後半のものである。

【暗褐色土】

土師器皿（61 ～ 66）　これらは黄橙系の色調で口径 7 ～ 8cm 台（61 ～ 65）と 10cm 台（66）があり、63・65・66 は口縁端部に煤が付着する。61 ～ 64 は厚手で体部が大きく開き上げ底状のいわゆる「へそ皿」の一群ともされるが、内面の口縁外側にナデ抜けるいわゆる「の」字ナデ調整が特徴的である。65・66 はやや薄手で内湾する器形であるが、内面は同様の「の」字ナデ調整である。これらは 3 段階のものである。

土師器釜（67）　口縁小片のため全形が明らかではないが、口縁端部が斜上方にのびることから、大和 H_3 型と思われる。

瓦質土器蓋（68）　口縁外面に強いナデ調整が施され、蓋上面には砂礫が目立つ。

瓦質土器擂鉢（69） 口縁端部のナデが強く小さく外反することから、F 型式である。
輸入青磁椀（70・71） 共に龍泉窯系で胎土は白色で精良なものである。70 は線刻細蓮弁文を施した B4 類で釉は濃緑色、71 は見込みに花文がスタンプされ、釉は緑白色である。共に 15 世紀後半～ 16 世紀前半のものである。
輸入青磁皿（72） 龍泉窯系の稜花皿で、釉はオリーブ色で胎土は灰白色である。青磁椀（70・71）と同時期のものである。
輸入白磁皿（73） 景徳鎮窯系の端反皿で、E 群である。
輸入染付椀（74） 景徳鎮窯系のいわゆる蓮子椀で、口縁部外面にやや薄い呉須で横帯に粗雑な波涛風文、胴部に蕉葉文が描かれるもので、C 群である。
平瓦（75） 八弁花文がスタンプされたものである。
【褐色砂】
土師器皿（76 ～ 79） これらは口径 7 ～ 8cm 台であるが、黄橙系の色調で体部が大きく開く一群と（76 ～ 78）、橙系の色調で口縁に強いナデ調整を行うもの（79）がある。これらは 2 段階～ 3 段階前半のものである。
土師器釜（80） 口縁が上方に拡張する大和 I_2 型で、口縁がやや薄手なところからⅢ－ 1 型式と思われる。
須恵器鉢（81） 東播系のものである。口縁部が灰色で周辺より濃くなっており、口縁は口縁端部が下方に拡張する B2 －Ⅱ類である。
瓦質土器鉢（82・83） 82 は器面が良く燻され口縁端部上面が平滑で胴部が内湾する浅鉢で、83 は発色が悪く灰色で口縁上面が大きく凹む直線的な器形をもつ鉢である。
瓦質土器擂鉢（84） 内面に放射状に施文具幅 9 本 /2.5cm の擂目がみられ、外面は粗いハケ調整が施され、やや焼成不良のものである。
輸入青磁椀（85 ～ 88） 全て龍泉窯系のものであるが、胎土が白色のもの（85・86）と、灰色（87・88）がある。85 は畳付を釉剥ぎすることと鎬蓮弁文からⅢ類にみえるが、蓮弁は片切り彫りであることや全体の器形から B3 類に類似する。86 ～ 88 は太目の高台をもち、外底の釉は蛇の目釉剥ぎするもの（86）と、無釉のもの（87･88）がある。見込みにはスタンプにより、86 が「顧氏」、87 が「太」、88 が「卍」と記される。これらは 15 世紀後半～ 16 世紀前半のものである
輸入白磁皿（89） 4 つの抉りを有する高台をもつ内湾皿で、福建産の D 群のものである。外底に墨が付着する。
輸入染付小杯（90） 景徳鎮窯系の端反口縁をもつもので、外面には垂下する蔓草文が描かれる。見込みには 2 条の圏線内に何らかの文様が描かれているが、欠損のため不明である。
国産陶器皿（91・92） 91 は瀬戸の灰釉端反皿で、見込みにスタンプによる菊花文が施されたもので、大窯 1 段階のものと思われる。92 は内面に反しをもつ古瀬戸の灰釉深皿で、古瀬戸後Ⅳ期のものと思われる。
国産陶器擂鉢（93・94） 93 は胎土が橙色で灰白色の筋がマーブル状にみられる。信楽のものと思われる。94 はやや斜方向に施文具幅 6 本 /1.5cm の擂目をもつ備前のもので、口縁端部が上下に拡張することから 4B 期のものと思われる。
軒丸瓦（95・96） 共に左巻三巴文を瓦当文様とするものである。
軒平瓦（97・98） 97 は瓦当貼り付け技法によるもので、瓦当文様は大きく欠損しているが中心半截

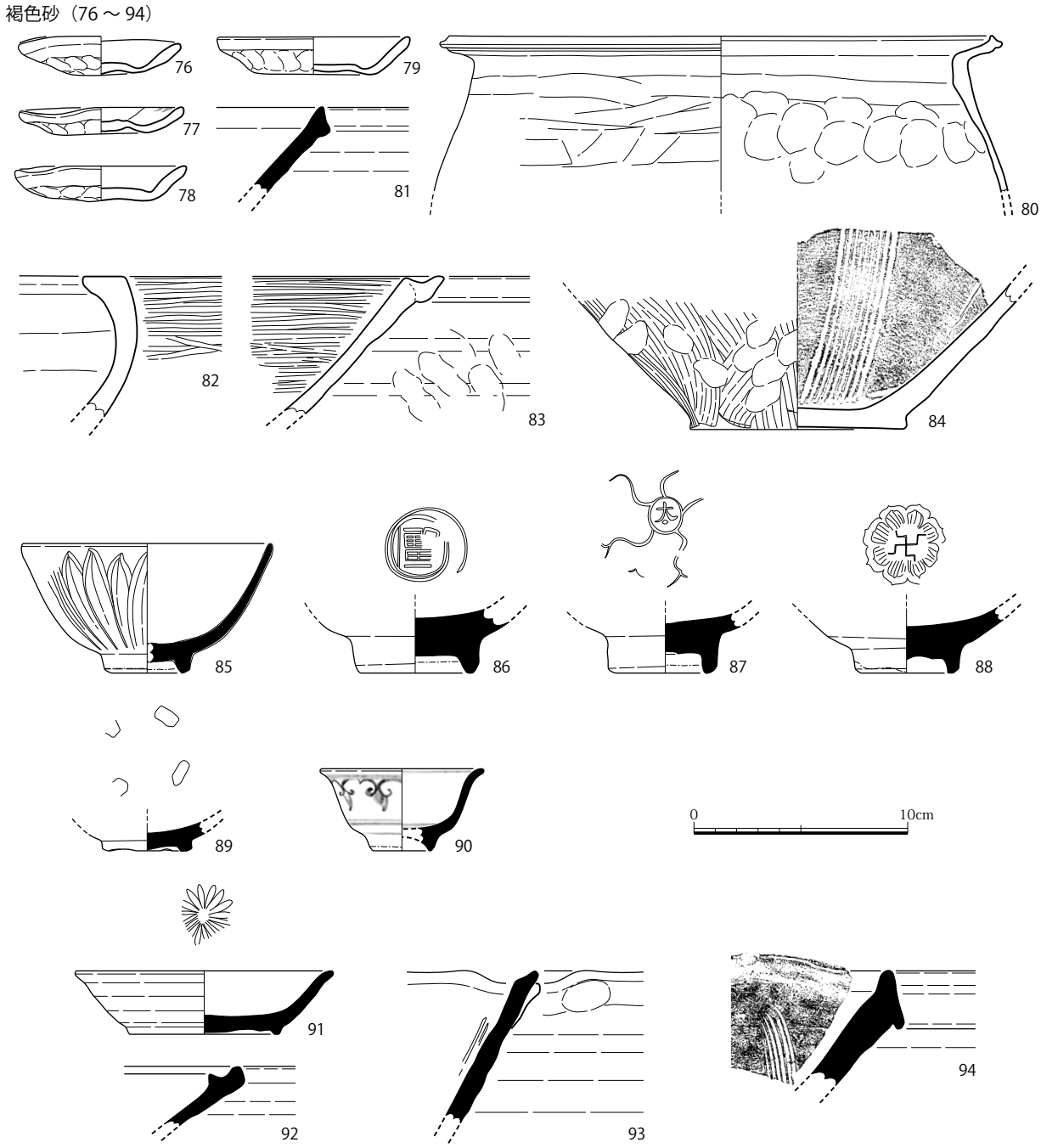


図 24　SD060 出土遺物実測図（2）（S=1/3）

菊花文と思われ、中世Ⅵ期のものである。98 は顎貼り付け技法による三葉文を瓦当文様とし、中世Ⅷ期のものである。

鬼瓦（99）　右上半部の破片で、胎土には多くの黒色粒を含んでいる。

土製品（100・101）　100 は鞴羽口の狭端側片で、端部はガラス質化している。第 4 章第 2 節で詳述するが、蛍光 X 線分析で銅（Cu）は検出されず鉄（Fe）が強く検出された。101 は瓦質土器を素材とした土製円板で、上辺側面に原面が残っており、その形態から大型鉢の底部の一部であったものと思われる。

金属製品（102）　銭貨である。半損しているため、読み取れた銭文は「紹□□寳」である。

褐色砂（95 ～ 102）

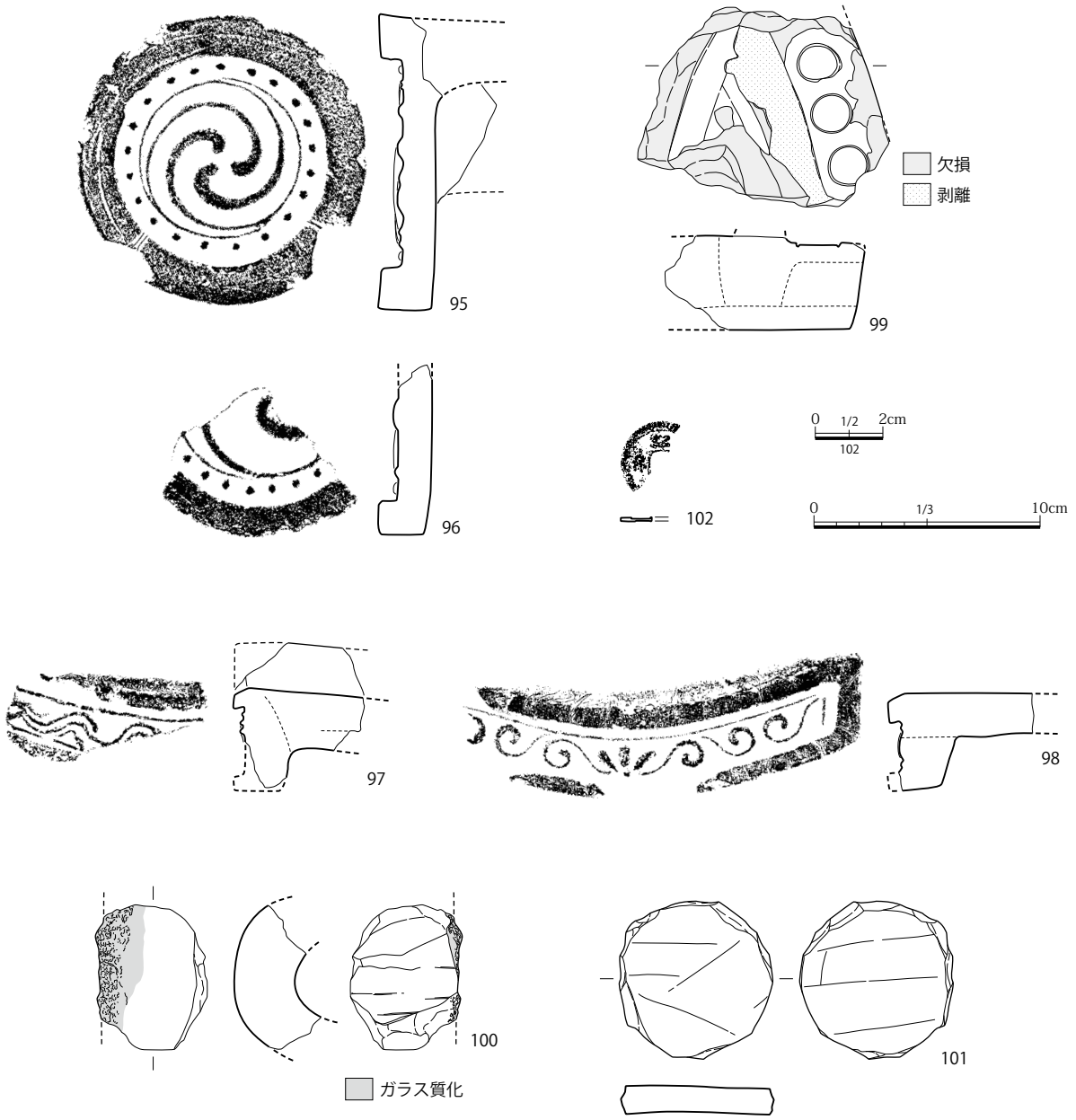


図 25　SD060 出土遺物実測図（3）（S=1/3・1/2）

【青灰色土】

土師器皿（103）　黄橙系の色調で外面の体部が大きく開き厚手で、口径 7cm 台のものである。

輸入青磁椀（104）　龍泉窯系の外面無文の椀で、胎土は白色、釉は濃緑色で比較的良質である。E 類にあたり、15 世紀後半～ 16 世紀前半のものである。

輸入陶器椀（105）　天目椀で、緩やかに直立する口縁の端部は舌状で、胎土は灰色、釉は茶褐色と黒色が重ね掛けされた福建産のものである。

軒平瓦（106・107）　106 は瓦当貼り付け技法によるもので、連珠文を瓦当文様としており、顎部には凹型台圧痕が残る。107 は瓦当貼り付け技法による中心半截菊花文を瓦当文様としており、その文様は法隆寺 272Ba 形式に類似するが、左端の唐草文が異なる。

鉄滓（108）　椀形鉄滓である。1600g を量る。

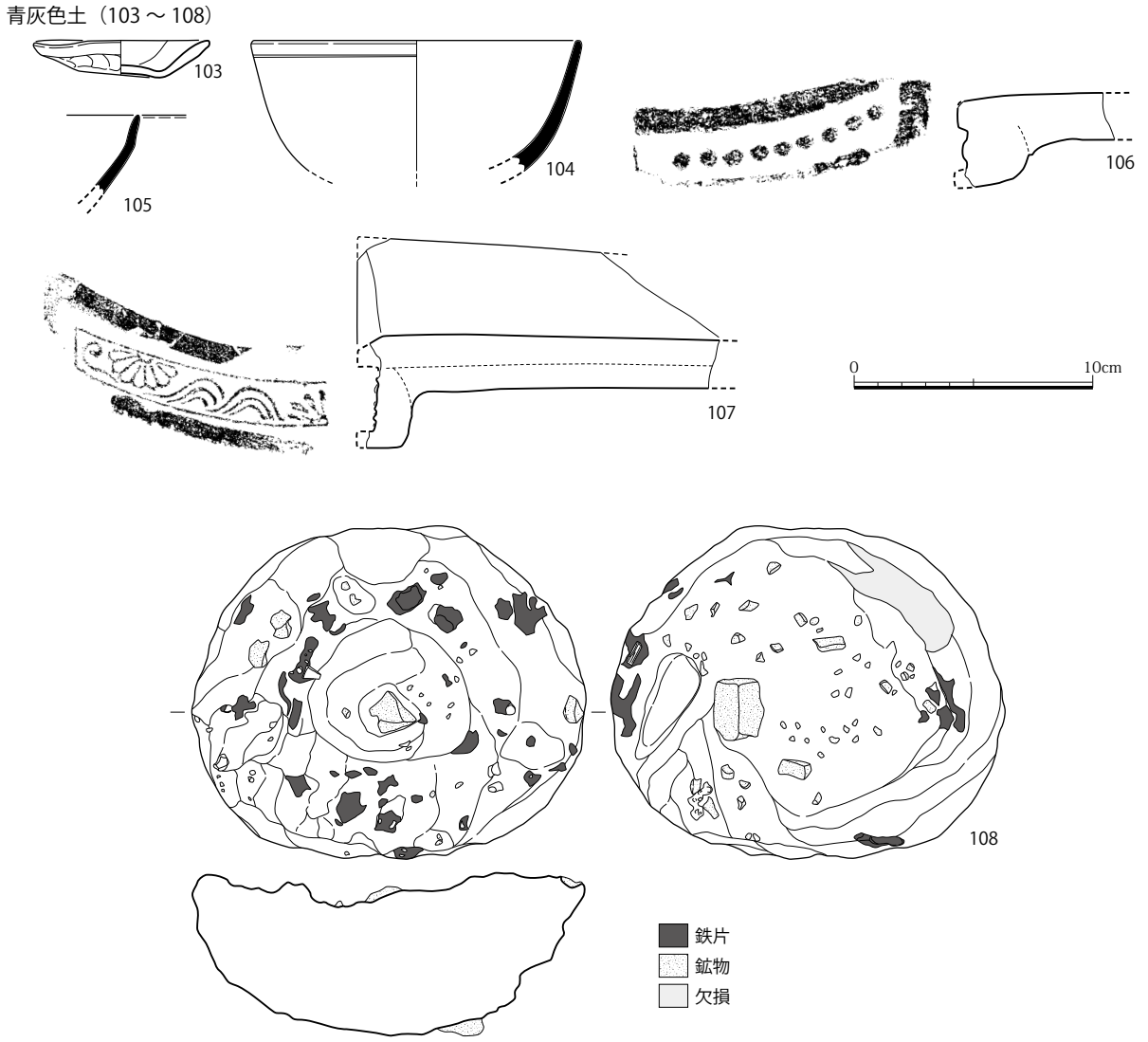


図 26　SD060 出土遺物実測図（4）（S=1/3）

【淡褐色砂】

瓦質土器擂鉢（109）　直線的に施文具幅 11 本 /3.0cm の擂目を 8 つ配したもので、口縁端部が小さく外反することから F 型式である。

瓦質土器瓶（110）　全体的に黒色に燻された太鼓状の胴部を有するいわゆる仏花瓶形のものである。外面には密な縦方向のミガキ調整が施され、脚部はその後に横方向にも数条巡らせている。胴部には、スタンプにより上から松形 12 個、菱形 11 個、松形 12 個が 3 段に施されている。各文様の切りあいから、最初に中段を押した後に上・下段を押し、各段は左向きに押していく流れが読み取れる。

輸入白磁皿（111）　おそらく抉りがない輪高台で、体部下半が無釉の内湾皿で見込みに目跡がみられるもので、福建産の D 群のものである。

輸入青磁椀（112）　胎土が白色で、2mm と厚い濃緑色の釉が掛けられた良質の龍泉窯系のものである。見込みはスタンプによる菊花文で、外底は蛇の目釉剥ぎする。径 7cm 台の高台と見込みの広さから、口径 20cm 程度の大振りのものと思われる。15 世紀前半のものである。

土製品（113）　平瓦を素材とした土製円板で、側縁全体が平滑に研磨されている。

これらの遺物から、下層の淡褐色砂に 15 世紀代の遺物を多く含むが、全体的には 15 世紀～ 16 世

淡褐色砂（109 ～ 113）

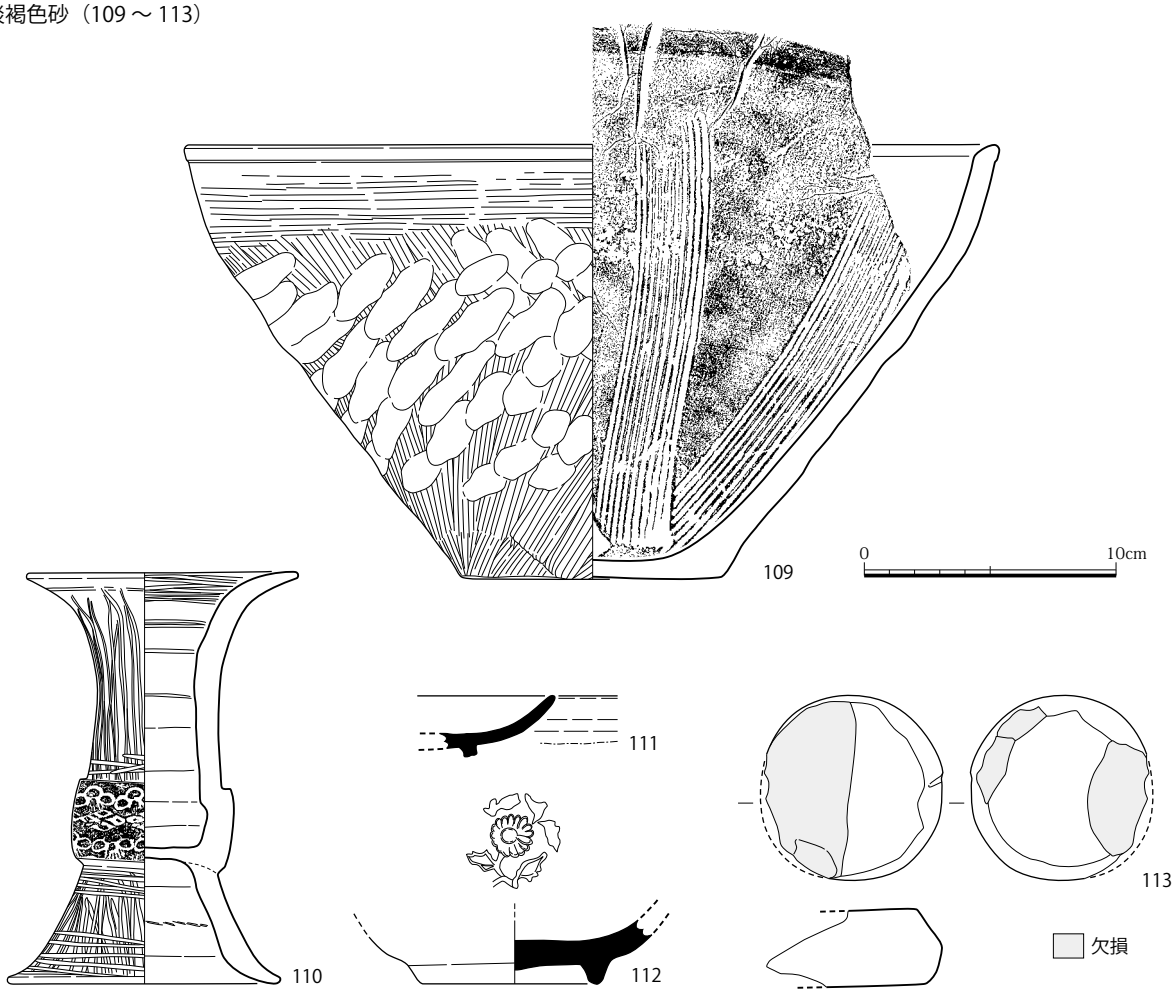


図 27　SD060 出土遺物実測図（5）（S=1/3）

紀前半にかけての時期幅がみられる。なお、本遺構からは最も多くの動物遺体が出土している（第 4 章第 1 節参照）。

SD071 出土遺物（図 28、図版 23）

土製品坩堝（114）　内湾した浅く小型の坩堝で、胎土には砂礫が混じり、二次焼成のため非常にもろくなっている。内面には青銅粒と、肉眼では 1mm 以下の雲母片に見えるが顕微鏡観察では球状の金色粒が付着していた。第 4 章第 2 節で詳述するが、これらの粒からは、蛍光 X 線分析により、銅（Cu）および金（Au）、水銀（Hg）が検出された。

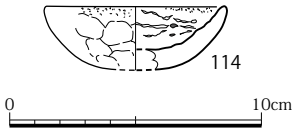


図 28　SD071 出土遺物実測図（S=1/3）

土器類は小片のため図化できなかったが、概ね中世のものである。

井戸

SE105 出土遺物（図 29 ～ 32、図版 23 ～ 28）

【黒褐色土】

土師器皿（115 ～ 124）　橙色系の色調で底部は凹み体部が大きく開く一群（115・116）と、黄橙系

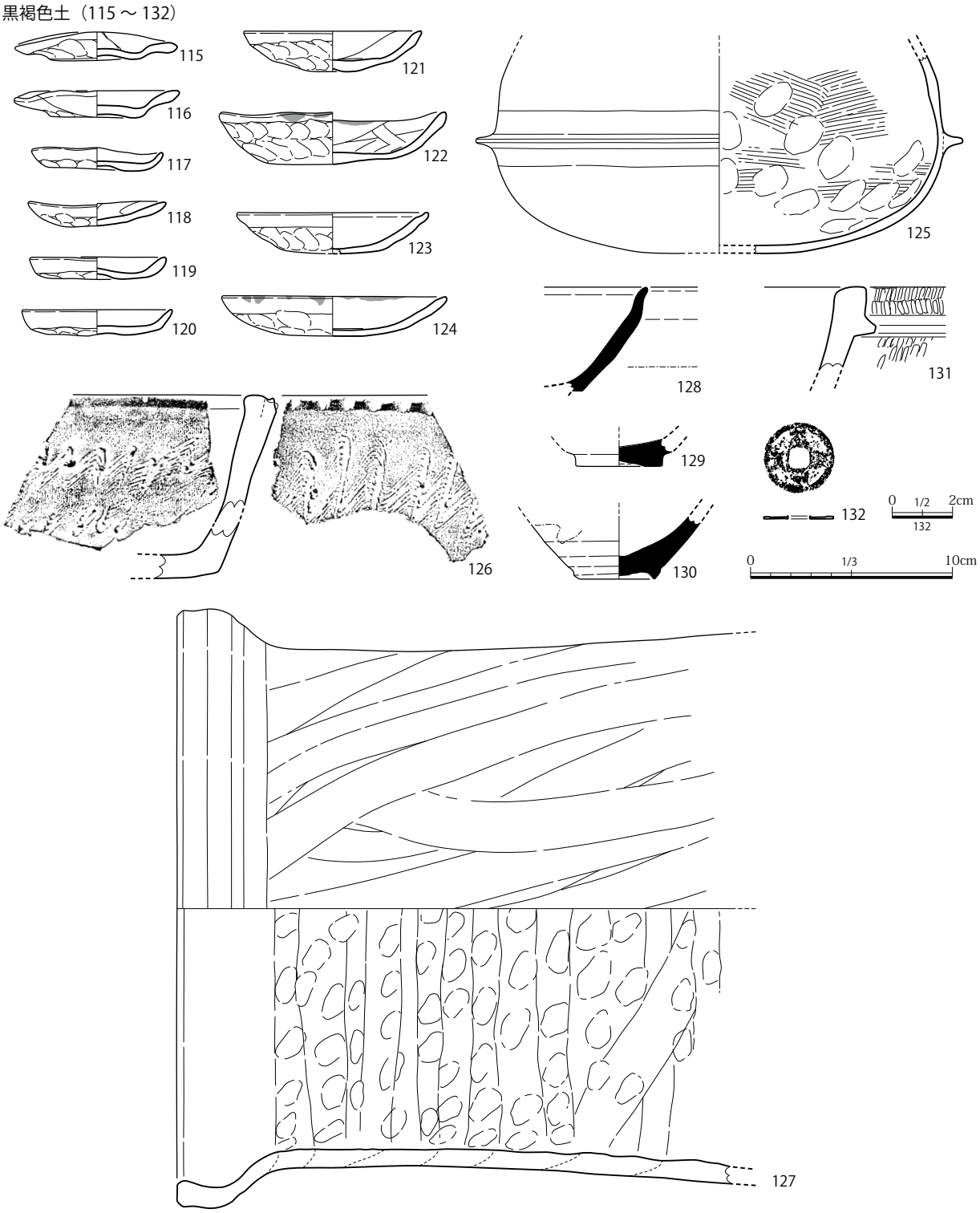


図 29　SE105 出土遺物実測図（1）（S=1/3・1/2）

の色調で内面の「の」字調整ナデが顕著な一群（117 ～ 122）、灰白系の色調でほかのものより薄手で精良な胎土をもち底部が内湾する一群（123・124）がある。口径でみると、6 ～ 7cm 台（115 ～ 120）、8 ～ 9cm 台（121・123）、11cm 台（122・124）に分かれる。122・124 は口縁端部に煤が付着する。これらは概ね 3 段階であるが、124 はその器形が京都 S 系列に類似しており時期的には 10 A ～ B 期に相当する。

土師器釜（125） 体部が下膨れの球形で下半が扁平であることから、大和 I_2 型のⅢ－２型式のものである。鍔より下半が黒変している。

瓦質土器鉢（126） 体部が直線的で、口縁端部は縄目文を貼り付け、内外面全体に櫛状工具による波状文を巡らす。胎土には石英・長石・雲母などの砂礫が混じる。

瓦質土器土管（127） 受口部である。胎土には石英・長石・雲母などの砂礫が混じる。受口は径28cm 台で、本遺跡で出土している土管の中では大型である。

国産陶器椀（128 ～ 130） 128・129 は胎土が浅黄色、釉は茶褐色で中国産のものよりは薄く、口縁端部が外側に短く屈曲する天目椀で、129 の底部外面は褐色を呈している。高台は削り出しによるもので、その脇を水平に切り、接地面が平滑な輪高台であることから瀬戸大窯３段階のものである。130 は灰釉椀で胴部下半は露胎しており、見込みは深めに凹み、高台はロクロによる削り出しで成形されその抉りは浅い。釉は緑灰色で、胎土は焼成不良のためか橙色である。唐津Ⅱ期である。

石製品（131） 滑石製石鍋で、鍔型口縁のものである。二次的な加工はみられない。鍔は黒変しており、二次焼成を受けたものと思われる。Ⅲ－ｂ類である。

金属製品（132） 銭貨である。銭文は激しい銹化により不鮮明であるが、元祐通寶（初鋳 1068 年）と思われる。

【暗灰色土】

土師器皿（133 ～ 141） 橙または黄橙系の色調で底部は凹み体部が大きく開く一群（135 ～ 137）と、灰白系の色調で精良な胎土をもつ底部が内湾する一群（133・134・138 ～ 141）がある。口径では、6cm 台（133・134）、7 ～ 8cm 台（135 ～ 138）、10 ～ 11cm 台（139 ～ 141）がある。139 は見込み、141 は口縁端部にそれぞれ煤が付着する。概ね３段階後半である。

瓦質土器鉢（142） 口縁端部に短い段を有し体部が球状で平坦な底部をもつ小形の浅鉢である。体部下半には粗いハケ調整が残り、上半は丁寧にナデ消される。外底以外は良く燻され黒色で、胎土は精良である。口縁端部が部分的に欠けている。

瓦質土器甕（143） 口縁が緩やかに内側へ屈曲し胴部が張る大形甕で、口縁が横方向、胴部は内外面とも板状工具によるナデ調整が施される。胎土の砂粒は多くない。

輸入染付椀（144） 口縁が大きく開く浅めの椀である。胎土は灰白色で、胴部下半には内外面とも釉が掛からない。呉須は薄青色で、外面には半円の花文や草文が描かれる。漳州窯系のものである。見込みには輪状の重ね焼き痕がみられる。

国産陶器皿（145 ～ 148） 145 ～ 148 は緑白色の釉が掛かった瀬戸灰釉皿である。全体的に内湾する丸皿といわれる器形だが、146 のみわずかに外反する。145 は見込みにスタンプによる小ぶりの菊花文が施されるが、他は無文である。147 は外底と見込みが無釉で、他は総釉だが外底に輪状のトチン痕が残る。これらは高台が低く扁平なことから大窯２段階である。

国産陶器椀（149･150） 共に胎土が褐色、釉は茶褐色、口縁端部が外側に短く屈曲する天目椀である。149 は外面の施釉がかなり上位で止まっており、高台には４つの目跡がみられる。150 は高台内に墨書がみられる。高台脇を水平に切る平滑な輪高台であることから瀬戸大窯３段階のものである。

【暗褐色土】

土師器皿（151 ～ 156） 灰白系の色調で精良な胎土をもち、底部が内湾する口径６～ 7cm 台（151・152）、底部が平坦な口径 10cm 台（155）、口縁に強いナデ調整がされ体部が直線的なもの（156）の一群と、黄橙系の色調で底部は凹み体部が大きく開く口径 8cm 台のもの（153・154）の一群がある。

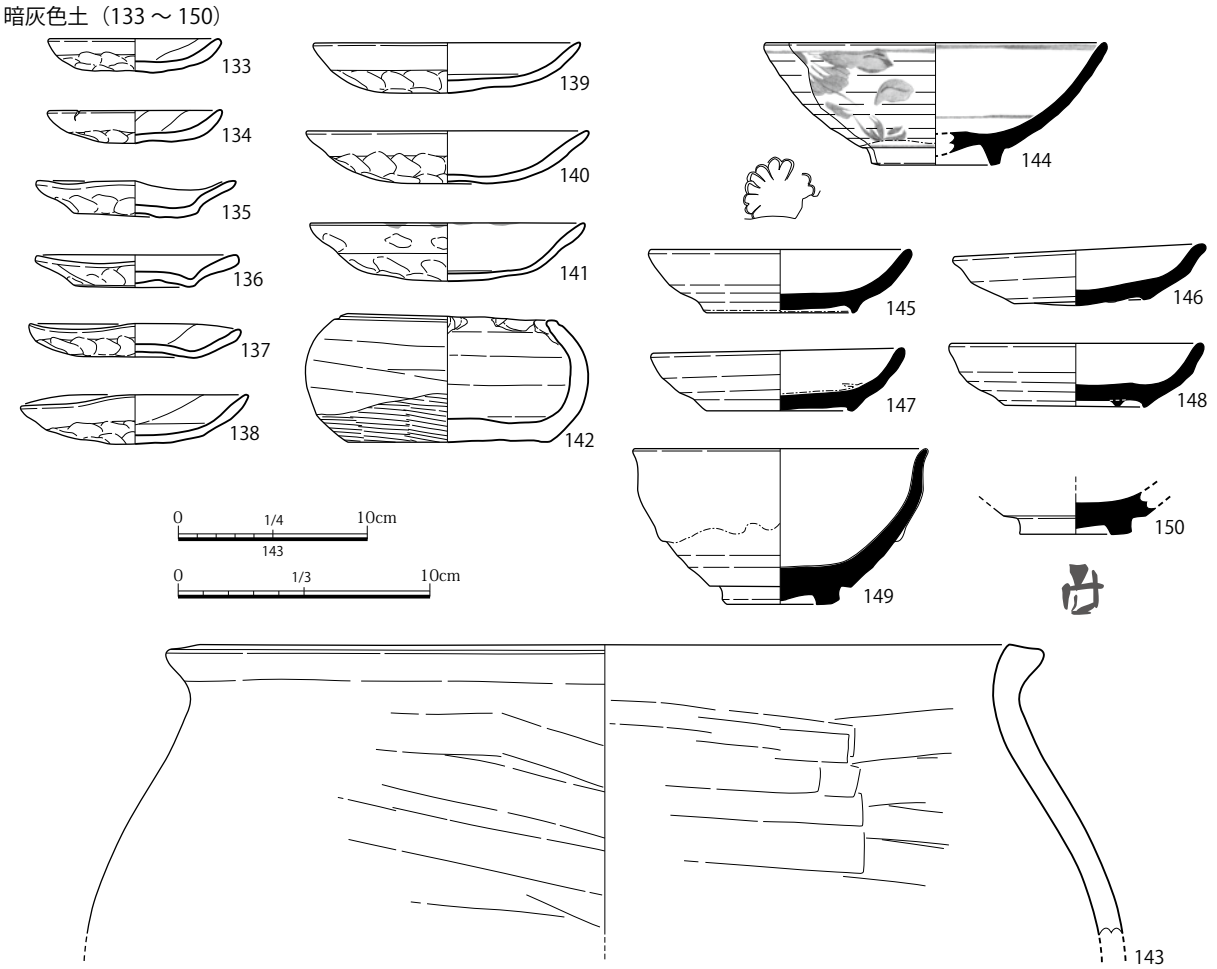


図 30　SE105 出土遺物実測図（2）（S=1/3・1/4）

151 ～ 155 は概ね３段階で、156 はその器形が京都 S 系列に類似しており、時期的には９段階 C ～ 10 A 期に相当する。

土師器台付皿（157）　外面には指オサエが顕著に残り、内面は「の」字ナデ調整だが器面は粗く、雲母等の砂粒が目立つ。いわゆる「権杯（ごんぱい）」と称される器形である。

土師器釜（158）　口縁が上方に拡張する大和 I_2 型で、口縁が短めなところからⅢ－１型式と思われる。

輸入白磁皿（159）　畳付と見込みを蛇の目に釉剥ぎするする小杯である。釉は光沢があるガラス質、胎土に黒色粒が混じらずに白味が強いもので、徳化窯系の可能性がある。

輸入染付皿（160・161）　160 は景徳鎮窯系の内湾皿である。器壁が 2mm と薄く、内外面に小ぶりの花文が施され、高台は小さく畳付に砂が付着する。E 群皿である。161 は景徳鎮窯系の外底が凹むいわゆる碁笥底皿である。見込みには字もしくは幾何学的な文様が描かれる。C 群皿である。

輸入染付椀（162）　胎土が灰白色、外底無釉で見込みに蛇の目釉剥ぎするもので、漳州窯系の浅形椀である。

国産陶器椀（163）　胎土が褐色、釉は茶褐色で中国産のものよりは薄く、口縁端部が外側に短く屈曲する天目椀である。高台脇を水平に切る平滑な輪高台であることから瀬戸大窯３段階のものである。

国産陶器皿（164 ～ 167）　164 ～ 166 は天目椀と類似した茶褐色の釉が掛けられたいわゆる丸皿とされる瀬戸鉄釉皿で、見込みに大きな円形の目跡が３か所、外底には蛇の目状に釉が掛かっている。167 は緑白色の釉が掛かり、口縁端部が大きく外反する瀬戸灰釉折縁皿で、見込みと外底は無釉である。

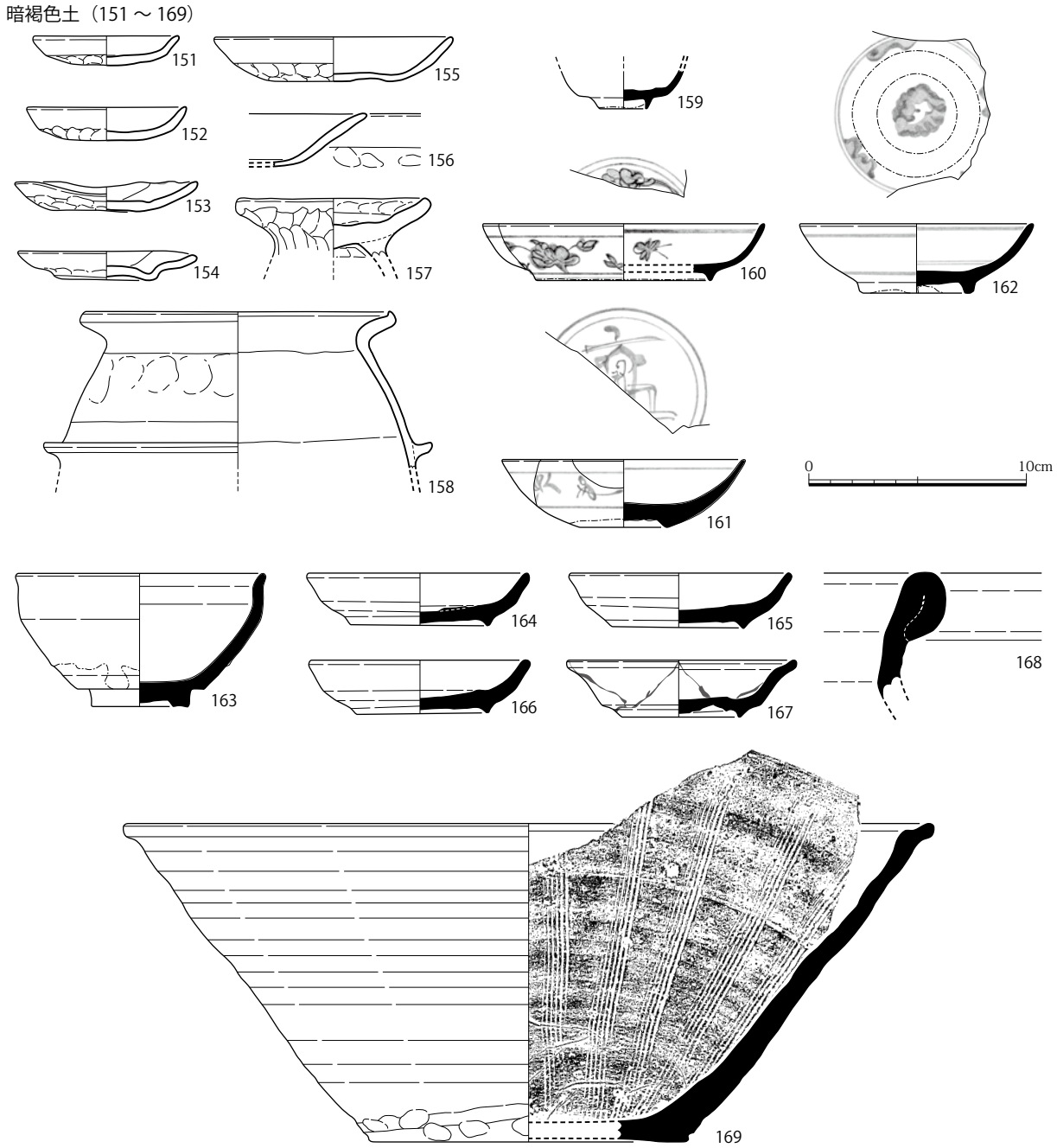


図 31　SE105 出土遺物実測図（3）（S=1/3）

胴部には割れを漆継ぎした部分がみられる。これらは瀬戸大窯 3 段階のものである。

国産陶器甕（168）　短く直立する玉縁状口縁の大甕口縁部片で、外面は若干灰を被っている。備前Ⅳ期のものである。

国産陶器擂鉢（169）　胎土が赤色で白色の筋がマーブル状にみられ 5mm の砂礫が多く混じる。口縁端部が受け口状で、施文具幅 6 本 /1.1cm の擂目をもつ。信楽 B6 類のものと思われる。

瓦質土器土管（170 ～ 172）　170 は径 24cm 台の端部、171 は径 30cm 台の受口部で共に大型のものである。172 は径 14cm 台の受口部で小型のものである。

金属製品（173）　鉄鍋の口縁片で、小さな玉縁状を呈する。

これらの遺物は、上層の黒褐色土では唐津焼や小片のため図化できなかったが肥前産染付も出土して

暗褐色土（170 ～ 173）

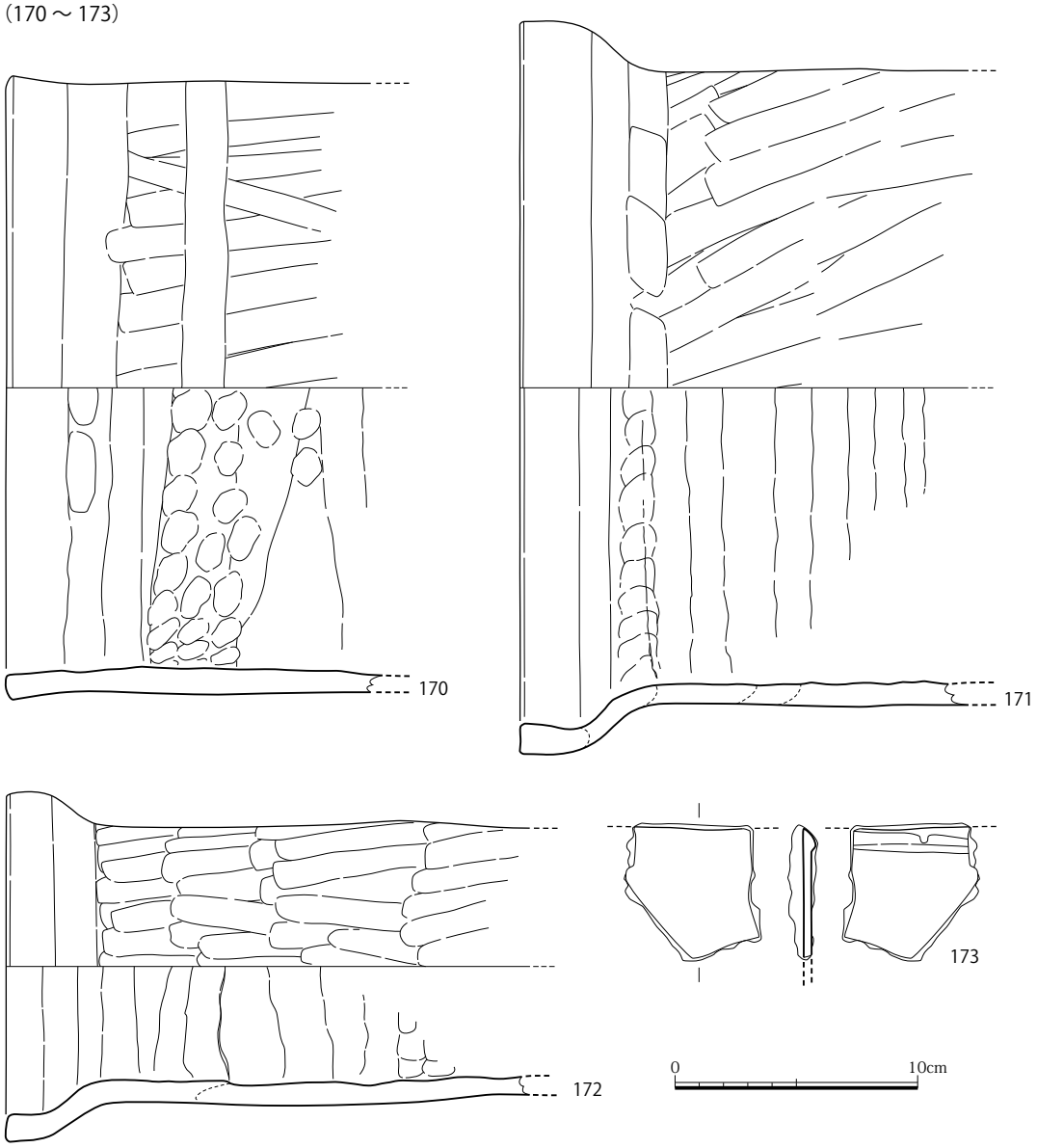


図 32　SE105 出土遺物実測図（4）（S=1/3）

いることから、17 世紀前半以降が下限である。下層の暗灰色土・暗褐色土には明確な時期差は窺えず、16 世紀後半を下限とするものが主体である。なお、貝類ではアカニシ、切断痕のあるイノシシまたはブタの骨も出土している（第 4 章第 1 節参照）。

土坑

SK013 出土遺物（図 33）

鉄滓（174）　椀形鉄滓である。825g を量る。

SK068 出土遺物（図 33、図版 28）

土師器皿（175・176）　黄橙系の色調で口縁外面のナデ調整があまり徹底されておらず、175 は体部が低く外反しているもの、176 は底部が比較的平坦なものである。共に口縁端部に煤が付着する。第 3 段階後半ごろのものであろうか。

輸入陶器椀（177）「ハ」字状に開く輪高台をもち、緩やかに外反する体部をもつ深めの椀である。胎

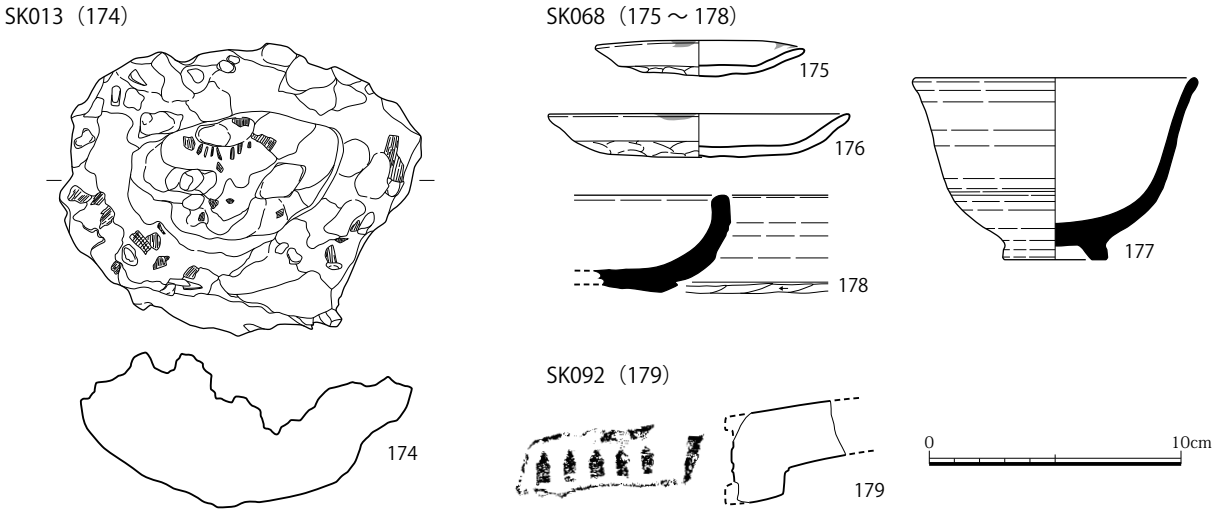


図 33　SK013・068・092 出土遺物実測図（S=1/3）

土が灰色でややざらつき、釉は比較的光沢のある灰色で全体に掛けられた特徴から朝鮮灰釉系陶器とされるものと思われる。江戸遺跡では朝鮮灰釉系陶器は 17 世紀後半に多いものであるが、管見では同一の器形はみられない。

国産陶器鉢（178）　内湾する浅鉢で、胎土は灰色、色調は赤橙色であることから、備前焼である。

漆付不明製品　脆弱であるため、図化していない。第 4 章第 3 節で詳述するが、褐色を呈した 5 cm 四方の塊となっており、厚さ 0.5mm の皮状のものが 2 、 3 枚重なった状態で大きく 2 つに折られた状態でまとまっている。

　これらの遺物は概ね 17 世紀代と思われる。

SK092 出土遺物（図 33、図版 28）

軒平瓦（179）　あまり例がない浮彫状の上向剣頭文が施文され、凹型台圧痕がみられる。

SK100 出土遺物（図 34、図版 29・30）

土師器皿（180 ～ 184）　180・181 は灰白系の色調で口径 6 ～ 7cm 台の平坦な底部をもつものである。182・183 は黄橙系の色調で口径 8cm 台の体部を大きく外反させる。184 は灰白系の色調で口径 9cm 台の内湾する器形で口縁端部から見込みに煤が付着するものである。180 ～ 183 は 3 段階のもので、184 は京都型 S 系列に類似しており 10A ～ B 期に相当する。

輸入青磁椀（185・186）　185 は口縁端部がやや丸みを持つ玉縁状口縁で、胎土は黄橙色、釉は灰黄色である。186 は外底が無釉、見込みに花弁の中に「寿」字のスタンプ文を施し、胎土は灰色、釉は淡緑色である。共に龍泉窯系のやや粗製なもので、D 類の範疇で、14 世紀後半～ 15 世紀前半のものである。

輸入青磁盤（187）　精良な胎土をもち青緑色の厚い釉が掛かり、畳付が釉剥ぎされた底部片で、見込みには双魚文が貼り付けられる。器形や施文の特徴からはⅢ類であるが、高台幅がやや太いことから時期的にはⅣ類に相当するものと思われる。

輸入染付皿（188）　景徳鎮窯系の内湾皿である。見込みに枝花鳥文が描かれ、高台は小さく畳付に砂が付着し、底部は凹む。E 群皿である。

国産陶器椀（189）　胎土が灰白色、釉は黒褐色、口縁は外側に短く屈曲する口径 7cm 台の小型の天目椀である。釉が掛からない胴部下半から外底は褐色を呈している。脇を水平に切る輪高台であることか

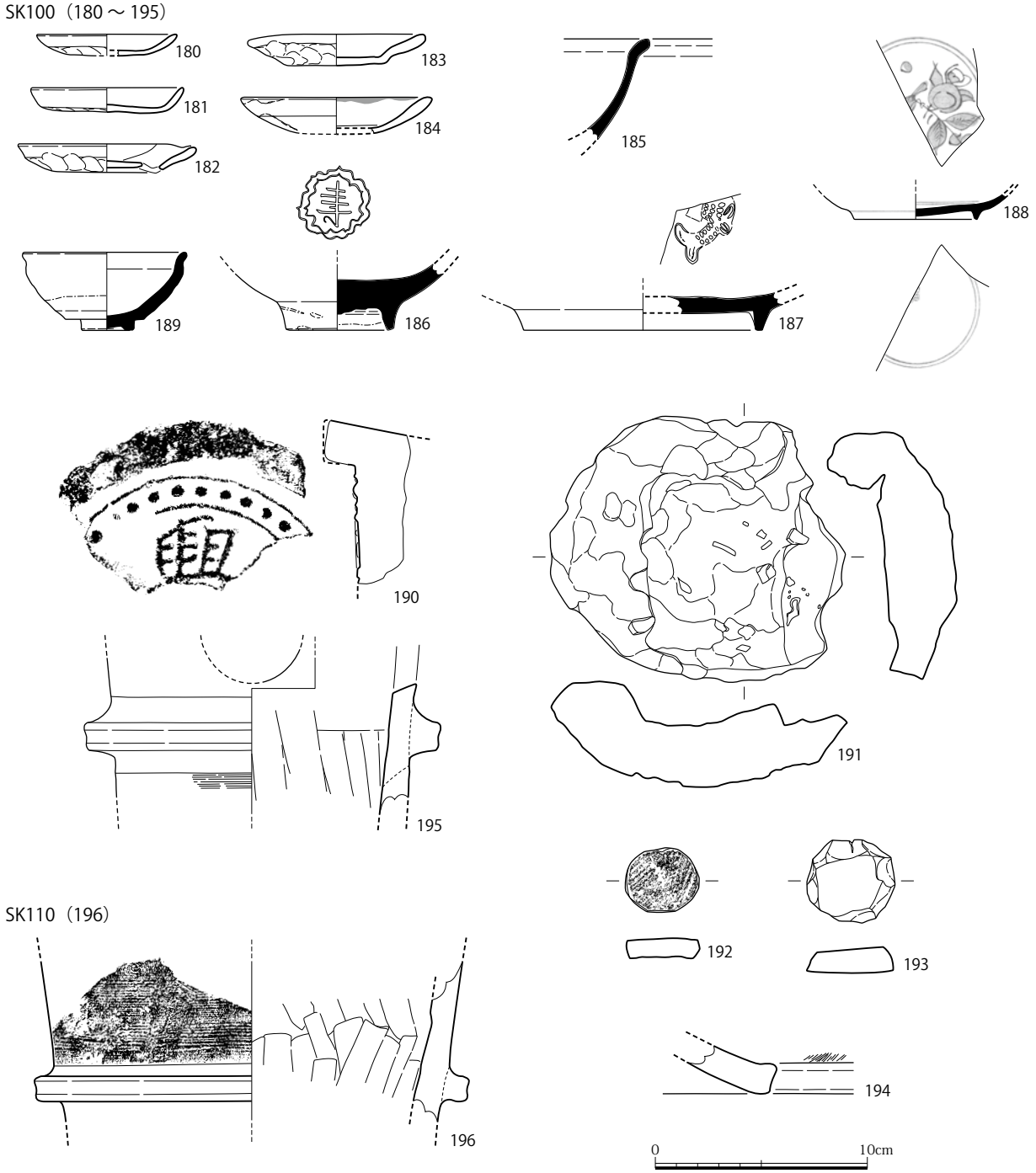


図 34　SK100・110 出土遺物実測図（S=1/3）

ら瀬戸大窯３段階のものである。

軒丸瓦（190）　外周に珠文を配した圏線内に「興福寺」銘を配した軒丸瓦で、上半部が出土している。5mm 以下の黒色粒が多く混じる。

鉄滓（191）　椀形鉄滓である。842g を量る。

土製品（192・193）　共に瓦質土器を素材とした土製円板で、192 は径 3cm 台、193 は径 4cm 台である。192 は側縁が研磨されている。

埴輪（194・195）　194 は口縁の傾き、平面の形状から蓋形埴輪の笠端部と判断した。195 は円筒埴

輪である。外面がB種ヨコハケ調整、内面が縦方向の板状ナデ調整、タガは比較的高く浅いM字状を呈し、スカシは円形である。

これらの遺物は、埴輪（194・195）は古墳時代中期、青磁は14～15世紀であるが、主体は16世紀前半のものである。

SK110 出土遺物（図34、図版30）

埴輪（196） 円筒埴輪である。外面がB種ヨコハケ調整、内面が縦方向の板状ナデ調整、タガは比較的高い台形である。

第4節　17世紀後半～18世紀の遺構と遺物

第1項　遺構

土坑

SK020（図35、図版13）

調査区西寄りで検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈し、南北長4.1m、東西長2.8mを測る。深さは北側で0.4m前後であるが、南側では0.9m前後を測り、南に向かって傾斜している。東西および南側壁面はほぼ垂直に下降し、断面も矩形を呈する。埋土は中粒砂を基本とし、礫を多量に含んでいるなど、人為的な埋め戻しによるものと考えられる。北半を中心に20～30cmの礫が底面近くで多く出土している。

東側約1.5mで検出したSK050と南辺をほぼ東西一直線上に揃えており、南北方向の規模も近似するなど、一連の遺構であることを窺わせている。

出土遺物は多種多様で、古代の須恵器、中世の土師器、陶磁器類、瓦類、鉄滓、焼土などがある。唐津焼等が出土していることから、埋め戻しの開始時期は17世紀前半と考えられるが、後述するSK050と軸を揃えて隣接していることから、同時期と判断した。

SK050（図36、図版13～15）

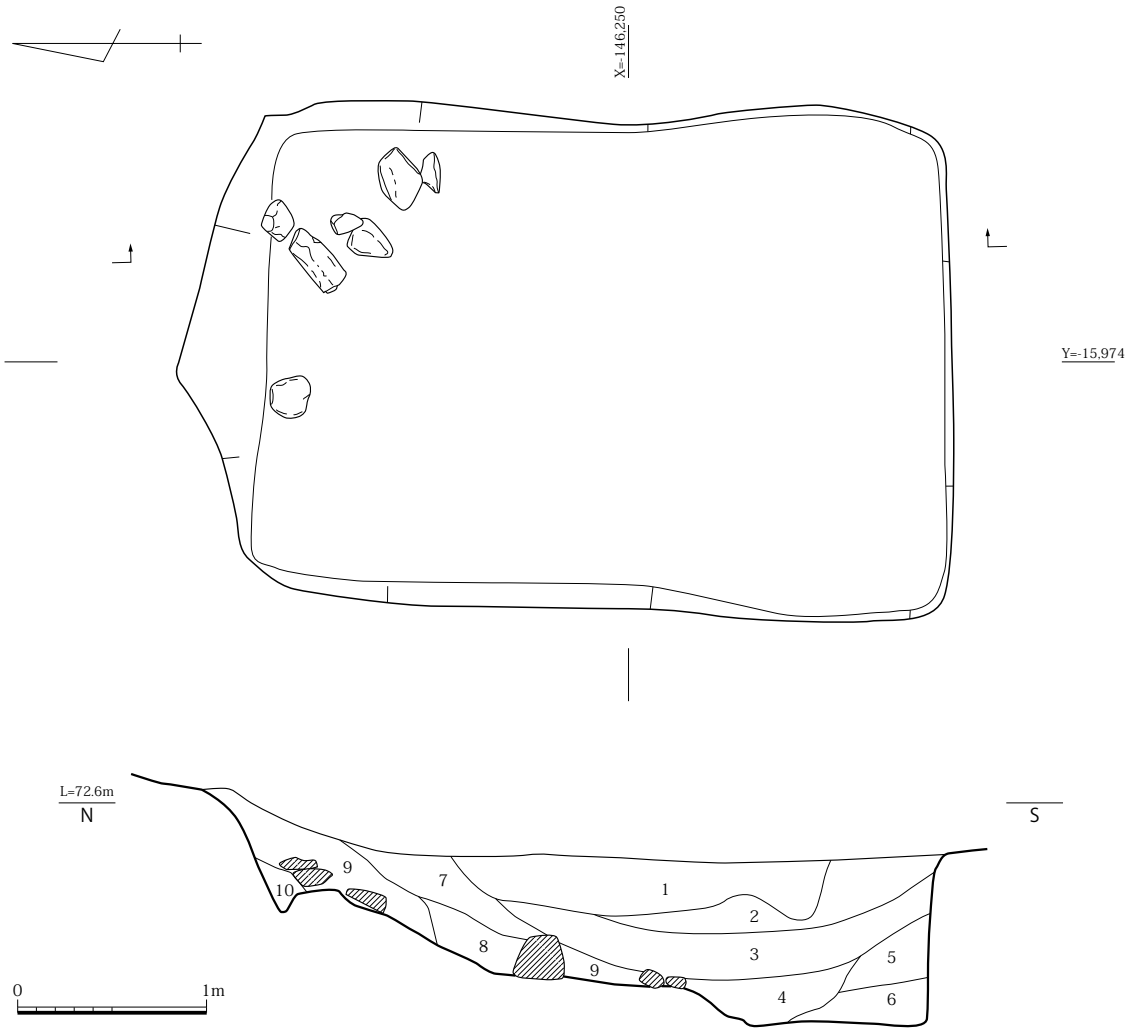
調査区中央、やや西寄りで検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈するが、北辺はやや幅が狭く、弧を描く。南北長4.3m、東西長2.1mを測り、深さは北側で1.3m、南側で1.0mを測る。壁面はほぼ垂直に下降し、東壁はオーバーハング気味である。

この土坑では一旦、全体を掘り込んだ後、南半部は50cm前後の扁平な石材の間に小礫を敷き並べつつ埋め戻し、その上部には2本の丸太材が30cmの間隔をあけ、土坑長辺に直交する形で平行に据え置かれている。北側の丸太材は長さ180cm、直径20cm、南側の丸太材は長さ160cmで直径15cmである。北側の丸太は埋め戻された土の肩口部分に据えられており、北側に検出された切り株を埋置する際の足場的な施設であった可能性がある。

北側では底面に10～60cm前後の石が乱雑に敷かれ、その上部に根切りされた切り株が正置されている。切り株の根回りは約130cmで、高さ約100cmを測る。幹の部分は周囲を切り落とし、長方形状に残すなどの加工がみられる。樹種は特定できなかった。

埋土は中粒砂を基本とし、礫や地山ブロックを多量に含んでいるなど、人為的な埋め戻しによるものと考えられる。

SK020の報告でも記したが、両者は南辺をほぼ東西一直線上に揃えており、性格は不明ながらも一連の遺構であることを窺わせている。



1. オリーブ黒 5Y3/2 細砂混中粒砂（径 50 ～ 100mm の亜角礫状シルトブロック、礫多量に含む）
2. 灰 5Y4/1 細砂混中粒砂（シルトブロック、礫が 1 層に比して少ない）
3. 黄灰 2.5Y4/1 中粒砂混細砂（径 50 ～ 100mm の亜角礫状シルトブロック多量に含む）
4. 灰 5Y4/1 中粒砂混細砂（ラミナ形成、礫多量に含む）
5. オリーブ黒 5Y3/2 中粒砂（礫多量に含む）
6. オリーブ黒 5Y3/2 中粒砂（5 層に比して礫少ない）
7. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混中粒砂（礫多量に含む）
8. 灰オリーブ 5Y4/2 中粒砂（径 50mm 前後の亜円礫多量に含む）
9. 暗灰黄 2.5Y4/2 中粒砂（径 20 ～ 30mm の亜角礫状シルトブロック多量に含む）
10. 灰 5Y4/1 中粒砂（混入物少ない）

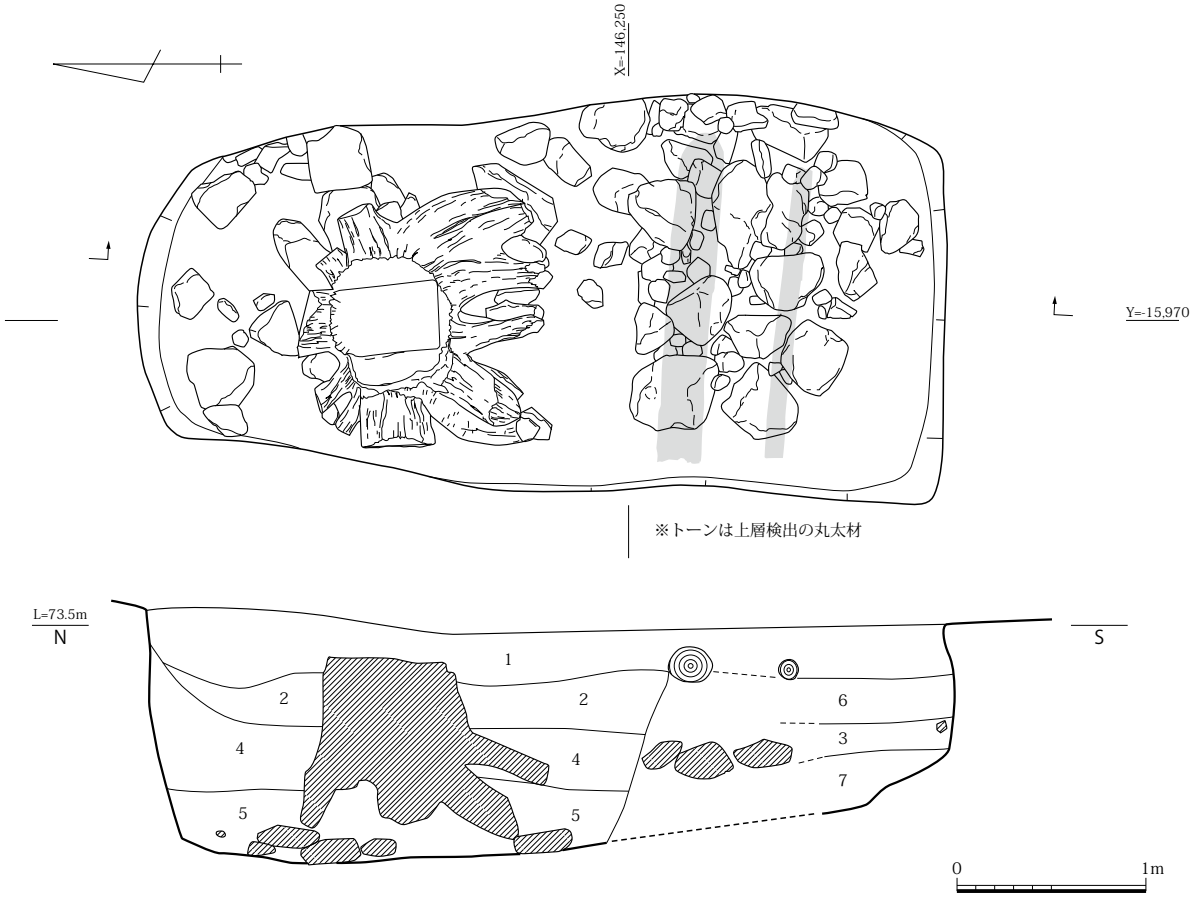
図 35　SK020 平面・土層断面図（S=1/40）

出土遺物には、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器類、瓦類などがある。肥前染付の時期から 18 世紀代が下限と思われる。

SK070（図 37、図版 15）

調査区東寄りで検出した土坑である。平面形態は東西に長い不整な楕円形を呈し、南北長 1.7m、東西長 3.3m を測る。底面は段状を成し、深さは最深部で約 0.4m を測る。埋土は礫や土器、炭化物を含む細砂である。

出土遺物には、土師器、瓦器、瓦質土器、陶磁器類、砥石・石鍋、瓦類、鞴羽口、鉄滓のほか、埴輪



1. 暗灰黄 2.5Y4/2 中粒砂混粗砂（径 10 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロック、炭化物、漆喰片多く含む）
2. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混中粒砂（径 50 ～ 100mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
3. オリーブ褐 2.5Y4/3 中粒砂混粗砂（礫多量に含む）
4. 暗灰黄 2.5Y5/2 中粒砂（径 30 ～ 50mm の亜角礫状地山ブロック少量含む）
5. 暗灰黄 2.5Y4/2 中粒砂（最下部に薄層みられる）
6. 暗灰黄 2.5Y4/2 中粒砂混粗砂（径 100 ～ 200mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
7. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂（径 50mm 前後の亜角礫状地山ブロック、小礫多量に含む）

図 36　SK050 平面・土層断面図（S=1/40）

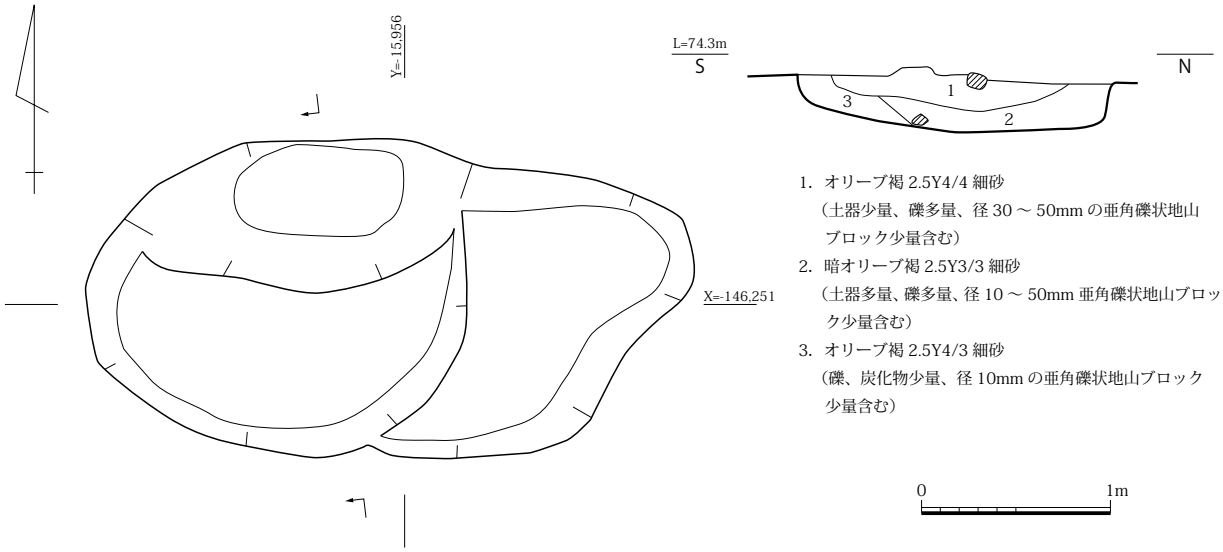


図 37　SK070 平面・土層断面図（S=1/40）

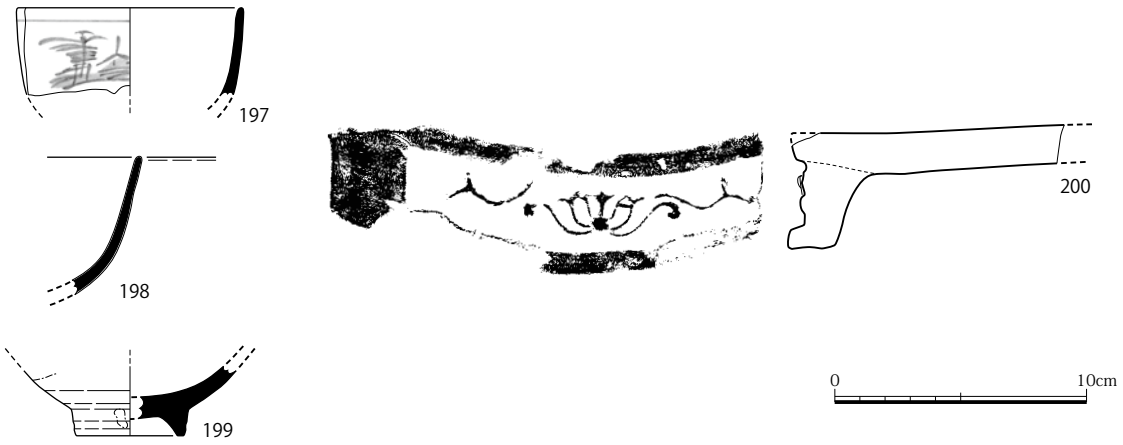


図 38　SK050 出土遺物実測図（S=1/3）

などがある。小片のため図化できていないが、肥前染付の時期から 18 世紀代が下限と思われる。

第２項　遺物

土坑

SK050 出土遺物（図 38、図版 30・31）

国産染付椀（197）　体部が直線的にのびる肥前系染付椀で、薄青色の呉須で山木などの風景が描かれる。全形が不明なため、肥前Ⅲ～Ⅳ期のものと指摘するのに留めておく。

国産陶器椀（198・199）　198 は体部が直線的にのびる口縁で、外面が青緑色、口縁端部から内面は淡緑色の釉が掛かる。199 は内側が斜行する高台をもつ体部下半片で、外面が上半に釉が掛かるがその下半は露胎する。釉調から 198・199 は同一種類のものと思われる。肥前Ⅲ期、内野山窯のものである。

軒平瓦（200）　瓦当中央の三葉文が先端に３本、左右に２本ずつ、両際の唐草文も２又になっていることから、いわゆる橘文軒平瓦と称されるものである。器面は良好に燻され黒色であり、胎土は黒色粒がわずかに混じる。近世Ⅳ期のものと思われる。

　これらの遺物からは下限が 18 世紀代とされる。

第５節　表土出土遺物（図 39、図版 31）

土師器皿（201）　黄橙系の色調で内湾する器形の口径 10cm 台のものである。口縁端部に煤が付着する。３段階のものと思われる。

瓦器皿（202）　見込みにジクザク状の暗文ミガキを施した平底のものである。

瓦質土器（203）　端部が内側に拡張する上面が平坦な口縁部で、外面には２条の端正な突帯が貼り付けられ、２連１単位の渦文が間隔をあけてスタンプされ、その下には直線的な窓を有する。窓部についてはあまり見ない形態であるが、おそらく風炉と思われる。胎土は灰白色で、ほとんど砂粒が混じらない精良なものである。

輸入白磁皿（204）　輪高台をもつ内湾する皿で、光沢がある白色釉が掛けられ、外底周辺は無釉、見込みは蛇の目釉剥ぎする。福建産の D 群で、口径が 11cm 台と大きめのものである。

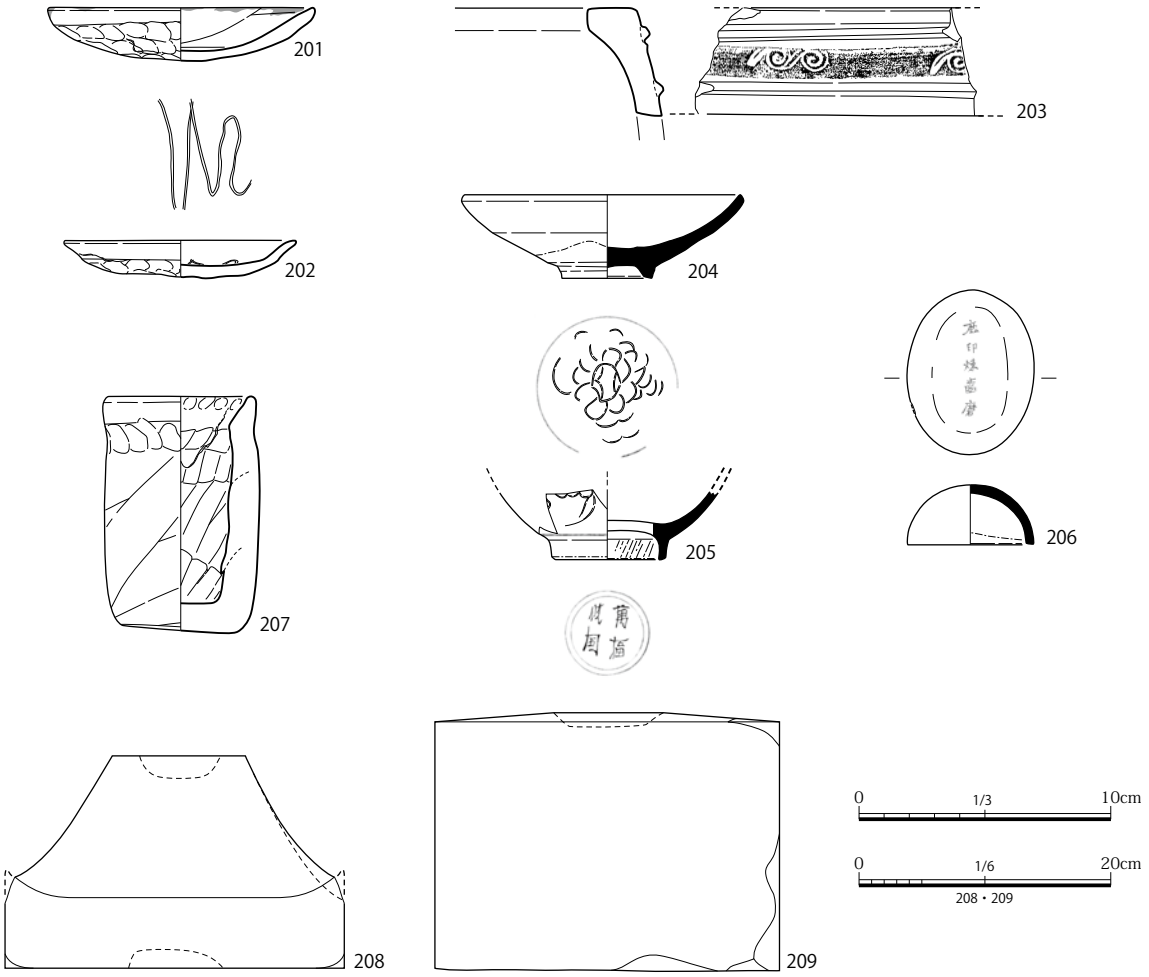


図 39　表土出土遺物実測図（S=1/3・1/6）

輸入染付椀（205）　景徳鎮窯系の見込みが盛り上がるいわゆる饅頭心椀である。見込みには 1 条の圏線内に花芯文が線刻され、外底には「萬福倣同」の字款が呉須で書かれる。体部内外面は無地と思われる。見込みには砂が付着する。E 群椀である。

国産染付蓋（206）　合子状の蓋で、濃青色の呉須で「鹿印練歯磨」と書かれる。1893 年に現在の花王の前身である長瀬商店より発売され広く使われたとされるが、その時期については不明である。

土師器焼塩壺（207）　筒状の焼塩壺である。黄橙系の色調で胎土には 5mm 以下の長石等が混じる。口縁はナデ調整で、その下方は一部指オサエを残しながら板状ナデ調整で平滑に仕上げられている。内側は縦方向の指ナデがみられるが、凹凸は残したままである。

石製品（208・209）　花崗岩製五輪塔の部材である。208 は火輪でほぞ穴を上下に有し、軒上の両角が欠損する。軒下辺が 27.0cm、軒中央部高 5.8cm、全高 16.9cm、ほぞ穴は軒上辺の幅 6.0cm・深さ 2.0cm、下辺は幅 7.5cm、深さ 1.5cm、軒の反り高 1.0cm である。209 は地輪でほぞ穴を有し、下辺面は粗い整形だが各側辺は概ね平滑である。上下辺長は共に 27.2cm、全高 20.3cm、ほぞ穴幅 7.0 ～ 7.5cm、深さ 1.5cm である。大きさ、石材からは同一石塔の部材の可能性もある。

第 4 章　自然科学分析

第 1 節　平城京左京四条六坊八坪・奈良町遺跡出土の動物遺体

1．はじめに

平城京左京四条六坊八坪・奈良町遺跡の発掘調査において、15 世紀以降の遺構から動物遺体が出土した。ここでは、動物遺体の同定結果を報告する。

2．方法

肉眼で試料を観察し、現生標本との比較により、部位と分類群の同定を行った。骨端の癒合状態や解体痕および切断痕の有無を観察し、記載を行った。

3．結果

同定されたのは、貝類でアカニシ（*Rapana venosa*）、鳥綱でキジ科（Phasianidae sp.）、哺乳綱でニホンザル（*Macaca fuscata*）、ニホンジカ（*Cervus nippon*）、イノシシまたはブタ（*Sus scrofa* or *Sus scrofa domesticus*）、ウシ（*Bos taurus*）である（表 1）。以下、遺構ごとにその特徴を述べる。

・S-7

ウシの角芯 1 点が出土した。先端部は欠損しており、切断や加工の痕跡はない。

・S-10

イノシシまたはブタの尺骨および橈骨が出土した。どちらも右側であり、同一個体の可能性が高い。

・SK020

アカニシの殻軸が 1 点出土した。

・S-30（SD060）

哺乳綱の右上腕骨が 1 点出土した。近位部および遠位端を欠いた骨幹部破片であり、種の同定には至らなかった。

・S-46

ニホンジカの左上腕骨が 1 点出土した。骨端は癒合しており、成獣個体と考えられる。

・SD060

最も多くの動物遺体が出土した。鳥類で、キジ科（ニワトリ？）の左上腕骨が出土した。遠位端には、刃物による切断と思われる平坦面が確認された。哺乳類では、ニホンザルの左大腿骨、イノシシまたはブタの右上腕骨、右尺骨、右橈骨、左大腿骨、右脛骨、ウシの角芯が出土した。ウシの角芯は 4 点出土しており、2 点に切断の痕跡が認められた。暗褐土から出土した角芯（図 40-8）は、鋸によると思われる切断の痕が、角幹を一周するように入る。幅 1.5mm、深さ 2mm ほどの切れ目である。また、角芯の根元には、切断による平坦な面が観察できた。もう一方の角芯（図 40-10）には、根元に近い部分に、角芯に対して斜め 45°から刃物を振り下ろしたような、半円状の面を形成する傷跡が観察された。

・SK070

　イノシシまたはブタの右上腕骨が出土した。近位端部が残存する試料で、大結節が欠損する。骨端は癒合しているため、成獣個体と考えられる。

・S-80

　哺乳綱の胸椎が出土した。ほぼ完存で、中型の哺乳綱である。

・SK092

　イノシシまたはブタの左大腿骨が出土した。近位端および遠位部を欠損する骨幹部破片である。

・S-104

　ウシの角芯が出土した。複数の破片に分かれるが、同一個体の角芯と考えられる。破片のため、切断や加工などの痕跡は不明である。

・SE105

　アカニシの殻軸破片、イノシシまたはブタの右肩甲骨、右大腿骨、右脛骨が出土した。イノシシまたはブタ右大腿骨の近位部前面には、２本の解体痕が認められた。

4．考察

　今回同定された動物遺体は、切断痕や解体痕のあるキジ科、イノシシまたはブタなどであり、日常的な食料残滓が廃棄された可能性が高い。また、切断・加工痕のあるウシの角芯が出土しているため、骨角器製作後の不要な部位が廃棄されと考えられる。ウシの角は、角芯を角鞘が覆い、一般的に角鞘のみが骨角器素材として用いられる。そのため、角芯に残る切断や加工の痕跡は、角鞘を取り外すあるいは角鞘を切断する際についた痕跡と考えられる。角鞘を取り外した後の角芯は不要なため、廃棄されたのであろう。骨角器製作をうかがわせる角芯の出土から、周囲に手工業を行う場があったと考えられる。なお、ウシの出土は角に限られ、四肢骨など他の部位は見られなかった。したがって、ウシはその場で解体されたのではなく、必要な部位だけが持ち込まれたと考えられる。当時の都市の空間構造を考える上で貴重な試料と思われるが、当時の骨角器製作の状況把握には動物遺体からだけではなく、共伴した人工遺物などの分析や周辺遺跡との関わりもあわせて考える必要があると思われる。

《参考文献》

松井　章（2008）動物考古学．312p，京都大学学術出版会．
西本豊弘・松井　章（1999）考古学と動物学．210p，同成社．

表 1　出土動物遺体一覧

遺構名	層位	日付	分類群	部位	左右	状態	破片数	重量(g)	備考
S-7	—	200527	ウシ	角芯	不明	先端欠	1	50.5	
S-10	褐色砂	200525	イノシシ or ブタ	尺骨	右	骨幹部（滑車切痕部残）	71	72.3	
	暗褐色砂	200526	イノシシ or ブタ	橈骨	右	近位部残	1	15.2	
SK020	青灰色土	200526	アカニシ	殻		殻軸	1	110.4	
S-30	—	200601	哺乳綱	上腕骨	右	遠位骨幹部残	1	12.1	
S-46	—	200602	ニホンジカ	上腕骨	左	ほぼ完存	1	104.5	骨端癒合
SD060	暗褐色土	200610	キジ科	上腕骨	左	遠位部残	1	3.1	ニワトリ？、遠位端に切断面
	暗褐色土	200610	ニホンザル	大腿骨	左	近位部残	18	12.2	
	褐色砂	200609	ウシ	角芯	不明	先端～角幹一部欠	1	28.2	
	褐色砂	200612	イノシシ or ブタ	大腿骨	左	近位端（後面）残	1	15.2	骨端癒合
	褐色砂	200612	イノシシ or ブタ	上腕骨	右	遠位端残	1	20.9	
	褐色砂	200612	イノシシ or ブタ	上腕骨	右	近位端残	3	27	骨端未癒合
	褐色砂	200612	イノシシ or ブタ	尺骨	右	近位端残	1	9.9	
	褐色砂	200612	イノシシ or ブタ	尺骨	右	遠位端残	1	1.2	骨端未癒合
	褐色砂	200612	イノシシ or ブタ	橈骨	右	遠位端残	2	6.3	骨端未癒合
	褐色砂	200612	哺乳綱	不明	不明	破片	112	21.2	
	青灰色土	200612	ウシ	角芯	不明	根本・角幹一部欠	16	40.6	
	暗褐色土	200612	ウシ	角芯	不明	完存	1	45.5	根元付近に半円状の面を形成する加工痕
	暗褐色土	200612	ウシ	角芯	不明	ほぼ完存	6	38.2	根本：切断、角幹：鋸？による切断痕
	暗褐色土	200612	イノシシ or ブタ	脛骨	右	ほぼ完存	31	82.3	骨端未癒合
SK070	—	200612	イノシシ or ブタ	上腕骨	右	近位端（大結節欠、遠位端欠）	1	50.3	骨端癒合
S-80	—	200617	哺乳綱	胸椎	—	ほぼ完存	1	5.3	中型
SK092	—	200622	イノシシ or ブタ	大腿骨	左	骨幹部（近位端欠、遠位部欠）	1	21.9	骨端未癒合
S-104	—	200622	ウシ	角芯	不明	破片	11	63.6	
SE105	黒褐色土	200623	アカニシ	殻	—	殻軸	3	26.1	
	—	200624	イノシシ or ブタ	肩甲骨	右	近位部残	1	11.3	
	—	200624	イノシシ or ブタ	大腿骨	右	骨幹部（近位端欠、遠位部欠）	1	23.2	骨端未癒合、近位部前面に解体痕
	—	200624	イノシシ or ブタ	脛骨	右	骨幹部（近位端欠、遠位部欠）	9	13.9	

1.アカニシ殻（SK020青灰色土）　2.キジ科左上腕骨（SD060暗褐色土）　3.ニホンザル左大腿骨（SD060暗褐色土）
4.ニホンジカ左上腕骨（S-46）　5.イノシシまたはブタ右上腕骨（SK070）
6～10.ウシ角芯（6:S-7　7:SD060褐色砂　8:SD060暗褐色土　9:SD060青灰色土　10:SD060暗褐色土）

図 40　出土動物遺体

第 2 節　鞴羽口・坩堝の自然科学分析

平城京左京四条六坊八坪・奈良町遺跡で出土した鞴羽口、坩堝の自然科学分析を行った。

1. 分析対象

名称	点数	出土地点	報告番号
鞴羽口（図 41）	1 点	SD060 褐色砂	図 25-100
坩堝（図 43）	1 点	SD071	図 28-114

2. 分析内容

2.1. 材質分析

鞴羽口・坩堝に特異な金属が付着していないかを調べるため、蛍光 X 線分析（以下 XRF）による材質分析を行った。分析は元素マッピングによる全体観察、及びマッピングで観察された特異なポイントの点分析を行った。

2.2. 微小部観察

元素マッピングで観察された特異なポイントの観察を行った。

3. 分析方法及び使用機器

3.1. XRF

XRF は試料に X 線を照射し、その際に試料から放出される各元素固有の蛍光 X 線を観測することにより、試料の構成元素を同定する分析方法である。点分析では微小領域に対して蛍光 X 線分析を行い、その箇所の元素組成を調べる。一方マッピング分析では資料表面を複数の微小領域に分割し、各微小領域において蛍光 X 線分析を行う。得られたデータから各元素のシグナル強度を 2 次元化し、その分布状態を色により視覚化する。

分析条件は大気雰囲気、管電圧 50 kV、管電流 1000 μA、コリメータ 0.2 × 0.2 または 0.5 × 0.5 mm^2、照射時間 120 sec/point、また、X 線管球のターゲットはロジウム（Rh）である。

・蛍光 X 線分析装置「EA6000VX」（日立ハイテクサイエンス）

3.2. 顕微鏡観察

実体顕微鏡および顕微鏡カメラを用いて微小部の拡大画像を保存した。

・実体顕微鏡「Leica M205C」（ライカマイクロシステムズ）

・顕微鏡用デジタルカメラ「FLEXACAM C1」（ライカマイクロシステムズ）

4. 結果

4.1. XRF

鞴羽口

XRF による元素マッピングの結果、銅（Cu）、銀（Ag）、金（Au）は検出されず、鉄（Fe）が強く検出される箇所が観察された（図 42）。よって、鉄製品の製造に使用された可能性が考えられた。なお、破断面（図 41 右下）は凹凸が大きいため測定していない。

坩堝

XRF による元素マッピングの結果、坩堝内側において Fe、Cu、Au が検出された（図 44）。Au が検出された箇所の顕微鏡観察を行ったところ、2 箇所において金色の粒が観察された（図 45、観察箇所図 43-1、図 43-2）。他の Au 検出箇所では観察されず、内部に存在するものと考えられた。元素マッピングで Cu が検出された箇所（図 43-3）、及び観察された 2 つの金色粒の XRF を行った。蛍光 X 線スペクトルを図 46 ～ 48 に示す。Cu 付着箇所では Fe、Cu が強く検出され、銅製品の製造に使用された可能性が考えられた（図 48）。

図 41　鞴羽口

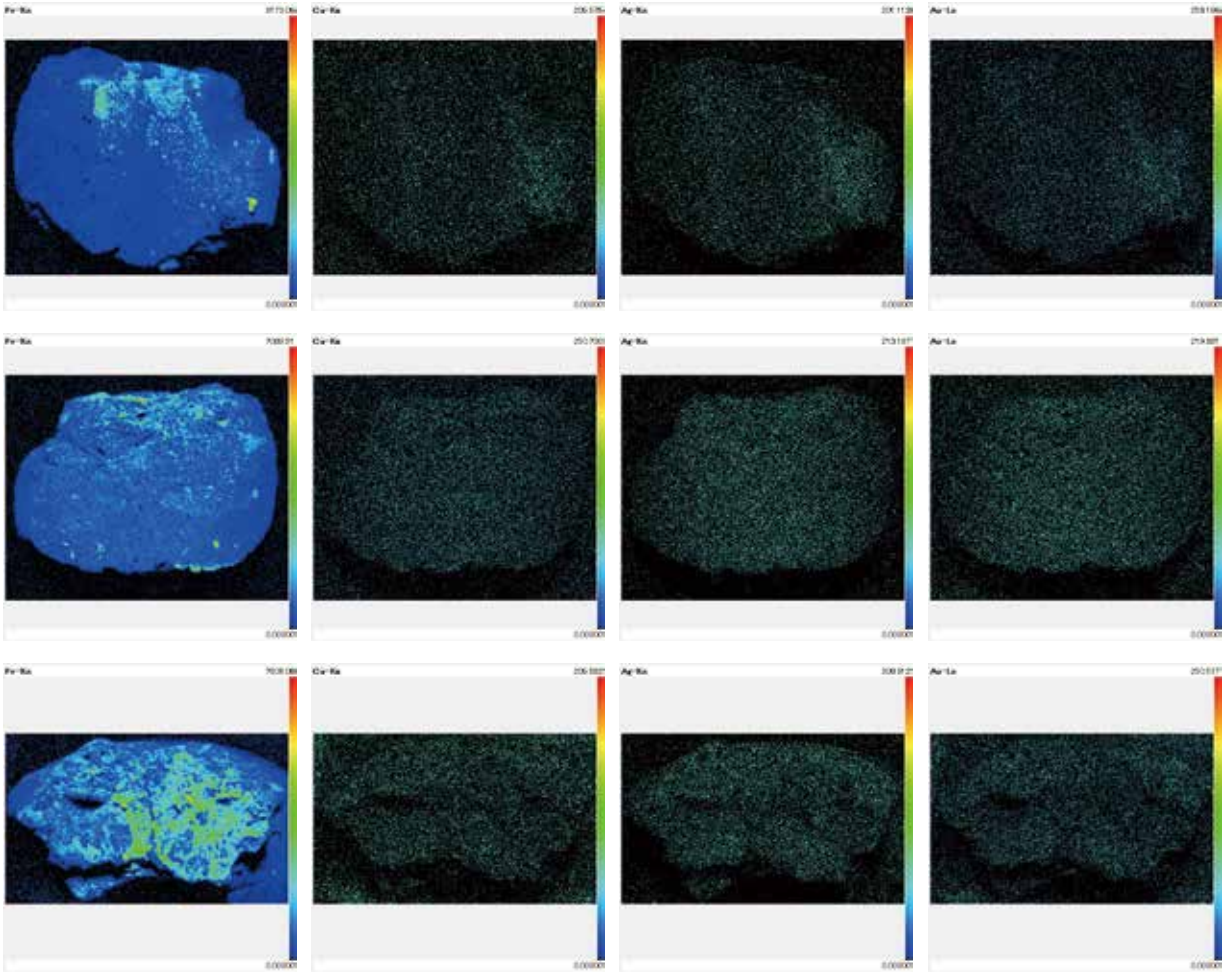


図 42　鞴羽口元素マップ（上段より内側、外側、端面、左より Fe、Cu、Ag、Au）

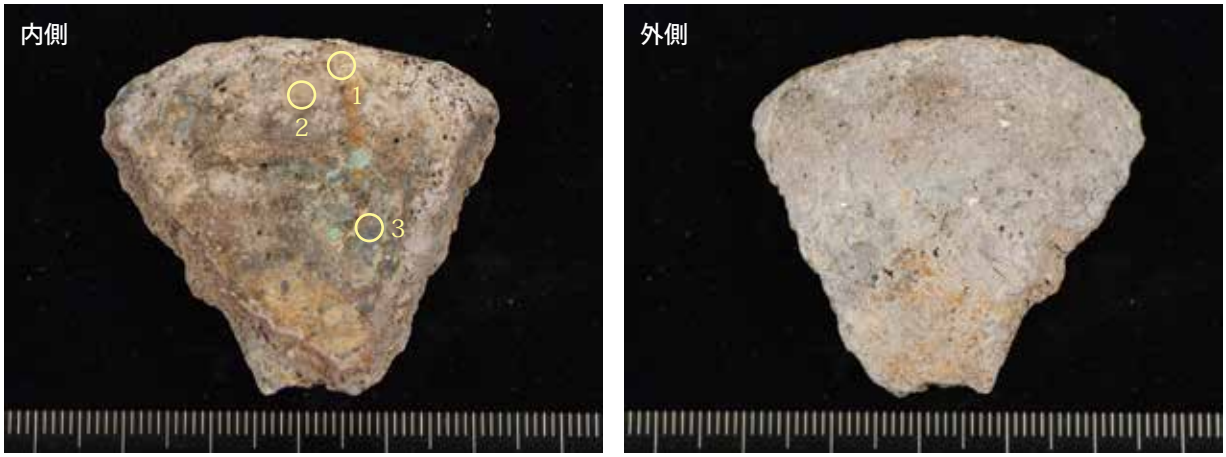


図 43　坩堝（1 ～ 3：XRF 箇所）

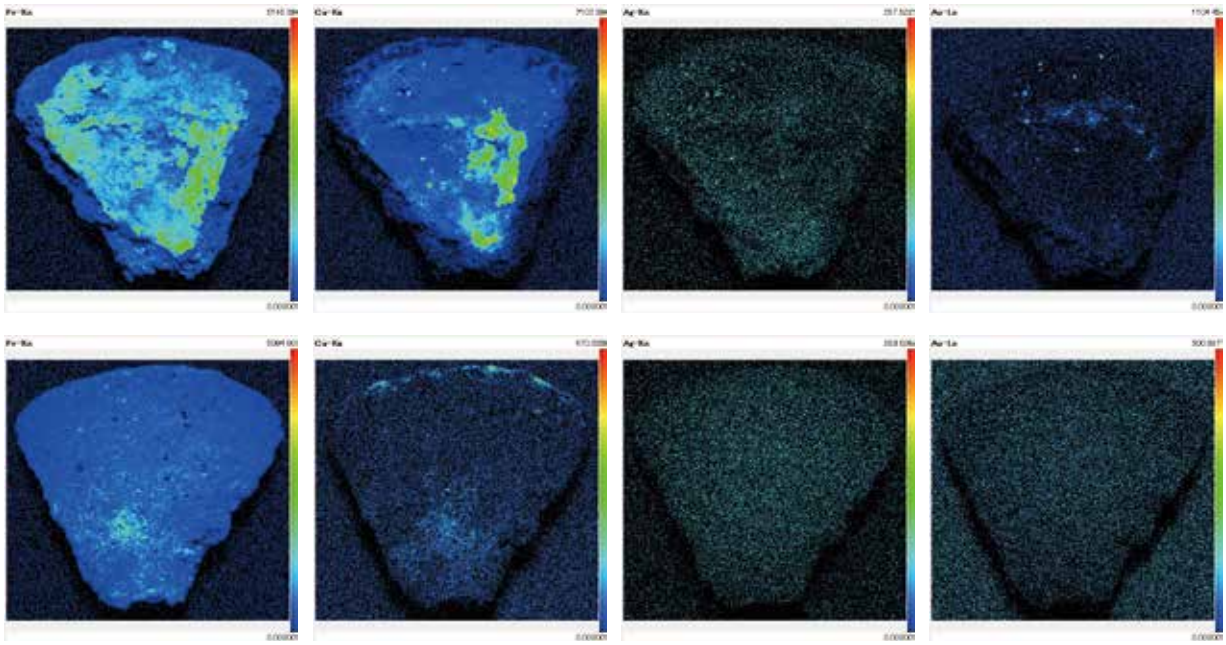


図 44　坩堝元素マップ（上段より内側、外側、左より Fe、Cu、Ag、Au）

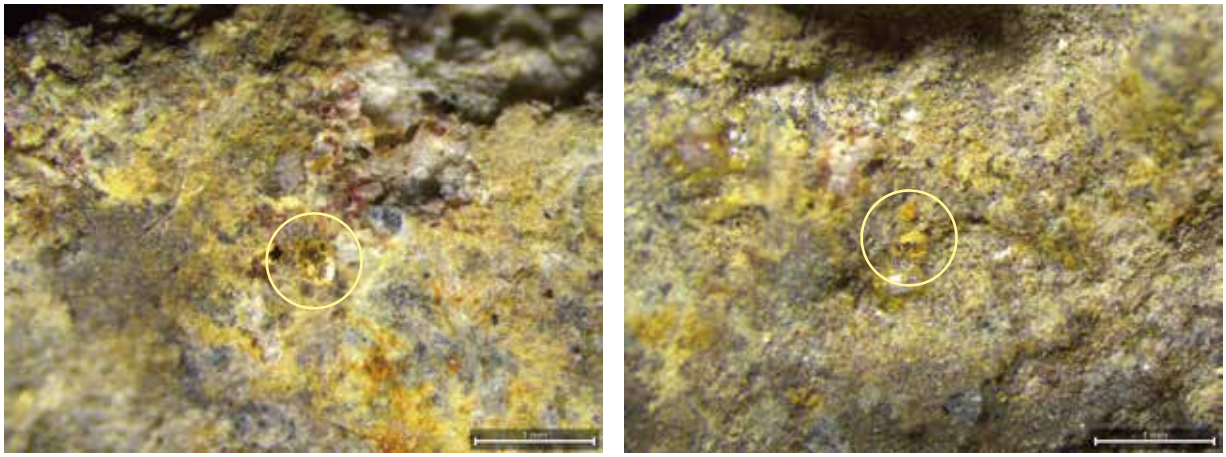


図 45　金色粒の顕微鏡観察像（左より観察箇所図 43-1、図 43-2）

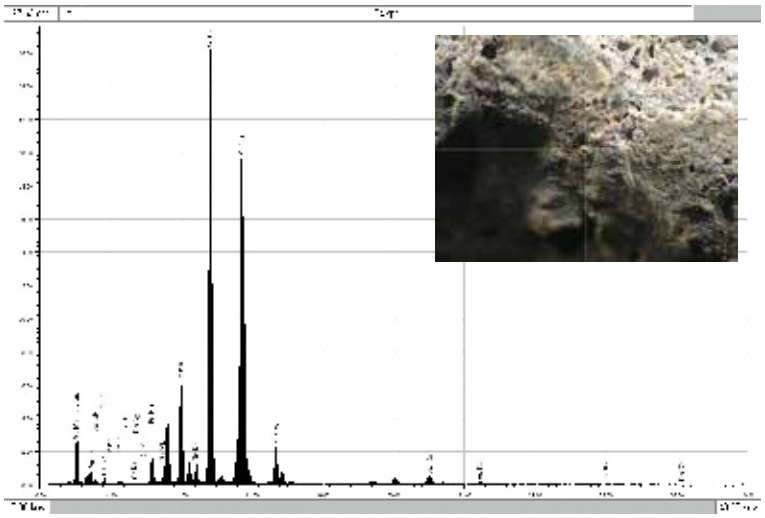


図 46　金色粒の XRF スペクトル（分析箇所図 43-1）

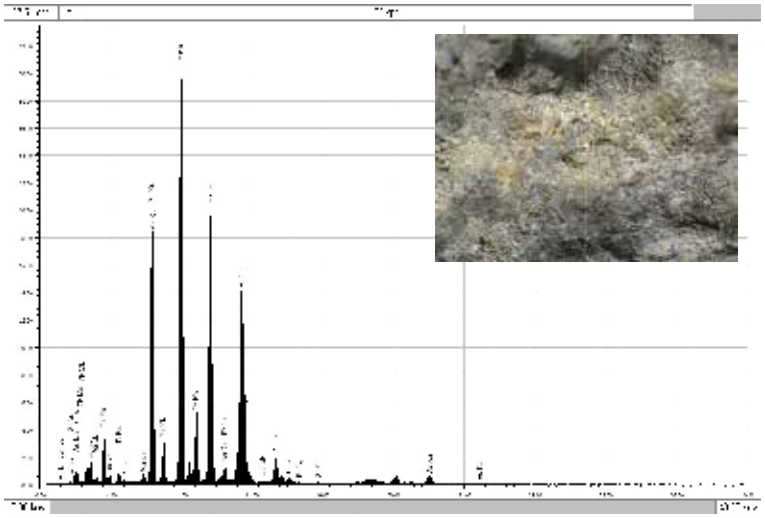


図 47　金色粒の XRF スペクトル（分析箇所図 43-2）

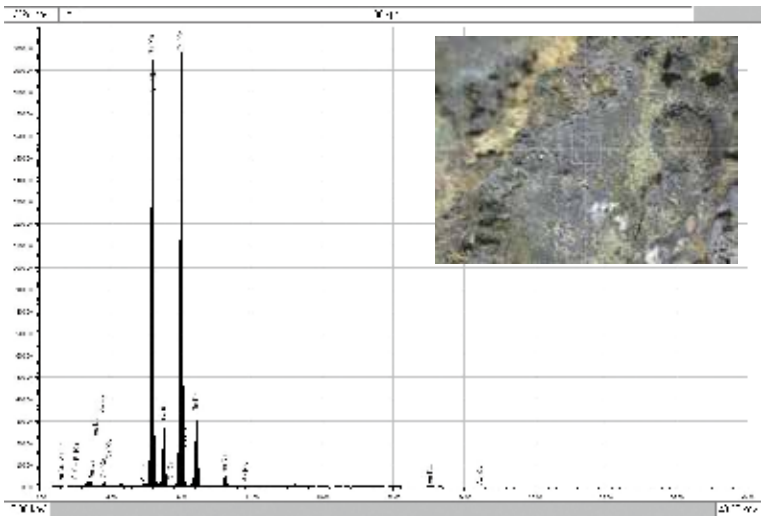


図 48　坩堝内側 Cu 付着箇所の XRF スペクトル（分析箇所図 43-3）

第 3 節　漆付不明製品の自然科学分析

平城京左京四条六坊八坪・奈良町遺跡出土漆付不明製品の自然科学分析を行った。

1. 分析対象

SK068 出土漆製品 1 点（図 49）

図 49 に示した白枠で囲った部分について、実体顕微鏡による観察を実施した。また、微細片を断面観察に使用した。さらに、図 53 に示した細片の実体顕微鏡による観察と赤外分光分析を行った。

2. 分析内容

2.1. 材質分析

資料の材質を調べるため、赤外分光分析で材質を分析した。

2.2. 微小部観察

資料の表面に観察される繊維状の物質を調べるため実体顕微鏡で微小部観察を行った。

2.3. 断面観察

資料の内部構造を調べるため、微小片をエポキシ樹脂に包埋し、ミクロトームを用いて作製した薄片を永久プレパラートとし、生物顕微鏡および金属顕微鏡で観察した。

3. 分析方法及び使用機器

3.1. 赤外分光分析

赤外分光分析は採取した有機質に赤外線を照射して、そこから得られる分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、有機質の材質を同定する分析法である。

装置は全反射フーリエ変換型赤外分光分析装置（以下 ATR-FTIR）（パーキンエルマー製 Spectrum Two）を使用し、分解能 $4cm^{-1}$、検出器 $LiTaO_3$、で分析した。測定は破片を採取し、そのまま装置に設置した後、分析した。その後、資料の反対面を再度同じ条件で分析した。

3.2. 顕微鏡観察

実体顕微鏡および顕微鏡カメラを用いて微小部の拡大画像を保存した。

- 実体顕微鏡「Leica M205C」（ライカマイクロシステムズ）
- 顕微鏡用デジタルカメラ「FLEXACAM C1」（ライカマイクロシステムズ）

3.3. 断面観察

永久プレパラートを観察することで、生物顕微鏡は透過画像が得られ、金属顕微鏡は落射画像が得られる。生物顕微鏡による観察はオリンパス製 BX53、撮影はオリンパス製顕微鏡デジタルカメラ DP-71、金属顕微鏡による観察はライカ製 DM2700M、顕微鏡デジタルカメラ撮影はライカ製 MC190HD を使用した。

4. 結果

4.1. 赤外分光分析

図 53 に示した破片の ATR-FTIR による分析の結果、繊維状の物質が確認された面と確認できな

かった面の両面とも 3400cm^{-1} 付近、2920cm^{-1}、1700cm^{-1} 付近、1600cm^{-1} 付近、1400cm^{-1} 付近、1000cm^{-1} 付近に漆に特徴的なピークが観察された（図 50）。以上の結果より、これらの物質の主成分は漆であると確認できた。

4.2. 顕微鏡観察

図 49 に示した白枠部分の実体顕微鏡による観察の結果、いずれも表面にも幅 10 ～ 20 μ m の繊維状の物質の不規則に配置された状態が確認できた（図 51、図 52）。また、図 49 の B では繊維状のものの断面が中空の状態であることが確認できた。

4.3. 断面観察

図 54 に示した断面は何らかの胎に漆が染み込んだものであると考えられた。白丸印の部分をさらに拡大した画像を図 55 に示した。さらに、図 56 には矢印で示した表面には円形に近い直径 12 ～ 20 μ m の中空の断面が確認できた。様々な組織が確認できたことより和紙などの繊維に漆が染み込んだものではなく、革に漆が染み込んだものの可能性が考えられたが、胎の材質を決定するまでには至らなかった。

図 49　微小部観察箇所（白枠部分 A ～ D）

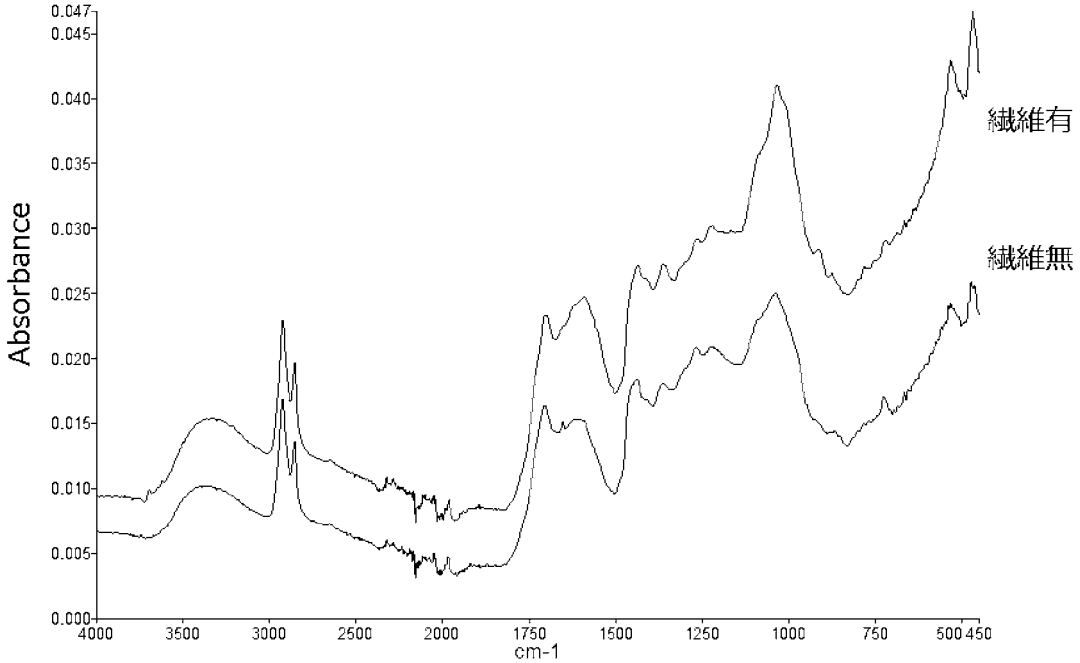


図 50　図 53 に示した破片の赤外吸収スペクトル

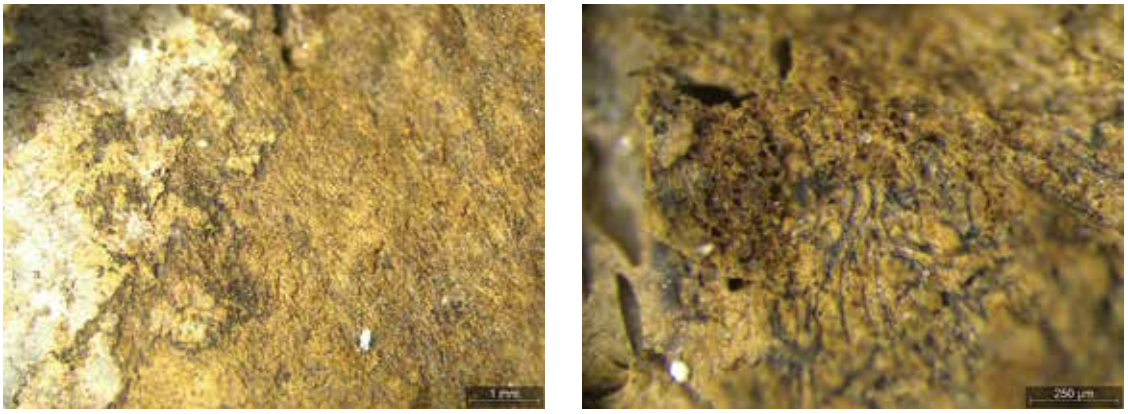


図 51　実体顕微鏡による微小部観察像（左：図 49-A　右：図 49-B）

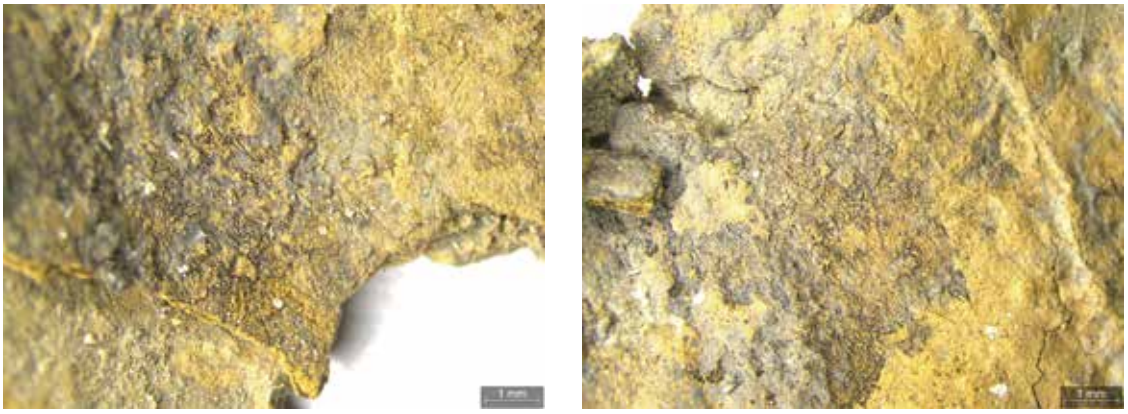


図 52　実体顕微鏡による微小部観察像（左：図 49-C　右：図 49-D）

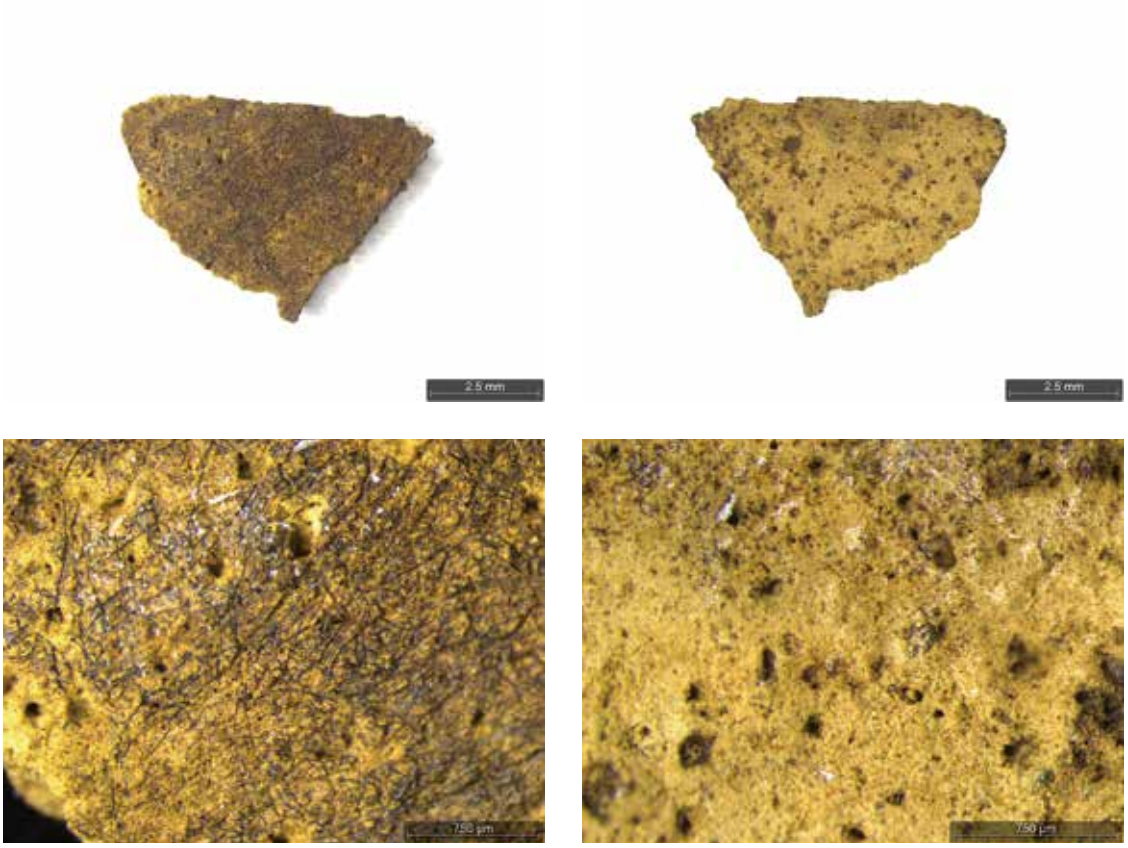


図 53　実体顕微鏡による（上図左：繊維状物質有、上図右繊維状物質無）微小部観察像

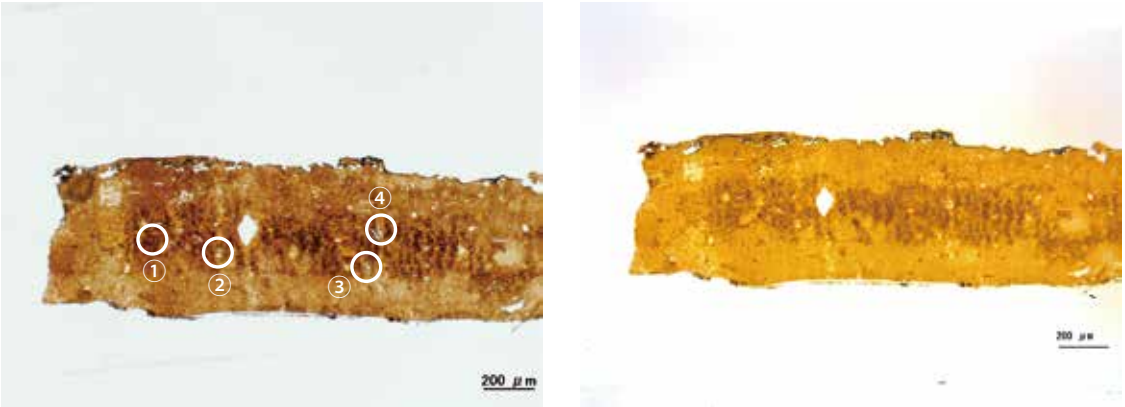


図 54　顕微鏡による断面観察像（全体）（左：透過、右：落射）

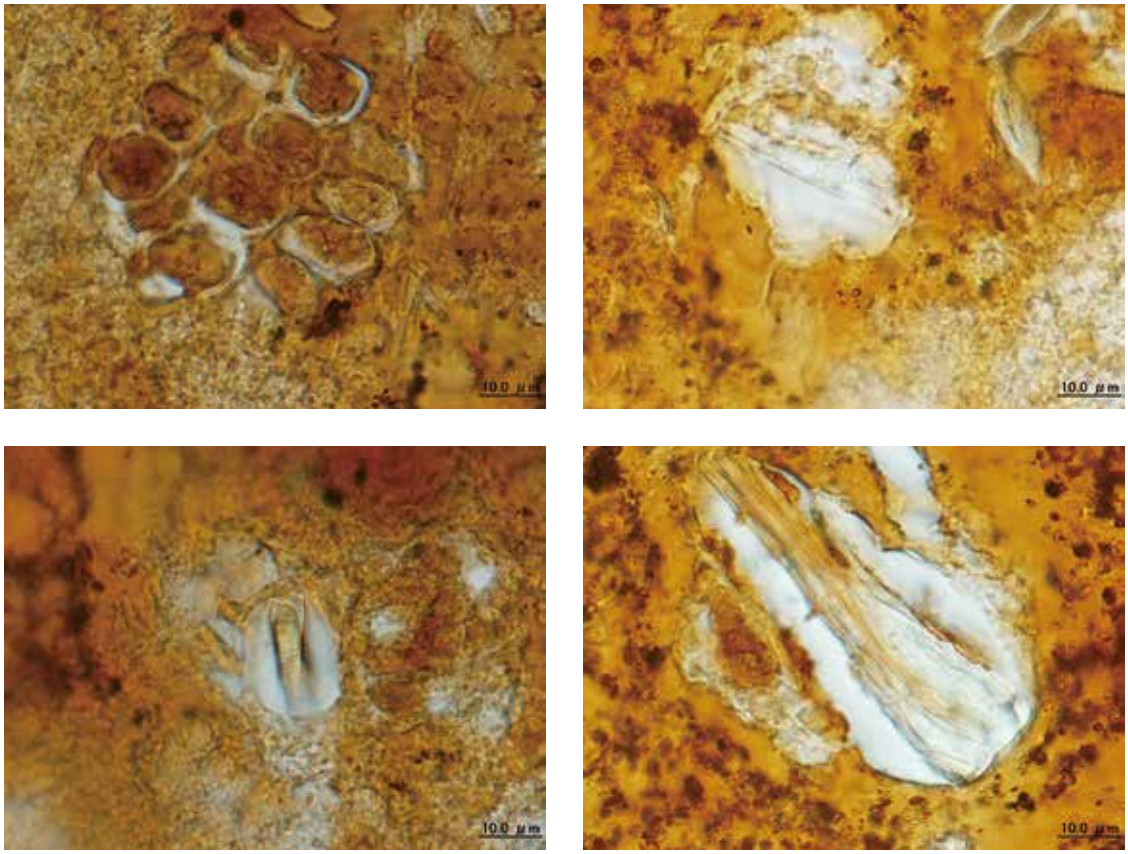


図 55　顕微鏡による断面観察像（左上：図 54- ①、右上：図 54- ②、左下：図 54- ③、右下：図 54- ④）

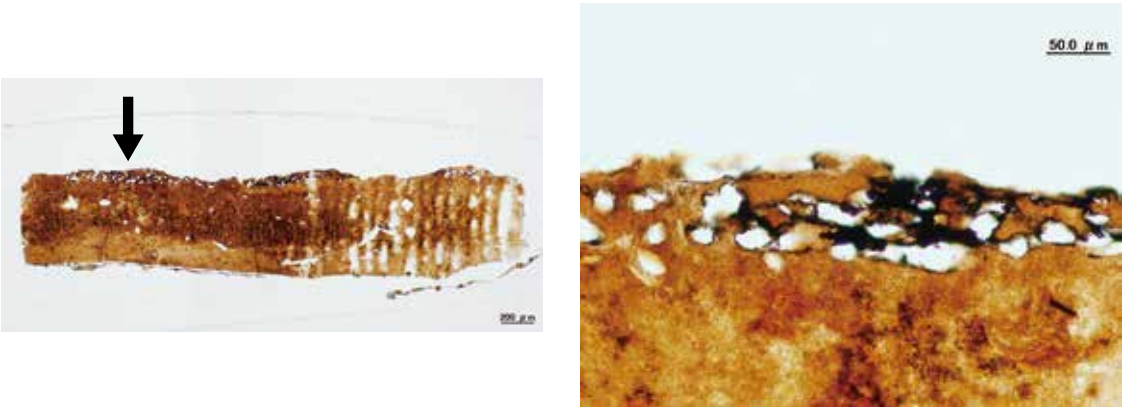


図 56　顕微鏡による断面観察像（左：全体、右：繊維状物質の断面の拡大（矢印部分））

第５章　調査のまとめ

第１節　遺構の変遷

（１）古代以前

本調査地における確実な土地利用は、11 ～ 12 世紀の整地土が確認されているが、それより古い中世以前の遺構として二間×一間以上の掘立柱建物（SB120）がある。出土遺物が小片のため特定できないが、遺構の新旧関係に加えて、柱穴の平面形態が隅丸方形、梁間が二間であること、さらに中世の建物とは異なり北側へ展開することなどから、古代に遡る可能性が考えられる。

時期は特定できないが、直刀であることから古い形状が窺える鉄刀（図 6-15）が地山面に接する整地土から出土していることから、中世以前の可能性も想定される。また、その刀身は非常に薄く実用品とは考えにくいことから､調査地南側に隣接する式内社である率川神社との関連性も想定すべきだろう。今後、発掘調査も含めた周辺の歴史的環境についての調査研究が深まっていくことが期待される。

なお、本調査地における最も古い出土遺物としては埴輪があり、円筒埴輪は第Ⅳ期に比定されるも

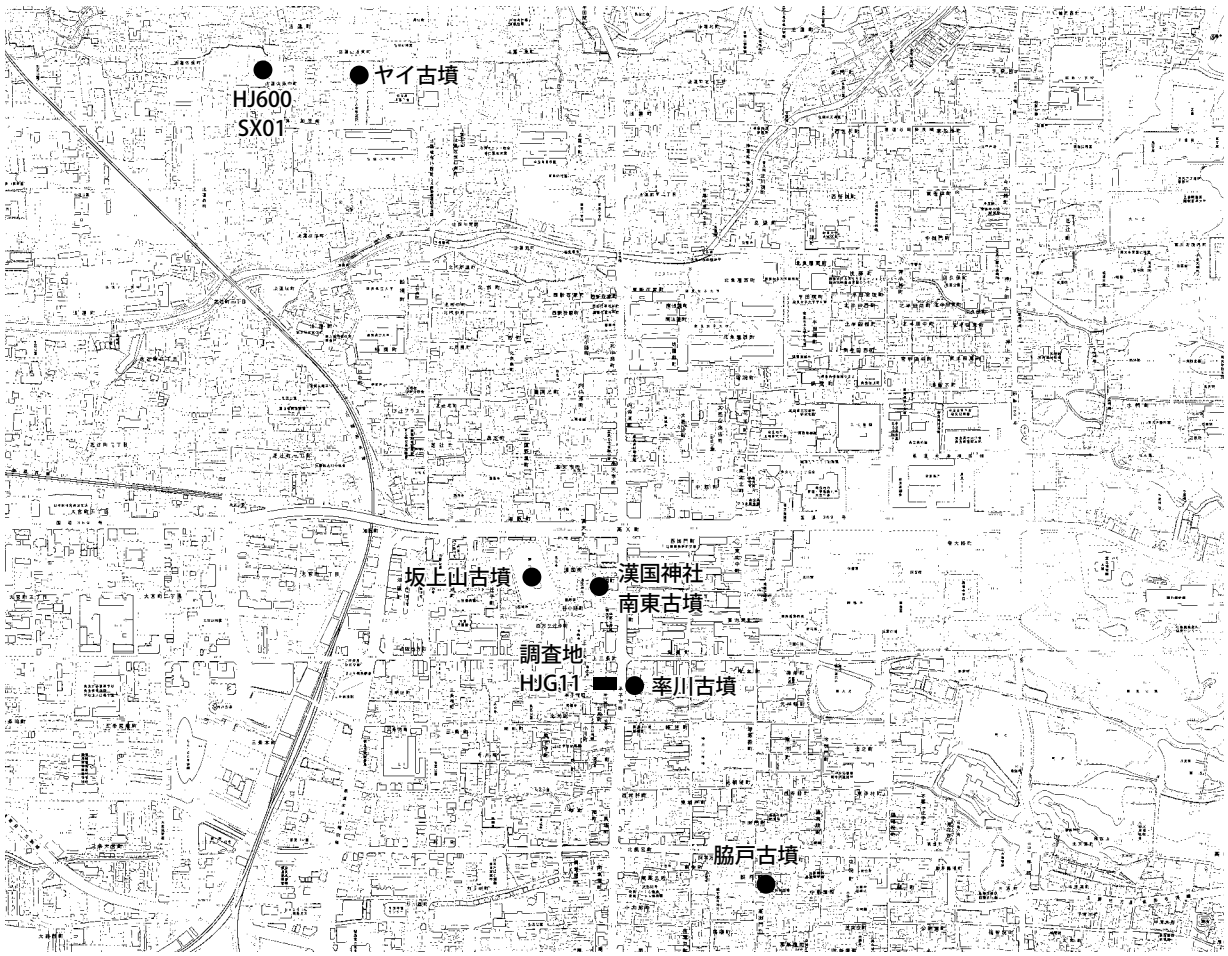


図 57　今回の調査地と周辺の古墳

のである。第２章第２節で記したように、本調査地周辺には発掘調査で確認された率川古墳や漢国神社東南古墳のほか、時期が特定できないものの開化天皇陵に比定されている坂上山古墳がある（鐘方2009、図 57）。率川古墳や漢国神社南東古墳、やや南東に位置する元興寺境内の脇戸古墳（奈良市1994）から出土している円筒埴輪は第Ⅴ期のものであり、本調査地の埴輪はそれらより古いものである。つまり、本調査地周辺にはこれらより古い別の古墳がかつてあったことが想定される。なお、北西約１km 離れた地点で発掘調査が行われた左京二条五坊北郊のヤイ古墳（奈良市 2001）、HJ600 次 SX01（奈良市 2010）は共に全長 18 mの前方後円墳であるが、ここでは第Ⅳ期の埴輪が出土している。

（２）12 ～ 14 世紀

12 ～ 14 世紀の遺構として確定できるものは、東側を中心に整地土（SX080）、当該期の土器類が多く出土する土坑（SK063・090）、溝（SD040）がある。これらの出土遺物は瓦器椀と土師器皿が多く、時期的には 13 世紀代のものが主体である。奈良町遺跡では、本調査地北側の左京三条六坊十坪（HJ559 次、奈良市 2014）・十一坪（HJG9 次、元文研 2021）などでは 12 世紀後半～ 13 世紀にかけて遺構

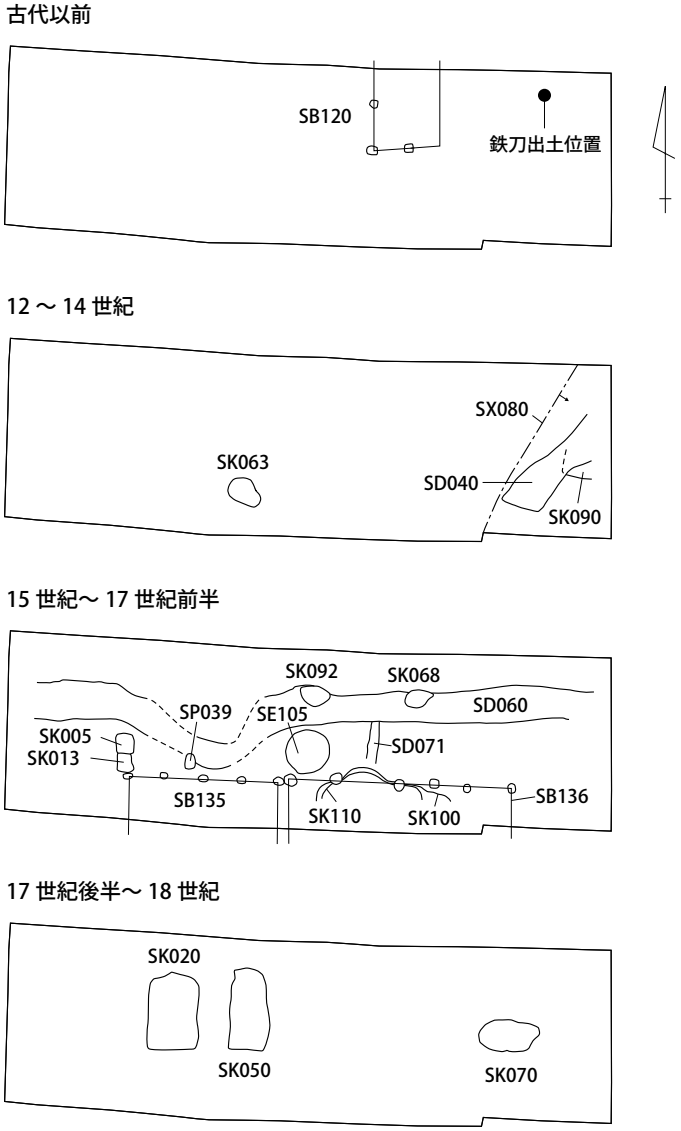


図 58　遺構変遷図

数が増大するようである。本調査地でもこの時期から土地利用が活発化されていくが、その密度は高くなく宅地などの縁辺であった可能性が想定される。

（3）15 ～ 17 世紀前半

本調査地で全面的に遺構が展開するのは、15 世紀に入ってからである。大半は 15 世紀～ 17 世紀前半にかけての遺構であり、掘立柱建物が２基のほか、溝、井戸、土坑がある。

掘立柱建物（SB135・136）は、調査区外の南側に展開するもので、SB136 については柱穴の床面に礎石が置かれていた。柱穴からの遺物には時期幅があるが、その下限は 16 世紀代である。なお、東西方向に延びる溝（SD060）は建物群と軸方向がそろっており、15 世紀～ 16 世紀前半の遺物が主体であることから併存したものであり、区画もしくは境界としての性格が想定される。この溝は現在の率川神社との境界よりも約 10 m北側に位置し、建物群もその敷地内へ及ぶことになる。つまり、この時期には現在の神社敷地境界は成立していなかったことは確かであろう。なお、建物群の北側に井戸（SE105）、土坑（SK068）があり、溝が埋没した後と考えられる 16 世紀後半～ 17 世紀前半のものであることもこの想定を裏付けられる。

当該期の遺構からは、コンテナ 20 箱に及ぶ大量の鉄滓のほか、金色粒が付着した坩堝（図 28-114）など鍛冶関連遺物のほか、漆付不明製品や第 4 章第 1 節で詳述されたように日常的な食糧残滓であるキジ科やイノシシまたはブタの骨、骨角器製作残滓と考えられるウシの角芯などが出土しており、多様な生産活動が行われたことが想定される。

（4）17 世紀後半～ 18 世紀

17 世紀後半以降は遺構・遺物共に少なくなるが、直軸３～ 4m のやや大型の土坑（SK020・050・070）が調査区の北半にみられる。これらは前述したように 16 世紀後半までには埋没した東西方向の溝（SD060）を切るように造られている。特に SK050 は 1m を越える大きな切り株が埋められていること、調査区全体を覆う 1m 以上の近世の整地土から、この一帯において大規模な土地造成が行われたものと考えられる。近世の出土遺物は多くはないが、明らかな 19 世紀の陶磁器類などは少ないことから 17 世紀後半～ 18 世紀の間であると思われる。

《引用文献》
奈良市教育委員会 1994「２元興寺旧境内の調査　（2）僧房推定地　西北行小子房の調査　第 39 次」
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 5 年度
鐘方正樹 2009「率川古墳と外京条坊および出土埴輪」『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成 18（2006）年度　奈良市教育委員会
奈良市教育委員会 2001「7.ヤイ古墳・平城京左京二条五坊北郊の調査　第 437 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 11 年度
奈良市教育委員会 2010「平城京跡（左京二条五坊北郊）の調査　第 600 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成 19（2007）年度
奈良市教育委員会 2014『南都出土中近世土器資料集－奈良町高天町遺跡（HJ 第 559 次調査）出土資料－』
公益財団法人元興寺文化財研究所 2021『平城京左京三条六坊十一坪・奈良町遺跡（HJG9 次）－令和元年度発掘調査報告書－』

第２節　手工業生産関連遺物の出土について

（1）問題の所在

中世都市における手工業民の活動については、1980 ～ 1990 年代を中心として都市の周縁性の問題にかかわり注目が集まった（網野 1978、石井 1981 ほか）。奈良においても文献史学・歴史地理学など複数分野からアプローチがなされているが（豊田 1934ab・1935abc、藤田 1989 ほか）、発掘資料をもとにした研究についてはほとんど進んでおらず、実態がつかみにくい。これは限定的な調査が多い奈良において、まとまった手工業生産関連の遺物が出土する地点が極めて限られており、文献史料との比較検討が十分なされてこなかったことが大きな理由である。こうした状況下、今回の調査の大きな成果は、中世に遡るまとまった金属器生産関連遺物が見つかったことと、加工痕を持つものを含む多量の獣骨が見つかったことで、中世都市奈良における手工業生産の具体像を提示できた点にある。

（2）今回の調査で見つかった手工業生産関連遺物

今回の調査では主に 13 世紀から 17 世紀初頭まで連続して椀形鉄滓を含む鉄滓や鞴羽口が出土し、また 15 世紀以降、17 世紀初頭までの遺構から多数の動物遺体が出土している。動物遺体には解体痕や加工痕があるものが多数見られ、特に牛角は角鞘を取り外した角芯のみが出土しており、角の加工が行われていたことを示している。また、アカニシ貝の出土は貝紫染色の原材料である可能性もある。こうした手工業の痕跡が見られるのと同時に、解体痕を持つキジ科の骨にみられるように、食糧残滓の存在が認められるほか、シカ、イノシシ、サルなどは奈良周辺の自然環境下に生息する動物であり、特にシカはその殺傷が禁じられていることから、都市へ入り込んで死亡した動物の遺体処理が行われていたことも想定できる。

こうした遺物の出土状況からは、当地が多様な手工業生産を行う場であったと同時に、動物遺体の廃棄や処理なども行う複合的な性格の場であったと考えることができる。

（3）中世都市奈良の手工業生産関連遺物

中世都市奈良における手工業生産関連遺物は、基本的に都市内部でまとまって見つからない点が特徴である（佐藤 2022）。都市形成期である 11・12 世紀には平城京左京四条六坊八坪（市 490 次：市概報平成 15 年度）、平城京左京三条六坊十坪（市 559 次：市年報平成 18 年度）などで比較的まとまった金属器生産の痕跡が確認されているほか、13 世紀以降は都市内各所で散発的に鉄滓や鞴羽口が出土しているが、今回の調査地ほどの集中出土は類例を見ない。このことは獣骨・加工骨の出土事例でも同じで、これらは金属器生産関連遺物以上に散発的であり、まとまった出土は今回の調査地が唯一である。今回の調査で見つかった金属器生産関連遺物と獣骨、加工骨は極めて特異なものと評価できよう。ただし、平城京左京三条五坊十三坪（市 354 次：市概報平成 8 年度）では 16 世紀後半と考えられる埋桶遺構 SX04 から解体痕のあるイヌ、イノシシ、ウマ、シカ、マグロ、アワビが見つかっている。この調査地は中世の都市域の外れにあたり、隣接地の調査（市 117 次：市概報昭和 61 年度）からは近世の遺構から多数の獣骨が見つかるなど特殊な様相を呈する（松井 1997）。

（4）中近世移行期における変化

中世都市奈良から近世奈良町へと都市構造が変化するなかで、考古資料から最大の変化を読み取ることができるのは、元興寺旧境内における金属器生産関連遺物の大量出土である。元興寺旧境内は中世をとおして何らかの都市規制が働いていたようで、主要伽藍が退転したのちも無秩序に町屋化しなかった。ところが、16 世紀後半から 17 世紀前半にかけて急速に都市化し、17 世紀前半には大量の金属器生産関連遺物が出土するようになる（佐藤 2003・2022）。このことは天領化に伴う都市政策の一環として手工業生産関連の再編が行われた可能性を想起させるが、元興寺旧境内域におけるこの変化が、今回の調査地における金属器生産関連遺物の消滅と年代を一にすることは注意が必要である。今回の調査地から南へ約 300m の地点で行われた調査（市 688 次：市年報平成 27 年度）では江戸時代前期の大量の金属器生産関連遺物が見つかっている。ここは貞享 4（1687）年刊『奈良曝』には刀鍛冶の集住地とされており、これを裏付けるような遺物の出土状況である。ただし、ここでは動物骨は伴っていない。元興寺旧境内においても動物骨は確認されておらず、両者が分離した形で再編が行われている。

（5）中近世以降期における手工業生産

中世後期～末期における奈良の手工業生産は、今回の調査によって金属器生産と骨角器生産、食物残滓と動物遺体処理が並立する複合型とすることができるようになった[1)]。また、今回の調査地は都市域の外れに位置しており、公設コンビナートではなく、自然発生的に形成された場とすることが自然である。これに対し、近世以降の手工業生産のあり方は金属器生産と動物遺体の取り扱いが分離し、また特に金属器生産においては中世からの連続を辿れない新しい工房の出現が特徴的である。特に動物遺体処理については身分制度の問題も関わっており[2)]、為政者の都市政策との関係を考えることができる。まだまだ資料が十分とは言い難いが、今回の調査成果が投げかけるものは大きい。

註

1） 11 世紀から中世を通じて手工業関連遺物が出土する平城京左京三条六坊十坪（市 559 次：市年報平成 18 年度）でも金属器生産関連遺物とともに獣骨や加工痕のある鹿角などが出土している。なおこの調査地は奈良市教育委員会のご厚意により、出土遺物全点の観察を行った。

2） 丹生谷哲一や山村雅史によると、奈良における馬の治療や斃死牛馬の取り扱いに、河原者と呼ばれる人々が関わっていたとのことである（丹生谷 1997、山村 1999）。

《参考引用文献》

網野善彦 1978『無縁・公界・楽』平凡社（1996 年に増補版刊行）
石井 進 1981「都市鎌倉における「地獄」の風景」御家人制研究会編『御家人制の研究』吉川弘文館
佐藤亜聖 2003「中世奈良町と元興寺」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会
佐藤亜聖 2022『中世都市奈良の考古学的研究』吉川弘文館
豊田 武 1934 a「大和の諸座」（一）歴史地理六四－三　歴史地理学会
豊田 武 1934 b「大和の諸座」（二）歴史地理六四－六　歴史地理学会
豊田 武 1935 a「大和の諸座続篇」（上）歴史地理六六－一　歴史地理学会
豊田 武 1935 b「大和の諸座続篇」（中）歴史地理六六－二　歴史地理学会
豊田 武 1935 c「大和の諸座続篇」（下）歴史地理六六－三　歴史地理学会
丹生谷哲一 1997「中世河原者に関する史料断片」『部落解放　なら』第 7 号　奈良県部落解放研究所
藤田裕嗣 1989「十六世紀都市住人の活動から見た商品流通」『日本都市史入門』Ⅰ空間　東京大学出版会
松井 章 1997「考古学から見た動物利用」『部落解放　なら』第 8 号　奈良県部落解放研究所
山村雅史 1999「中近世移行期奈良における河原者－寛文四年の申状案文の再検討－」『研究紀要』第 4 号　奈良県立同和関係史料センター

関連資料

図 59　検出遺構配置略図
表 2 ～ 8　報告遺物一覧（1）～（7）
表 9 ～ 14　検出遺構および出土遺物一覧（1）～（6）

図 59　検出遺構配置略図（S=1/200）

表 2　報告遺物一覧（1）

報告番号	挿図	写真図版	出土遺構層位	種別器種	口径（長）	器高（幅）	底径（厚）	重	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
1	図 6	図版 16	SX080	土師器 皿	6.7	1.3	*		100%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石	良 浅黄橙 7.5YR8/4	
2	図 6	図版 16	SX080	土師器 皿	8.6	1.2	*		100%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫	良 浅黄橙 7.5YR8/4	
3	図 6	図版 16	SX080	土師器 皿	8.6	1.5	*		70%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母・チャート	良 橙 5YR7/6	
4	図 6	図版 16	SX080	土師器 皿	（9.3）	2.0	*		50%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母・チャート	良 橙 5YR7/6	
5	図 6	図版 16	SX080	土師器 皿	（12.3）	2.3	*		50%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙 5YR7/6	
6	図 6	図版 16	SX080	土師器 皿	（13.3）	2.5	*		25%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙 5YR7/6	
7	図 6	図版 16	SX080	土師器 皿	12.9	2.1	*		50%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 浅黄橙 7.5YR8/3	
8	図 6		SX080	土師器 皿	（13.0）	3.1	*		20%	やや粗 微小砂粒	良 浅黄橙 10YR8/3	
9	図 6	図版 16	SX080	須恵器 鉢	*	（4.7）	*		口縁部細片	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・チャート	良 灰白 N7/0	東播系
10	図 6	図版 16	SX080	須恵器 鉢	*	（4.7）	*		口縁部細片	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・チャート	良 灰白 N7/0	東播系
11	図 6		SX080	瓦器 椀	（12.0）	（2.6）	*		25%	密 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	
12	図 6	図版 16	SX080	瓦器 椀	（12.7）	4.2	4.8		35%	密 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N6/0	
13	図 6		SX080	瓦器 椀	（13.4）	4.1	*		50%	密 微小砂粒	良 灰 N6/0	
14	図 6	図版 16	6 層	輸入陶器 壺	*	（5.3）	*		顎～肩部 細片	やや粗 ～ 3mm 石英・長石	良 灰 N/0	二次焼成 タイ
15	図 6	図版 17	66 層	金属製品 刀	（41.7）	5.2	4.0	542.7		鉄		
16	図 10		SD040	土師器 皿	（12.5）	2.3	*		25%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	良 橙 5YR7/6	
17	図 10	図版 17	SD040	土師器 皿	（12.6）	2.7	*		50%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母・チャート	やや不良 橙 5YR7/6	
18	図 10		SD040	土師器 皿	*	（2.9）	*		20%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・雲母・クサリ礫	良 浅黄橙 7.5YR8/6	
19	図 10	図版 17	SD040	土師器 釜	*	（5.2）	*		口縁部細片	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 浅黄橙 10YR8/3	
20	図 10		SD040	瓦器 椀	*	（3.7）	*		体部細片	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N5/0	
21	図 10		SD040	瓦器 椀	*	（4.6）	（4.6）		底部 50%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・チャート	良 灰 N4/0	
22	図 10		SD040	瓦器 椀	*	（1.2）	5.6		底部 50%	やや粗 微小砂粒	良 灰 N5/0	
23	図 10	図版 17	SD040	瓦質土器 瓶	*	（6.9）	*		体部 50%	粗 ～ 4mm 石英・長石・雲母	やや不良 灰 N5/0	
24	図 10	図版 17	SD040	輸入磁器 白磁椀	*	（3.8）	*		体部細片	密 微小砂粒・黒色粒	良 灰白 5Y8/1	
25	図 10	図版 17	SD040	輸入磁器 白磁皿	*	（2.9）	*		体部細片	密 微小砂粒	良 灰白 10YR8/2	
26	図 11	図版 17	SK063	土師器 皿	9.0	1.7	*		100%	やや粗 ～ 4mm 石英・長石・クサリ礫・雲母・チャート	良 橙 2.5YR7/6	
27	図 11	図版 17	SK063	土師器 皿	（9.0）	1.0	*		40%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・雲母	良 浅黄橙 7.5YR8/3	
28	図 11	図版 17	SK063	土師器 皿	（9.0）	1.1	*		50%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母・チャート	良 橙 2.5YR7/8	
29	図 11	図版 17	SK063	土師器 皿	（11.9）	3.0	*		60%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙 5YR7/8	
30	図 11	図版 17	SK063	土師器 皿	11.8	2.6	*		50%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 橙 5YR7/8	
31	図 11	図版 18	SK090	土師器 皿	8.2	1.4	*		50%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 浅黄橙 7.5YR8/4	
32	図 11		SK090	土師器 皿	（9.0）	1.2	*		35%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 浅黄橙 7.5YR8/4	

表 3　報告遺物一覧（2）

報告番号	挿図	写真図版	出土遺構層位	種別器種	口径（長）	器高（幅）	底径（厚）	重	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
33	図 11	図版 18	SK090	土師器 皿	9.3	1.9	＊		60%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母・チャート	良 橙 7.5YR7/6	
34	図 11	図版 18	SK090	土師器 皿	（9.4）	1.5	＊		70%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙 2.5YR7/6	
35	図 11		SK090	土師器 皿	12.9	2.5	＊		70%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・雲母	良 浅黄橙 10YR8/4	
36	図 11	図版 18	SK090	土師器 皿	（13.5）	2.8	＊		25%	やや粗 ～ 4mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 浅黄橙 7.5YR8/6	
37	図 11	図版 18	SK090	土師器 皿	13.6	3.0	＊		80%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 浅黄橙 7.5YR8/4	
38	図 11	図版 18	SK090	瓦器 皿	（8.3）	2.1	＊		60%	密 微小砂粒	良 灰 N6/0	
39	図 11		SK090	瓦器 皿	9.3	1.1	＊		25%	やや粗 微小砂粒	良 灰 N4/0	
40	図 11	図版 18	SK090	瓦器 椀	12.8	4.0	5.2		100%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N5/0	
41	図 11	図版 18	SK090	瓦器 椀	（13.0）	3.9	（5.0）		25%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石	良 灰 N6/0	
42	図 11		SK090	瓦器 椀	（13.9）	3.9	6.4		25%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石	良 灰 N5/0	
43	図 11		SK090	瓦器 椀	（14.2）	4.2	（4.4）		35%	やや粗 微小砂粒	良 灰 N6/0	
44	図 11		SK090	瓦器 椀	（13.8）	5.0	4.3		20%	やや粗 微小砂粒	良 灰白 N7/0	
45	図 11		SK090	瓦器 椀	＊	（2.9）	5.0		底部 100%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N6/0	
46	図 11	図版 19	SK090	土製品 土製円板	7.9	7.9	1.8	122.7		やや粗 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 白 N9/0	輸入白磁椀 転用
47	図 11	図版 19	SK090	埴輪 円筒埴輪	＊	（6.2）	＊		体部細片	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母・チャート	良 橙 5YR7/6	
48	図 21		SB135e	土師器 皿	＊	（1.1）	＊		体部細片	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙 5YR7/8	
49	図 21		SB135d	土師器 皿	＊	（2.8）	＊		口縁部細片	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙 5YR7/6	
50	図 21		SB135d	土師器 釜	＊	（3.7）	＊		口縁部細片	やや粗 ～ 1mm 石英・長石	良 浅黄橙 10YR8/3	
51	図 21	図版 19	SB135a	瓦質土器 鉢	＊	（4.1）	＊		口縁部細片	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 灰 N4/0	
52	図 21		SB135e	瓦質土器 擂鉢	＊	（4.8）	（7.7）		底部 50%	やや粗 ～ 6mm 石英・長石・チャート	やや不良 灰 N6/0	
53	図 21		SB136e	土師器 皿	＊	（2.5）	＊		体部細片	やや粗 ～ 5mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙 5YR7/6	
54	図 21		SB136d	土師器 皿	＊	（2.0）	＊		体部細片	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・雲母	良 灰白 10YR8/2	
55	図 21	図版 19	SB136a	輸入磁器 青磁盤	＊	（4.0）	＊		口縁部細片	密 微小黒色粒	良 白 N9/0	（釉）明緑灰 10GY8/1 龍泉窯系
56	図 21	図版 19	SB136b	瓦 鬼瓦	（11.4）	（8.0）	5.3			やや粗 ～ 8mm 石英・長石・クサリ礫・雲母・チャート	良 灰 N6/0	
57	図 22	図版 19	SP039	鉄滓 椀形鉄滓	10.4	10.8	4.4	536.1				
58	図 23		SD060	土師器 皿	7.1	1.4	＊		100%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫	良 浅黄橙 7.5YR8/4	
59	図 23		SD060	土師器 皿	7.5	1.5	＊		95%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 浅黄橙 7.5YR8/3	
60	図 23		SD060	土師器 皿	（12.4）	3.2	＊		35%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石	良 灰白 10YR8/2	
61	図 23	図版 19	SD060 暗褐色土	土師器 皿	7.4	1.7	＊		100%	やや粗 ～ 6mm 石英・長石・雲母・チャート	良 浅黄橙 10YR8/3	
62	図 23		SD060 暗褐色土	土師器 皿	7.3	1.6	＊		70%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 淡橙 5YR8/3	
63	図 23		SD060 暗褐色土	土師器 皿	7.7	1.3	＊		80%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 淡黄橙 7.5YR8/4	

表 4　報告遺物一覧（3）

報告番号	挿図	写真図版	出土遺構層位	種別器種	口径（長）	器高（幅）	底径（厚）	重	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
64	図 23	図版 19	SD060 暗褐色土	土師器 皿	8.3	2.0	*		100%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・雲母	良 にぶい黄橙 10YR7/2	
65	図 23		SD060 暗褐色土	土師器 皿	(8.4)	1.9	*		50%	やや粗 ～ 4mm 石英・長石・クサリ礫	良 浅黄橙 10YR8/3	
66	図 23		SD060 暗褐色土	土師器 皿	10.0	2.2	*		100%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・雲母	良 淡黄 2.5Y8/3	
67	図 23		SD060 暗褐色土	土師器 釜	*	(6.0)	*		体部細片	やや粗 ～ 4mm 石英・長石・チャート	良 灰白 10YR8/2	
68	図 23	図版 20	SD060 暗褐色土	瓦質土器 蓋	*	(3.2)	*		口縁部細片	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・雲母・チャート	良 暗灰 N3/0	
69	図 23		SD060 暗褐色土	瓦質土器 擂鉢	*	(6.0)	*		口縁部細片	やや粗 ～ 4mm 石英・長石	良 灰 N5/0	
70	図 23	図版 20	SD060 暗褐色土	輸入磁器 青磁椀	*	(3.8)	*		口縁部細片	密 微小砂粒	良 灰白 N8/0	(釉) オリーブ灰 2.5GY6/1 龍泉窯系
71	図 23	図版 20	SD060 暗褐色土	輸入磁器 青磁椀	*	(3.4)	5.2		底部 100%	密 ～ 2mm 微小黒色粒	良 白 N9/0	龍泉窯系
72	図 23	図版 20	SD060 暗褐色土	輸入磁器 青磁皿	*	(2.0)	*		体部細片	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・黒色粒	良 にぶい橙 7.5YR7/4	龍泉窯系
73	図 23		SD060 暗褐色土	輸入磁器 白磁皿	*	(2.2)	*		体部細片	密 微小砂粒	良 白 N9/0	景徳鎮窯系
74	図 23	図版 20	SD060 暗褐色土	輸入磁器 染付椀	*	(4.0)	*		口縁部細片	密 微小砂粒	良 灰白 N8/0	景徳鎮窯系
75	図 23		SD060 暗褐色土	瓦 平瓦	(10.2)	(7.7)	2.5			やや粗 ～ 2mm 石英・長石・雲母	良 灰 N6/0	
76	図 24	図版 20	SD060 褐色砂	土師器 皿	7.6	1.8	*		100%	やや粗 ～ 4mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 浅黄橙 10YR8/3	
77	図 24	図版 20	SD060 褐色砂	土師器 皿	7.6	1.3	*		100%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 浅黄橙 7.5YR8/3	
78	図 24		SD060 褐色砂	土師器 皿	8.0	1.7	*		100%	やや粗 ～ 4mm 石英・長石・雲母	良 浅黄橙 7.5YR8/3	
79	図 24	図版 20	SD060 褐色砂	土師器 皿	8.9	1.8	*		60%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙 5YR7/6	
80	図 24		SD060 褐色砂	土師器 釜	(25.4)	(7.3)	*		体部 35%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石	良 灰白 10YR8/2	
81	図 24		SD060 褐色砂	須恵器 鉢	*	(4.0)	*		口縁部細片	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	東播系
82	図 24		SD060 褐色砂	瓦質土器 鉢	*	(6.6)	*		体部細片	やや粗 ～ 2mm 石英・長石	良 灰 N6/0	
83	図 24	図版 20	SD060 褐色砂	瓦質土器 鉢	*	(6.5)	*		口縁部細片	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	
84	図 24		SD060 褐色砂	瓦質土器 擂鉢	*	(6.8)	10.0		底部 100%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・黒色粒	やや不良 灰 N6/0	
85	図 24	図版 20	SD060 褐色砂	輸入磁器 青磁椀	(11.6)	6.0	*		25%	密 微小黒色粒	良 白 N9/0	(釉) 明オリーブ灰 2.5GY7/1 龍泉窯系
86	図 24	図版 20	SD060 褐色砂	輸入磁器 青磁椀	*	(3.0)	5.4		底部 100%	密 微小黒色粒	良 灰白 N8/0	(釉) オリーブ灰 10Y5/2 龍泉窯系
87	図 24	図版 21	SD060 褐色砂	輸入磁器 青磁椀	*	(2.8)	4.2		底部 100%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石	良 灰白 N7/0	(釉) オリーブ灰 2.5GY5/1 龍泉窯系
88	図 24	図版 21	SD060 褐色砂	輸入磁器 青磁椀	*	(3.0)	4.4		底部 100%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	(釉) 明オリーブ灰 5GY7/1 龍泉窯系
89	図 24		SD060 褐色砂	輸入磁器 白磁皿	*	(1.3)	4.2		底部 100%	密 微小砂粒	良 白 N9/0	高台内墨 福建
90	図 24	図版 21	SD060 褐色砂	輸入磁器 染付小杯	(7.6)	3.8	(2.7)		25%	密 微小黒色粒	良 白 N9/0	景徳鎮窯系
91	図 24	図版 21	SD060 褐色砂	国産陶器 皿	(12.0)	3.0	(7.0)		25%	やや粗 微小砂粒	良 灰白 7.5YR8/1	(釉) 灰白 7.5Y8/2 瀬戸

表 5　報告遺物一覧（4）

報告番号	挿図	写真図版	出土遺構層位	種別器種	口径（長）	器高（幅）	底径（厚）	重	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
92	図 24		SD060 褐色砂	国産陶器 皿	＊	（2.8）	＊		口縁部細片	やや粗 微小砂粒	良 灰白 10YR8/1	（釉）灰白 5Y8/1 古瀬戸
93	図 24		SD060 褐色砂	国産陶器 擂鉢	＊	（7.1）	＊		口縁部細片	やや粗 ～ 5mm 石英・長石	良 橙 5YR7/8	信楽
94	図 24	図版 21	SD060 褐色砂	国産陶器 擂鉢	＊	（5.4）	＊		口縁部細片	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 赤褐 10R4/3	備前
95	図 25	図版 21	SD060 褐色砂	瓦 軒丸瓦	（2.6）	13.0	13.0			やや粗 ～ 3mm 石英・長石・チャート	良 暗灰 N3/0	
96	図 25		SD060 褐色砂	瓦 軒丸瓦	（2.4）	（9.0）	（7.5）			やや粗 ～ 3mm 石英・長石	良 灰 N5/0	
97	図 25		SD060 褐色砂	瓦 軒平瓦	（5.8）	（14.3）	6.4			粗 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N6/0	
98	図 25	図版 21	SD060 褐色砂	瓦 軒平瓦	（6.4）	（18.0）	4.3			やや粗 ～ 4mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N5/0	
99	図 25	図版 22	SD060 褐色砂	瓦 鬼瓦	（8.8）	（11.1）	（4.2）			粗 ～ 4mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N6/0	
100	図 25	図版 22	SD060 褐色砂	土製品 鞴羽口	（5.0）	（6.4）	（4.0）	（86.2）		粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 浅黄橙 7.5YR8/4	
101	図 25		SD060 褐色砂	土製品 土製円板	7.0	6.8	1.3	73.4		やや粗 ～ 2mm 石英・長石・雲母・黒色粒	良 灰 N4/0	瓦質土器転用
102	図 25		SD060 褐色砂	金属製品 銭貨	（2.2）	（1.7）	0.1	（1.1）		銅		紹□□寳
103	図 26		SD060 青灰色土	土師器 皿	7.3	1.6	＊		90%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 浅黄橙 10YR8/3	
104	図 26		SD060 青灰色土	輸入磁器 青磁椀	（13.7）	（5.5）	＊		体部 40%	密 微小黒色粒	良 灰白 N8/0	（釉）灰オリーブ 7.5Y6/2 龍泉窯系
105	図 26		SD060 青灰色土	輸入陶器 椀	＊	（3.3）	＊		口縁部細片	密 微小黒色粒	良 灰白 10YR8/1	（釉）にぶい赤褐 2.5YR4/3・ 褐 7.5YR4/3
106	図 26	図版 22	SD060 青灰色土	瓦 軒平瓦	（6.6）	（12.8）	4.0			粗 ～ 5mm 石英・長石・雲母・黒色粒	良 灰 N6/0	
107	図 26	図版 22	SD060 青灰色土	瓦 軒平瓦	（15.2）	（13.2）	8.8			粗 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N6/0	
108	図 26	図版 22	SD060 青灰色土	鉄滓 椀形鉄滓	13.9	16.6	6.8	1600				
109	図 27	図版 22	SD060 淡褐色砂	瓦質土器 擂鉢	（32.0）	17.2	10.4		70%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石	良 灰 N4/0	
110	図 27	図版 22	SD060 淡褐色砂	瓦質土器 瓶	（10.6）	16.4	（10.6）		80%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・雲母	良 灰 N4/0	
111	図 27		SD060 淡褐色砂	輸入磁器 白磁皿	＊	（2.4）	＊		体部細片	密 微小黒色粒	良 白 N9/0	福建
112	図 27	図版 23	SD060 淡褐色砂	輸入磁器 青磁椀	＊	（2.5）	7.0		底部 100%	密 微小黒色粒	良 灰白 N8/0	（釉）オリーブ灰 5GY5/1 龍泉窯系
113	図 27		SD060 淡褐色砂	土製品 土製円板	7.4	（7.1）	3.1	150.5		粗 ～ 4mm 石英・長石・雲母・黒色粒	良 灰白 N7/0	瓦転用
114	図 28	図版 23	SD071	土製品 坩堝	（7.2）	2.5	＊	（12.4）		粗 ～ 2mm 石英・長石	良 灰 N7/0	緑青金粒付着
115	図 29	図版 23	SE105 黒褐色土	土師器 皿	7.5	1.4	＊		100%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
116	図 29		SE105 黒褐色土	土師器 皿	7.8	1.4	＊		100%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙 5YR6/6	
117	図 29	図版 23	SE105 黒褐色土	土師器 皿	6.4	1.2	＊		100%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・雲母	良 灰白 10YR8/2	
118	図 29		SE105 黒褐色土	土師器 皿	6.8	1.3	＊		100%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・雲母	良 浅黄橙 7.5YR8/3	
119	図 29	図版 23	SE105 黒褐色土	土師器 皿	6.7	1.1	＊		100%	密 微小砂粒	良 灰白 10YR8/2	
120	図 29		SE105 黒褐色土	土師器 皿	7.3	1.3	＊		100%	密 微小砂粒	良 浅黄橙 7.5YR8/3	
121	図 29	図版 23	SE105 黒褐色土	土師器 皿	（8.7）	2.0	＊		35%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	良 にぶい橙 7.5YR7/4	

表 6　報告遺物一覧（5）

報告番号	挿図	写真図版	出土遺構層位	種別器種	口径（長）	器高（幅）	底径（厚）	重	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
122	図 29	図版 23	SE105 黒褐色土	土師器 皿	11.0	2.6	*		60%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫	良 灰白 7.5YR8/2	
123	図 29		SE105 黒褐色土	土師器 皿	(9.4)	2.0	*		25%	やや粗 微小砂粒	良 灰白 10YR8/2	
124	図 29		SE105 黒褐色土	土師器 皿	11.1	2.0	*		70%	密 微小砂粒	良 灰白 10YR8/2	
125	図 29	図版 23	SE105 黒褐色土	土師器 釜	*	(9.7)	*		体部 50%	密 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 浅黄橙 10YR8/3	
126	図 29	図版 23	SE105 黒褐色土	瓦質土器 鉢	*	(9.1)	*		体部細片	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 灰 N6/0	
127	図 29		SE105 黒褐色土	瓦質土器 土管	(28.9)	(27.6)	*			やや粗 ～ 4mm 石英・長石・雲母・チャート	良 灰 N6/0	
128	図 29	図版 24	SE105 黒褐色土	国産陶器 椀	*	(5.2)	*		体部細片	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・黒色粒	良 浅黄 2.5Y7/3	(釉) にぶい赤褐 5YR4/3 瀬戸
129	図 29	図版 24	SE105 黒褐色土	国産陶器 椀	*	(1.4)	4.2		底部 80%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫	良 浅黄 2.5Y7/2	(釉) 黒褐 5YR2/1 瀬戸
130	図 29	図版 24	SE105 黒褐色土	国産陶器 椀	*	(3.1)	3.8		底部 100%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫	良 淡橙 5YR8/4	(釉) 灰白 7.5Y7/2 唐津
131	図 29	図版 24	SE105 黒褐色土	石製品 石鍋	*	(4.2)	*	92.0	口縁部細片	滑石		
132	図 29	図版 24	SE105 黒褐色土	金属製品 銭貨	2.3	2.3	0.1	2.2		銅		元祐通寶
133	図 30	図版 24	SE105 暗灰色土	土師器 皿	6.7	1.4	*		100%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石	良 浅黄橙 7.5YR8/3	
134	図 30	図版 24	SE105 暗灰色土	土師器 皿	6.8	1.3	*		100%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・雲母	良 浅黄橙 10YR8/3	
135	図 30	図版 24	SE105 暗灰色土	土師器 皿	7.9	1.5	*		100%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 浅黄橙 7.5YR8/3	
136	図 30	図版 24	SE105 暗灰色土	土師器 皿	7.9	1.3	*		100%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙 5YR7/6	
137	図 30		SE105 暗灰色土	土師器 皿	8.3	1.4	*		100%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・雲母・チャート	良 橙 5YR7/6	
138	図 30	図版 24	SE105 暗灰色土	土師器 皿	8.9	2.0	*		100%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・雲母	良 浅黄橙 10YR8/3	
139	図 30	図版 24	SE105 暗灰色土	土師器 皿	(10.5)	2.0	*		20%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・雲母	良 にぶい黄橙 10YR7/4	
140	図 30		SE105 暗灰色土	土師器 皿	(11.0)	2.1	*		25%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石	良 浅黄橙 10YR8/3	
141	図 30	図版 25	SE105 暗灰色土	土師器 皿	(10.8)	2.3	*		25%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 浅黄橙 7.5YR8/3	
142	図 30	図版 25	SE105 暗灰色土	瓦質土器 鉢	8.0	5.1	8.1		100%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・雲母	良 灰 N4/0	
143	図 30	図版 25	SE105 暗灰色土	瓦質土器 甕	(42.7)	(15.3)	*		口縁部 30%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 灰 N5/0	
144	図 30	図版 25	SE105 暗灰色土	輸入磁器 染付椀	(13.4)	4.9	(4.4)		35%	粗 微小砂粒・黒色粒	やや不良 灰白 10YR8/2	漳州窯系
145	図 30	図版 25	SE105 暗灰色土	国産陶器 皿	(10.2)	2.5	(5.9)		35%	やや粗 微小砂粒	良 灰白 2.5Y8/1	瀬戸
146	図 30	図版 25	SE105 暗灰色土	国産陶器 皿	(9.9)	2.5	*		50%	やや粗 微小砂粒	良 灰白 2.5Y8/2	瀬戸
147	図 30	図版 25	SE105 暗灰色土	国産陶器 皿	9.8	2.5	5.8		70%	やや粗 微小砂粒	良 灰白 10YR8/2	瀬戸
148	図 30	図版 25	SE105 暗灰色土	国産陶器 皿	10.0	2.6	5.6		80%	やや粗 微小砂粒	良 灰白 10YR8/1	瀬戸
149	図 30	図版 26	SE105 暗灰色土	国産陶器 椀	(11.5)	6.2	4.2		25%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石	良 浅黄橙 7.5YR8/4	(釉) 褐 7.5YR4/3
150	図 30	図版 26	SE105 暗灰色土	国産陶器 椀	*	(1.7)	4.3		底部 100%	やや粗 微小砂粒	良 にぶい橙 5YR7/4	(釉) 黒 7.5Y2/1 墨書あり 瀬戸
151	図 31		SE105 暗褐色土	土師器 皿	6.6	1.4	*		60%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・雲母	良 灰白 10YR8/2	

表 7　報告遺物一覧（6）

報告番号	挿図	写真図版	出土遺構層位	種別器種	口径（長）	器高（幅）	底径（厚）	重	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
152	図 31	図版 26	SE105 暗褐色土	土師器 皿	7.2	1.5	*		100%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・雲母	良 灰白 10YR8/2	
153	図 31	図版 26	SE105 暗褐色土	土師器 皿	8.3	1.4	*		100%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 にぶい黄橙 10YR7/2	
154	図 31	図版 26	SE105 暗褐色土	土師器 皿	8.3	1.4	*		100%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・雲母	良 にぶい橙 5YR7/4	
155	図 31	図版 26	SE105 暗褐色土	土師器 皿	(10.8)	2.1	*		50%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・雲母	良 灰白 10YR8/2	
156	図 31	図版 26	SE105 暗褐色土	土師器 皿	*	(2.5)	*		体部細片	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 灰白 10YR8/2	
157	図 31	図版 26	SE105 暗褐色土	土師器 台付皿	8.6	(2.7)	*		杯部 80%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 浅黄橙 7.5YR8/3	
158	図 31	図版 26	SE105 暗褐色土	土師器 釜	(14.0)	(7.2)	*		体部 25%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・雲母	良 浅黄橙 10YR8/3	
159	図 31	図版 26	SE105 暗褐色土	輸入磁器 白磁小杯	*	(2.8)	*		底部 100%	密	良 白 N9/0	徳化窯系
160	図 31	図版 27	SE105 暗褐色土	輸入磁器 染付皿	(13.0)	2.6	(8.0)		10%	密	良 白 N9/0	景徳鎮窯系
161	図 31	図版 27	SE105 暗褐色土	輸入磁器 染付皿	(11.0)	3.1	(4.0)		40%	やや粗 微小砂粒	良 灰白 N8/0	景徳鎮窯系
162	図 31	図版 27	SE105 暗褐色土	輸入磁器 染付椀	(10.6)	3.2	5.0		50%	やや粗 微小砂粒	良 灰白 10YR8/1	漳州窯系
163	図 31	図版 26	SE105 暗褐色土	国産陶器 椀	(11.2)	6.1	4.5		40%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	良 浅黄橙 7.5YR8/3	(釉) にぶい赤褐 5YR4/3 瀬戸
164	図 31	図版 27	SE105 暗褐色土	国産陶器 皿	10.0	2.5	6.4		70%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石	良 灰白 7.5YR8/1	(釉) にぶい赤褐 5YR4/3 瀬戸
165	図 31		SE105 暗褐色土	国産陶器 皿	10.0	2.5	6.1		80%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	(釉) 褐 10YR4/4 瀬戸
166	図 31	図版 27	SE105 暗褐色土	国産陶器 皿	10.0	2.5	6.1		80%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	良 浅黄橙 7.5YR8/3	(釉) 褐 7.5YR4/3 瀬戸
167	図 31	図版 27	SE105 暗褐色土	国産陶器 皿	(10.4)	2.6	5.5		35%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	良 灰白 7.5YR8/1	漆継ぎ痕
168	図 31	図版 27	SE105 暗褐色土	国産陶器 甕	*	(5.8)	*		口縁部細片	やや粗 ～ 2mm 石英・長石	良 灰赤 10R4/2	備前
169	図 31	図版 27	SE105 暗褐色土	国産陶器 擂鉢	(36.8)	14.6	(14.3)		25%	粗 ～ 10mm 石英・長石・雲母	良 橙 2.5YR6/6	信楽
170	図 32	図版 27	SE105 暗褐色土	瓦質土器 土管	(24.6)	(15.6)	*			やや粗 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N6/0	
171	図 32	図版 28	SE105 暗褐色土	瓦質土器 土管	(30.0)	(18.6)	*			やや粗 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N4/0	
172	図 32	図版 28	SE105 暗褐色土	瓦質土器 土管	14.0	(21.7)	*			やや粗 ～ 3mm 石英・長石・雲母	良 灰白 N7/0	
173	図 32	図版 28	SE105 暗褐色土	金属製品 鍋	(5.7)	(5.7)	0.8	43.7		鉄		
174	図 33		SK013	鉄滓 椀形鉄滓	11.7	14.4	6.1	825.3				
175	図 33	図版 28	SK068	土師器 皿	8.2	1.5	*		100%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 浅黄橙 7.5YR8/4	
176	図 33	図版 28	SK068	土師器 皿	(11.7)	1.8	*		35%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石	良 浅黄橙 7.5YR8/3	
177	図 33	図版 28	SK068	輸入陶器 椀	(11.0)	7.2	*		50%	密 微小砂粒	良 灰白 2.5Y7/1	朝鮮
178	図 33	図版 28	SK068	国産陶器 鉢	*	(3.9)	*		体部細片	やや粗 ～ 1mm 石英・長石	良 灰赤 10R4/2	備前
179	図 33	図版 28	SK092	瓦 軒平瓦	(4.6)	(8.2)	(4.1)			やや粗 ～ 2mm 石英・長石・雲母・黒色粒	良 灰白 N7/0	
180	図 34	図版 29	SK100 暗灰色土	土師器 皿	(6.4)	1.0	*		50%	密 微小砂粒	良 灰白 10YR8/2	
181	図 34		SK100 暗灰色土	土師器 皿	7.0	1.2	*		50%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫	良 灰白 10Y8/2	

表 8　報告遺物一覧（7）

報告番号	挿図	写真図版	出土遺構層位	種別器種	口径（長）	器高（幅）	底径（厚）	重	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
182	図 34	図版 29	SK100 暗灰色土	土師器 皿	8.3	1.4	*		100%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・雲母	やや不良 にぶい黄橙 10YR7/2	穿孔あり
183	図 34	図版 29	SK100 暗灰色土	土師器 皿	8.2	1.5	*		50%	やや粗 ～ 7mm 石英・長石・クサリ礫	良 浅黄橙 7.5YR8/4	
184	図 34	図版 29	SK100 暗灰色土	土師器 皿	(9.0)	1.7	*		25%	やや粗 微小砂粒	良 灰白 10YR8/2	
185	図 34	図版 29	SK100	輸入磁器 青磁椀	*	(4.8)	*		体部細片	やや粗 微小砂粒	良 浅黄橙 7.5YR8/4	(釉) 灰黄 2.5Y7/2 龍泉窯系
186	図 34	図版 29	SK100	輸入磁器 青磁椀	*	(3.1)	*		底部 100%	やや粗 微小砂粒	良 灰白 N8/0	(釉) オリーブ灰 2.5GY6/1 龍泉窯系
187	図 34	図版 29	SK100	輸入磁器 青磁盤	*	(1.8)	*		底部 20%	密 微小黒色粒	良 灰白 N8/0	(釉) 明緑灰 10GY7/1
188	図 34	図版 29	SK100 暗灰色土	輸入磁器 染付皿	*	(1.2)	(5.8)		底部 35%	密 微小黒色粒	良 白 N9/0	景徳鎮窯系
189	図 34	図版 29	SK100 暗灰色土	国産陶器 椀	(7.5)	3.7	2.7		50%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫	良 灰白 7.5YR8/1	(釉) 黒 7.5YR2/1・ にぶい赤褐 2.5YR4/3 瀬戸
190	図 34	図版 29	SK100	瓦 軒丸瓦	(4.1)	(13.2)	(7.7)			粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 灰白 N7/0	
191	図 34	図版 30	SK100	鉄滓 椀形鉄滓	12.6	(13.9)	6.2	842.9				
192	図 34	図版 30	SK100	土製品 土製円板	3.1	3.5	1.0	12.6		やや粗 ～ 1mm 石英・長石	良 灰 N5/0	瓦質土器転用
193	図 34	図版 30	SK100	土製品 土製円板	4.0	4.2	1.3	19.6		やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	良 灰 N4/0	瓦質土器転用
194	図 34	図版 30	SK100	埴輪 蓋形埴輪	*	(2.2)	*		口縁部細片	粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母・チャート	良 橙 5YR7/8	
195	図 34	図版 30	SK100	埴輪 円筒埴輪	*	(7.4)	*		体部細片	粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母・チャート	良 橙 5YR7/8	
196	図 34	図版 30	SK110	埴輪 円筒埴輪	*	(7.7)	*		体部細片	やや粗 ～ 4mm 石英・長石・クサリ礫・雲母・チャート	良 橙 5YR7/8	
197	図 38	図版 30	SK050	国産磁器 染付椀	(8.9)	(3.5)	*		20%	密 微小砂粒	良 白 N9/0	
198	図 38	図版 30	SK050	国産陶器 椀	*	(5.5)	*		体部細片	密 微小砂粒	良 灰白 N8/0	(釉) 緑灰 10G6/1 ・灰白 5Y7/1 内野山
199	図 38	図版 30	SK050	国産陶器 椀	*	(2.7)	(4.3)		底部 25%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫	良 灰白 10YR8/2	内野山
200	図 38	図版 31	SK050	瓦 軒平瓦	(11.0)	(17.5)	4.6			粗 ～ 5mm 石英・長石・チャート	良 灰 N4/0	
201	図 39	図版 31	表土	土師器 皿	10.5	2.1	*		100%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・雲母	良 浅黄橙 7.5YR8/3	
202	図 39		表土	瓦器 皿	(9.1)	1.5	*		35%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N6/0	
203	図 39	図版 31	表土	瓦質土器 風炉	*	(4.3)	*		口縁部細片	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 暗灰 N3/0	
204	図 39	図版 31	東区 表土	輸入磁器 白磁皿	(11.0)	3.3	3.6		35%	密 微小黒色粒	良 白 N9/0	福建
205	図 39	図版 31	表土	輸入磁器 染付椀	*	(2.7)	4.2		底部 100%	密	良 白 N9/0	景徳鎮窯系
206	図 39	図版 31	表土	国産磁器 染付蓋	5.0	2.4	*		100%	密	良 白 N9/0	
207	図 39	図版 31	表土	土師器 焼塩壺	5.7	9.4	*		100%	やや粗 ～ 4mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 浅黄橙 7.5YR8/6	
208	図 39	図版 31	表土	石製品 火輪	27.0	27.0	16.9			花崗岩		
209	図 39	図版 31	表土	石製品 地輪	27.2	27.2	20.3			花崗岩		

数値の単位は法量 cm、重量 g

表９　検出遺構および出土遺物一覧（1）

S 番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
1		褐色土	土坑	深さ 5cm　10 → 1	土師器（中世～）皿、瓦質土器鉢・甕、平瓦	B2
2			ピット	10 → 2	土師器（中世～）皿・細片、瓦質土器鉢	B2
3			土坑	深さ 5cm 21・32・33 → 3	土師器（中世～）釜、瓦質土器擂鉢・鉢・土管、国産陶器甕・擂鉢、平瓦・丸瓦、鞴羽口、鉄滓、骨	C3・4
4			土坑	深さ 5cm	瓦質土器鉢、国産陶器甕	C4
5	SK005		土坑	鉄滓多量に出土 13 → 5 → 7	土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）甕、瓦質土器鉢・釜・細片、国産陶器甕（備前）、平瓦・丸瓦、鞴羽口、鉄滓	C3
6			ピット		土師器（中世～）皿・釜・細片、瓦質土器細片、丸瓦、埴輪	C3
7			土坑	鉄滓多量に出土	土師器（中世～）皿・釜・細片、瓦質土器鉢・釜・土管、国産陶器甕・擂鉢（丹波）、平瓦・丸瓦、鞴羽口、鉄滓、骨	C2・3
8			土坑	カクラン	土師器（中世～）皿・釜、瓦質土器鉢、国産陶器甕・瓶、軒平瓦・平瓦	A ～ C1
9	SK009		土坑	深さ 5cm	土師器（中世～）皿・細片	A・B2
10		褐色砂	土坑		土師器（中世～）皿・釜、須恵器（古代）杯・甕、瓦質土器擂鉢・鉢・火鉢、輸入青磁椀・皿・盤、輸入染付椀、国産陶器甕・壺（備前）・擂鉢（備前）・甕（備前）、軒丸瓦・平瓦・丸瓦・磚、鞴羽口・土馬、鉄滓・不明鉄製品	A ～ C2
		暗褐色砂			土師器（中世～）皿・釜、瓦質土器擂鉢・鉢・火鉢、国産陶器甕・瓶、軒平瓦・平瓦・丸瓦、鉄滓、焼土	
11			ピット	深さ 10cm	国産陶器細片	B2・3
12			土坑	カクラン	土師器（中世～）皿・釜、瓦質土器鉢、国産陶器甕・擂鉢（備前）、平瓦	A・B2・3
13	SK013		土坑	鉄滓多量に出土	土師器（中世～）皿・釜、瓦質土器擂鉢・鉢、輸入染付椀、国産陶器甕、平瓦・丸瓦・鬼瓦、鞴羽口、鉄滓、骨	C3
14			ピット		土師器（中世～）細片、瓦質土器鉢、鉄滓	C3
15			溝		土師器（中世～）皿、瓦質土器鉢・土管、丸瓦・瓦細片	C・D2
16			ピット	深さ 3cm	土師器（中世～）皿・細片	C1・2
17			ピット	深さ 3cm	瓦質土器鉢	C1・2
18			ピット		土師器（中世～）細片	D1・2
19			ピット		土師器（中世～）細片、須恵器（中世～）甕、国産陶器甕、平瓦・丸瓦	C3
20	SK020		土坑	大型	土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）鉢（東播）・甕、瓦質土器鉢・土管、輸入青磁皿、輸入白磁椀、輸入染付椀、国産陶器椀（唐津）・甕・甕（唐津）・擂鉢、砥石、鉄滓、焼土・貝殻	C・D2・3
		褐色土			土師器（中世～）皿・釜、須恵器（古代）皿・杯、須恵器（中世～）鉢、瓦質土器擂鉢・鉢・甕・釜・火鉢・土管、輸入青磁椀・盤、輸入白磁皿、輸入染付椀、国産陶器椀（唐津）・甕・甕（備前）・擂鉢（備前）・鉢、軒平瓦・平瓦・丸瓦、土製円板、不明木製品、鉄滓、焼土	
		青灰色土			土師器（中世～）皿・釜、瓦質土器擂鉢・鉢・火鉢・土管、国産陶器椀（唐津）・皿（唐津）・甕（備前）・擂鉢・盤（唐津）、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦、土製円板、不明木製品、鉄滓、骨	
21			土坑	深さ 10cm	土師器（中世～）皿・釜、瓦質土器土管、国産陶器甕、平瓦・丸瓦	C4
22			ピット	深さ 5cm	瓦質土器鉢	C・D4
23			土坑	深さ 15cm	土師器（中世～）釜、須恵器（中世～）甕、瓦質土器擂鉢・土管、国産陶器甕・甕（備前）・鉢、平瓦・丸瓦、鞴羽口、鉄滓	C3
24			土坑	深さ 15cm	土師器（中世～）皿・釜、須恵器（古代）蓋、瓦質土器鉢・釜・土管、国産陶器甕・擂鉢（備前）、軒丸瓦・平瓦・丸瓦、土製円板、鉄滓	D3・4
25			土坑		瓦質土器細片	D・E1
26			溝		土師器（中世～）細片、須恵器（古代）細片	D・E2
27			土坑	深さ 5cm	平瓦	E2
28			土坑	深さ 5cm	瓦質土器鉢、国産陶器細片	D・E2
29			土坑		土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）甕、瓦質土器擂鉢・鉢・火鉢、輸入青磁皿、輸入白磁皿、輸入染付椀、国産陶器皿（瀬戸）・甕・甕（備前）・擂鉢（備前）、軒平瓦・平瓦・丸瓦、鞴羽口、鉄滓、角・埴輪	C2・3

表 10　検出遺構および出土遺物一覧（2）

S 番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
30	SD060		溝	S-60 と同一	土師器（中世～）皿・釜・壺・細片、須恵器（古代）椀・細片、須恵器（中世～）甕・細片、黒色土器 A 類細片、瓦器椀、瓦質土器擂鉢・鉢・甕・釜・火鉢・細片、国産陶器甕、平瓦・丸瓦、釘・不明鉄製品、骨・桃種・埴輪	A ～ C2
31			ピット		土師器（古代）鉢・細片、須恵器（古代）細片	B1・2
32			土坑		土師器（中世～）甕、須恵器（古代）細片、瓦質土器鉢、軒丸瓦・平瓦	C4
33	SB135a		ピット	建物	土師器（中世～）細片、瓦質土器鉢・細片、国産陶器甕、軒丸瓦・平瓦、鉄滓	C3
34			土坑	深さ 5cm	土師器（中世～）皿・釜、瓦質土器鉢、石鍋、軒平瓦・平瓦	C3
35			土坑	深さ 5cm	土師器（中世～）皿、瓦質土器鉢、輸入青磁椀、平瓦	C・D3
36			土坑	深さ 5cm	土師器（中世～）皿・細片、鉄滓	D4
37			ピット		土師器（中世～）皿・釜、瓦質土器鉢、平瓦・瓦細片	D3
38			土坑	深さ 5cm	土師器（中世～）皿・釜、須恵器（古代）杯、国産陶器甕、軒丸瓦・平瓦・丸瓦、不明鉄製品・鉄滓	D・E3・4
39	SP039		ピット		土師器（古代）椀、土師器（中世）皿・釜・細片、瓦器椀、瓦質土器鉢、国産陶器甕、鞴羽口、平瓦・丸瓦、釘・鉄滓	D3
40	SD040		溝		土師器（中世～）皿・釜・鉢、須恵器（中世～）鉢（東播）・甕、瓦器椀、瓦質土器擂鉢・火鉢・瓶、輸入青磁椀、輸入白磁椀、輸入陶器甕、国産陶器甕（備前）、軒平瓦・平瓦・丸瓦、鉄滓	K2 ～ 4
41				S-95 に帰属	瓦器椀、平瓦、鉄滓	
42			土坑		瓦質土器細片、平瓦・丸瓦	E4
43			ピット		土師器（古代）甕、土師器（中世～）細片、瓦質土器鉢、軒丸瓦・平瓦	E4
44			ピット		土師器（中世～）細片、須恵器（中世～）甕、平瓦	E4
45			ピット		土師器（中世～）皿、須恵器（古代）杯、不明鉄製品	A1
46			溝		土師器（中世～）皿・釜・甕・細片、須恵器（中世～）細片、瓦質土器鉢・甕・火鉢、国産陶器甕・擂鉢、平瓦・丸瓦、鞴羽口・炉壁、鉄滓	D・E3
47			土坑	深さ 5cm	土師器（中世～）皿・須恵器（中世～）細片、瓦質土器鉢、丸瓦	A3
48			土坑	深さ 5cm	土師器（中世～）皿、須恵器（古代）細片、平瓦	A3・4
49			土坑	深さ 5cm	土師器（中世～）皿・釜・甕、須恵器（中世～）甕、瓦質土器擂鉢・鉢・細片、国産染付椀、国産陶器椀（唐津・京焼）・天目椀（瀬戸）・甕・甕（備前）・擂鉢（備前）・細片、軒平瓦・平瓦・丸瓦、土馬・炉壁、不明鉄製品・鉄滓、骨	E2・3
50	SK050		土坑	近世の大型土坑	土師器（中世～）皿・釜・擂鉢、須恵器（中世～）甕、瓦質土器鉢・火鉢、輸入白磁梅瓶、国産染付椀・皿、国産陶器椀・椀（唐津）・天目椀・甕・甕（備前）・擂鉢・鍋・蓋、軒平瓦・平瓦・丸瓦、鎹	E・F2・3
51	SB135c		ピット	建物	土師器（中世～）細片、国産陶器細片、不明鉄製品	D3
52				S-95 に帰属	土師器（古代）甕、土師器（中世～）皿、瓦質土器鉢、平瓦・丸瓦	
53			土坑	深さ 5cm	土師器（中世～）釜、須恵器（中世～）甕、瓦質土器鉢、国産陶器甕・擂鉢（備前）、丸瓦	E2
54	SB135d		ピット	建物	土師器（中世～）皿・釜・細片、瓦質土器細片、国産陶器甕、平瓦・丸瓦、鉄滓	E3・4
55			土坑		土師器（中世～）皿・釜・細片、須恵器（中世～）鉢（東播）、瓦質土器鉢、国産陶器甕、軒平瓦・平瓦・丸瓦	D・E3・4
56	SB135e		ピット	建物	土師器（中世～）皿・細片、須恵器（古代）鉢、瓦質土器鉢・釜、国産陶器細片、瓦細片、鉄滓	F3
57			土坑		土師器（中世～）皿・細片、平瓦	E4
58			土坑		土師器（中世～）皿、須恵器（古代）杯、瓦質土器鉢、国産陶器甕、軒平瓦・平瓦・丸瓦	E4
59			土坑		土師器（中世～）釜、瓦質土器擂鉢・鉢、輸入染付小杯、国産陶器甕・蓋、平瓦・丸瓦、鉄滓	E 3
60	SD060	暗褐色土	溝	S-30 と同一	土師器（中世～）皿・釜・台付皿・細片、須恵器（中世～）細片、瓦器椀、瓦質土器擂鉢・鉢・浅鉢・甕・釜・火鉢・細片、輸入青磁椀・皿、輸入白磁椀・皿、輸入染付椀、輸入陶器細片、国産陶器甕・甕（備前）・壺・擂鉢・細片、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦、鞴羽口、漆器、不明銅製品・鉄滓	G ～ K2・3

表 11　検出遺構および出土遺物一覧（3）

S 番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
60	SD060	褐色砂	溝	S-30 と同一	土師器（中世～）皿・釜・甕、須恵器（古代）杯・甕・蓋、須恵器（中世～）鉢・甕（東播）、瓦質土器擂鉢・鉢・釜・火鉢、輸入青磁椀・盤、輸入白磁椀、輸入染付椀、国産染付椀・皿、輸入陶器盤、国産陶器椀・椀（瀬戸）・甕・甕（備前）・盤（瀬戸）・擂鉢、軒丸瓦・平瓦・丸瓦・鬼瓦、鞴羽口・土製円板、銭	G ～ K2・3
		青灰色土			土師器（中世～）皿・釜・鉢、須恵器（古代）甕、須恵器（中世～）甕・擂鉢、瓦器椀、瓦質土器擂鉢・鉢・風炉・火鉢、輸入青磁椀、輸入陶器天目椀、国産陶器椀・甕・擂鉢（備前）・壺（備前）、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦、漆器・不明木製品、鉄滓、炭・埴輪	
		淡褐色砂			土師器（中世～）皿・釜、須恵器（古墳時代）高杯、瓦器椀・鍋、瓦質土器擂鉢・鉢・花瓶、輸入青磁椀・皿、輸入白磁皿、輸入染付皿、国産陶器甕・甕（備前）・擂鉢（備前）・細片、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦、土製円板、貝殻	
61			ピット		土師器（中世～）皿、瓦質土器鉢、平瓦、鉄滓	E3
62			ピット		土師器（中世～）皿・細片、須恵器（中世～）甕、瓦質土器鉢・細片、平瓦・丸瓦	F3・4
63	SK063		土坑		土師器（中世～）皿・細片、瓦質土器蓋、国産白磁細片、平瓦・丸瓦、釘・鉄滓	E3・4
64			土坑	深さ 5cm	土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）甕、瓦器椀、瓦質土器鉢、国産陶器椀（唐津）、平瓦・丸瓦	J3
65			土坑	深さ 5cm	土師器（中世～）釜、瓦器椀、瓦質土器鉢、軒丸瓦・平瓦・丸瓦	H2
66		掘方	井戸	近世	土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）鉢、瓦質土器擂鉢・鉢・火鉢、国産陶器壺（信楽）、平瓦・道具瓦	H・I2・3
		枠内			土師器（中世～）皿・釜・細片、瓦器椀・皿・釜、瓦質土器擂鉢・土管、国産染付椀、国産陶器椀・天目椀（瀬戸）・甕（丹波）・擂鉢（丹波）、硯、軒丸瓦・平瓦・丸瓦、不明鉄製品・鉄滓、焼土・炭	
67			土坑		土師器（中世～）皿・釜、瓦器椀、瓦質土器鉢、国産陶器椀、平瓦	I3・4
68	SK068		土坑	漆付不明製品出土	土師器（中世～）皿・釜、瓦質土器擂鉢・鉢・火鉢、輸入染付椀、国産陶器椀（唐津）・鉢（備前）、平瓦・丸瓦、釘・鉄滓、漆付不明製品、焼土	H2
69				S-95 に帰属	土師器（中世～）皿、瓦質土器鉢・甕、平瓦	
70	SK070	淡灰色砂	土坑	78 → 76 → 70 → 72	土師器（中世～）皿・釜、瓦器椀、瓦質土器擂鉢・鉢・火鉢・土管、輸入青磁椀・皿、輸入白磁瓶、輸入染付椀、国産染付椀、国産陶器椀・椀（唐津）・甕・甕（備前）・擂鉢（備前）、砥石・石鍋、軒丸瓦・平瓦・丸瓦・磚、鞴羽口、鉄滓、埴輪	I・J3
71	SD071		溝		土師器（中世～）皿・釜、須恵器（古代）杯、須恵器（中世～）甕、瓦質土器擂鉢・鉢・釜・火鉢・細片、輸入白磁皿、国産陶器甕、平瓦、取鍋・鞴羽口、鉄滓、骨	G2・3
72			溝		土師器（中世～）釜、須恵器（中世～）甕、瓦質土器鉢、国産陶器椀、軒平瓦・平瓦・丸瓦、鞴羽口	I2・3
73			土坑		土師器（中世～）皿、須恵器（古代）杯・蓋、須恵器（中世～）甕・細片、瓦器椀、瓦質土器火鉢、平瓦・丸瓦、鉄滓	J・K3・4
74			土坑		土師器（中世～）皿・細片、丸瓦	H・I3
75	SB120a		ピット	建物 深さ 3cm	瓦質土器鉢、鞴羽口	H3
76			土坑	76 → 70	土師器（中世～）皿・釜、須恵器（古代）瓶、瓦器椀、瓦質土器擂鉢・鉢、輸入青磁椀、国産陶器甕・甕（備前）・擂鉢（丹波）、軒丸瓦・平瓦・丸瓦、鉄滓、骨	J3
77			土坑	90 → 77 → 40	土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）細片、瓦器椀、瓦質土器鉢、国産陶器細片、平瓦・丸瓦	K3
78			ピット	78 → 76 → 70	土師器（中世～）皿・釜、瓦質土器鉢、瓦細片	J3
79			ピット	深さ 3cm	土師器（中世～）釜・細片、軒平瓦・平瓦・丸瓦	I3
80	SX080		整地土		土師器（中世）椀・皿・釜、須恵器（古代）椀・杯、須恵器（中世～）鉢（東播）・甕、瓦器椀、瓦質土器鉢、輸入青磁椀、輸入青白磁皿、国産陶器甕、石鍋、軒平瓦・平瓦・丸瓦、竈・鞴羽口、鉄滓、炭・埴輪	J・K2 ～ 4
81			土坑	近世 炭化物大量に含む	土師器（中世～）皿・焙烙、瓦質土器擂鉢・鉢・土管、国産白磁皿・小杯、国産染付椀・皿、国産陶器皿（唐津）・甕・擂鉢（備前）、軒平瓦・平瓦・丸瓦・桟瓦、不明鉄製品・鉄滓、炭	H・I3
82			土坑	深さ 10cm　82 → 81	平瓦	H3
83			ピット	深さ 10cm　83 → 81	土師器（中世～）皿・細片、平瓦	I3
84			ピット		土師器（中世～）皿、瓦質土器擂鉢・細片、国産陶器甕、鉄滓	I3

表 12　検出遺構および出土遺物一覧（4）

S 番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
85			ピット		土師器（中世～）皿	I4
86			ピット		土師器（中世～）皿、瓦質土器細片	I・J3
87	SB136d		ピット	建物	土師器（中世～）皿・細片、国産陶器甕、丸瓦	G・H3・4
88	SB136e		ピット	建物	土師器（中世～）皿、須恵器（古代）細片	I4
89	SB136f		ピット	建物	土師器（中世～）皿・細片、瓦質土器細片	J4
90	SK090		土坑	土器大量投棄	土師器（中世～）皿・釜・甕、須恵器（中世～）鉢（東播）・甕・細片、瓦器椀・皿、瓦質土器鉢、輸入白磁椀、国産陶器甕、平瓦・丸瓦、鞴羽口・土馬、鉄滓、炭・埴輪・硝子	K3
91	SB136c		ピット	建物	土師器（中世～）皿・釜・細片、瓦質土器釜、平瓦・丸瓦、鉄滓	H3・4
92	SK092		土坑	60 → 92	土師器（中世～）皿・釜、須恵器（古代）杯・細片、瓦質土器擂鉢・鉢・甕、輸入青磁皿、平瓦・丸瓦	F・G2
93			土坑	93 → 40	土師器（中世～）皿、須恵器（古代）杯・蓋	J4
94			土坑	94 → 40・95	土師器（中世～）皿	H3
95			落込み	段差の堆積土	土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）甕、黒色土器 B 類椀、瓦器椀、国産陶器甕、平瓦、土製円板	H・I2 ～ 4
96			土坑	深さ 5cm	土師器（中世～）皿・釜、瓦質土器細片、輸入青磁椀	H3
97			土坑	深さ 5cm	土師器（中世～）皿・細片	H3
98	SB136b		ピット	建物	土師器（中世～）細片、瓦質土器細片、平瓦・鬼瓦、埴輪	G3・4
99	SB136a		ピット	建物	土師器（中世～）釜、瓦質土器鉢、輸入青磁盤、輸入白磁細片、国産陶器細片、平瓦・丸瓦	F3・4
100	SK100		土坑		土師器（中世～）皿・釜、須恵器（古代）杯・細片、須恵器（中世～）甕、瓦質土器擂鉢・鉢・釜・火鉢、輸入青磁椀・盤、輸入白磁瓶、国産陶器皿（瀬戸）・甕・擂鉢（備前）、卸皿（瀬戸）・細片、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦、土製円板、鉄滓、埴輪・貝殻	F ～ I4
		暗灰色土			瓦質土器擂鉢・鉢・土管、輸入白磁皿、輸入染付皿、国産陶器椀（唐津）・天目椀（瀬戸）・壺（備前）・擂鉢、平瓦・丸瓦、鉄滓	
101			ピット		土師器（中世～）皿、須恵器（古代）細片、須恵器（中世～）細片	J4
102			井戸	100 → 102	土師器（中世～）皿・釜・焙烙、瓦質土器鉢・細片、輸入青磁椀、国産染付皿、国産陶器皿・甕・蓋、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・桟瓦	G3・4
103			土坑		土師器（中世～）皿・釜、瓦質土器擂鉢・鉢・甕、国産青磁椀、国産白磁細片、国産染付椀・皿、国産陶器椀（唐津）・天目椀・甕・擂鉢、砥石、軒平瓦・軒丸瓦、不明木製品、不明鉄製品・鉄滓、炭	F・G3
104			溝？	104 → 60	土師器（中世～）椀・皿・釜、須恵器（古代）杯、須恵器（中世～）甕、瓦器椀、瓦質土器擂鉢・甕・火鉢、輸入青磁椀、国産陶器甕（備前）、軒丸瓦・平瓦・丸瓦、鞴羽口、鉄滓、炭	G ～ I2
105	SE105	黒褐土	井戸	105 → 103	土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）甕、瓦質土器擂鉢・鉢・甕・火鉢・土管、国産染付椀、国産陶器椀・椀（唐津）・天目椀（瀬戸）・皿・甕（備前）・擂鉢（備前・信楽）、石鍋、軒平瓦・平瓦・丸瓦、鞴羽口、釘・銭・鉄滓、炭・骨	F3
		暗灰色土			土師器（中世～）皿、瓦器鉢、瓦質土器擂鉢・鉢・甕・釜・火鉢・土管、輸入染付椀（漳洲）、国産陶器天目椀（瀬戸）・皿（瀬戸）・擂鉢（信楽）、平瓦・丸瓦、鉄滓	
		暗褐色土			土師器（中世～）皿・釜・台付皿、須恵器（中世～）甕、瓦質土器擂鉢・鉢・甕・火鉢・土管、輸入白磁皿、輸入染付椀・皿、国産陶器天目椀（瀬戸）・皿（瀬戸）・甕（備前）・擂鉢（備前・信楽）・急須、軒平瓦・平瓦・丸瓦、鞴羽口、漆器椀、鉄鍋・不明鉄製品・鉄滓	
106			土坑	106 → 90 → 77 11 世紀	土師器（中世～）皿	K3
107			土坑		土師器（中世～）皿・釜、須恵器（古代）杯・蓋、瓦質土器細片、平瓦、埴輪	G3・4
108			土坑	深さ 5cm	土師器（中世～）皿・細片、須恵器（古代）杯・甕・蓋、瓦質土器細片、平瓦	G3
109			ピット	深さ 1cm	土師器（中世～）皿	G3
110	SK110		土坑	110 → 107 → 100	土師器（中世～）皿、瓦器椀、瓦質土器細片、平瓦・丸瓦、鉄滓、埴輪	G4
111			ピット	深さ 1cm	瓦細片、埴輪	G3

表 13　検出遺構および出土遺物一覧（5）

S 番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
112			ピット		土師器（中世～）皿、須恵器（中世～）鉢（東播）、黒色土器 B 類椀、瓦質土器鉢、平瓦・丸瓦、埴輪	H4
113			溝		土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）細片、瓦器椀、瓦質土器細片、輸入青磁椀、輸入白磁椀、軒平瓦・平瓦・丸瓦、埴輪	H4
114			土坑	107 → 114 → 100 → 102	平瓦、埴輪	G3
115			土坑	深さ 2cm	瓦質土器擂鉢	G3
116		褐礫色砂	ピット		土師器（中世～）皿・細片、瓦質土器細片	G3
117			ピット		土師器（中世～）細片、須恵器（中世～）細片、瓦細片	G3
118			土坑	S-60 褐色砂に切られる	土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）鉢（東播）、瓦質土器土管、平瓦	F3
119			土坑	深さ 5cm	土師器（中世～）皿、瓦質土器細片、輸入白磁皿、平瓦、埴輪	G3
120	SB120		建物	S-75・137・138		G・H2・3
121			ピット		土師器（中世～）皿	J4
122			ピット		土師器（中世～）細片、石鏃	F4
123			土坑	第 1 遺構面に帰属	土師器（古代）細片、土師器（中世～）皿、須恵器（古代）甕	K3・4
124			土坑		土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）甕、瓦質土器擂鉢・鉢・釜・土管・細片、国産陶器皿（唐津・瀬戸）・甕・甕（備前・常滑）、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦、鞴羽口、鉄滓	F4
125			土坑	深さ 3cm	土師器（中世～）皿・釜、瓦質土器鉢、軒平瓦・平瓦・丸瓦	F3・4
126			ピット		土師器（中世～）釜、瓦器椀、瓦質土器擂鉢・鉢・火鉢	F3・4
127			土坑	第 2 遺構面	土師器（中世～）皿、平瓦・丸瓦	J・K2・3
128			土坑	128 → 123 → 80	土師器（古代）皿、瓦器椀	K3・4
129			土坑	樹根	土師器（中世～）細片	K4
130			土坑	整地土で埋まる自然地形	土師器（中世～）皿、須恵器（古代）甕・蓋、黒色土器 A 類椀、瓦器椀、瓦質土器細片、平瓦・丸瓦、釘	J・K3・4
131		北壁 17 層	ピット			J・K3
132			ピット			K3
133			ピット			K3
134			ピット		土師器（中世～）皿	K3
135	SB135		建物	S-33・51・54・56		C ～ F3・4
136	SB136		建物	S-87・88・89・91・98・99		F ～ K3・4
137	SB120b		ピット	建物		G3
138	SB120c		ピット	建物		G2
整地層 1					土師器（中世～）皿、須恵器（古代）椀・杯、瓦器椀	
整地層 1・2					土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）甕・壺、瓦器椀、輸入青磁椀、輸入白磁椀、国産陶器擂鉢（備前）、軒平瓦、鉄滓、埴輪	
南西　暗褐色細砂					土師器（古代）高杯、土師器（中世）皿・釜、瓦質土器鉢、国産陶器椀・甕・擂鉢（備前）、平瓦・丸瓦	
暗褐色細砂					国産染付椀、国産陶器椀（唐津）、銭	
6 層（西　黄白色シルト）					土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）鉢（東播）、瓦質土器擂鉢・鉢・甕・土管、国産染付皿、輸入陶器壺（タイ）、国産陶器椀・皿（唐津）・甕・擂鉢・徳利（備前）、平瓦・丸瓦、鞴羽口	
西　暗褐色礫					土師器（中世～）釜、瓦質土器細片、国産陶器甕・擂鉢、平瓦	
西　暗褐色シルト					土師器（中世～）皿・釜・甕、瓦質土器鉢、国産陶器椀（唐津）・甕、平瓦・丸瓦	
暗褐色シルト					土師器（中世～）釜、瓦質土器鉢・火鉢、輸入青磁椀、国産陶器甕、軒丸瓦・平瓦、坩堝、鉄滓	
西　黒褐色シルト					土師器（中世～）皿・釜、瓦質土器鉢、国産陶器皿（唐津）・甕・擂鉢（備前・丹波）、平瓦・丸瓦	

表 14　検出遺構および出土遺物一覧（6）

S 番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
南壁 3 層					土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）鉢（東播）・甕、瓦質土器鉢、輸入白磁瓶、国産陶器擂鉢（備前）、平瓦・丸瓦、鞴羽口	
北壁 66 層					土師器（中世～）細片、須恵器（中世～）細片、鉄製品刀	
北壁 81 層					土師器（中世～）皿・細片、須恵器（中世～）細片、瓦器椀、平瓦	
東　遺構面直上　黒褐土					土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）鉢（東播）、瓦器椀、、瓦質土器鉢、輸入青磁椀、国産陶器甕、平瓦・丸瓦	
表土					土師器（中世～）皿・釜・甕、須恵器（古代）壺・蓋・瓶、須恵器（中世～）鉢（東播）・甕・細片、瓦器椀・皿、瓦質土器擂鉢・鉢・火鉢・土管・細片、輸入青磁椀・皿・盤、輸入白磁皿・国産白磁細片、輸入染付椀、国産染付椀・皿・蓋・色絵皿、国産陶器椀・椀（唐津）・天目椀・皿（瀬戸）・甕・甕（備前）・擂鉢（備前）・鉢・鍋・瓶・皿・急須・細片、石鍋、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・道具瓦、鞴羽口・窯道具・焼塩壺、不明鉄製品・不明銅製品・錠前・鉄滓、炭・骨製歯ブラシ・埴輪	
攪乱					土師器（中世～）皿・窯、瓦質土器擂鉢・鉢・細片、輸入青磁椀、国産染付皿、国産陶器天目椀・甕・擂鉢（丹波）、平瓦・丸瓦、鞴羽口、銭・鉄滓	
重機掘削					土師器（中世～）皿、須恵器（古代）蓋、須恵器（中世～）甕、瓦質土器鉢・釜、輸入白磁皿、国産陶器椀（唐津）・甕、鞴羽口、鉄滓	
造成土					土師器（中世～）皿・釜、瓦器椀、瓦質土器鉢、国産陶器椀（唐津）、炭	

写真図版

調査前風景

西区全景（東から）

図版 2

東区全景（西から）

東区全景（東から）

西区南壁土層断面（北から）

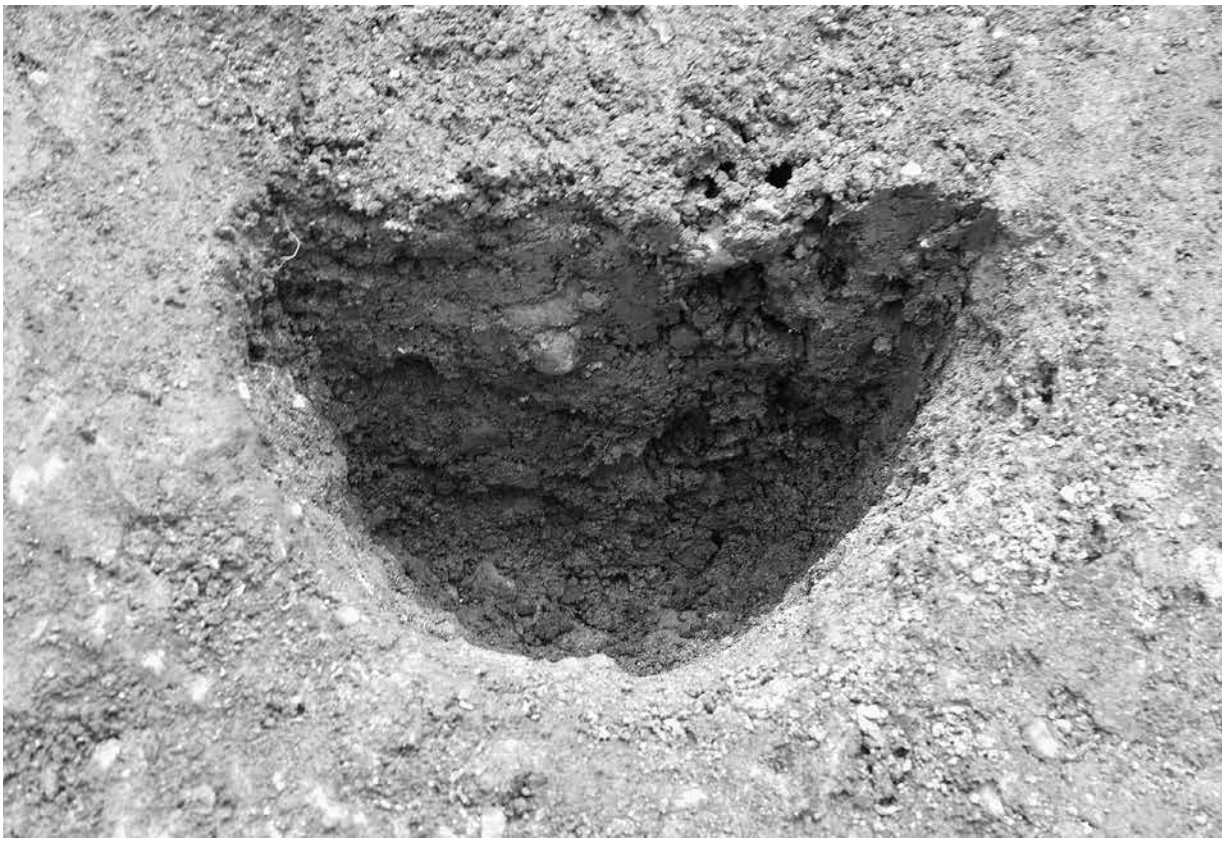
鉄刀（15）出土状況（南から）

図版 4

SD040 完掘状況（東から）

SK090 土層断面（南から）

SK090 完掘状況（東から）

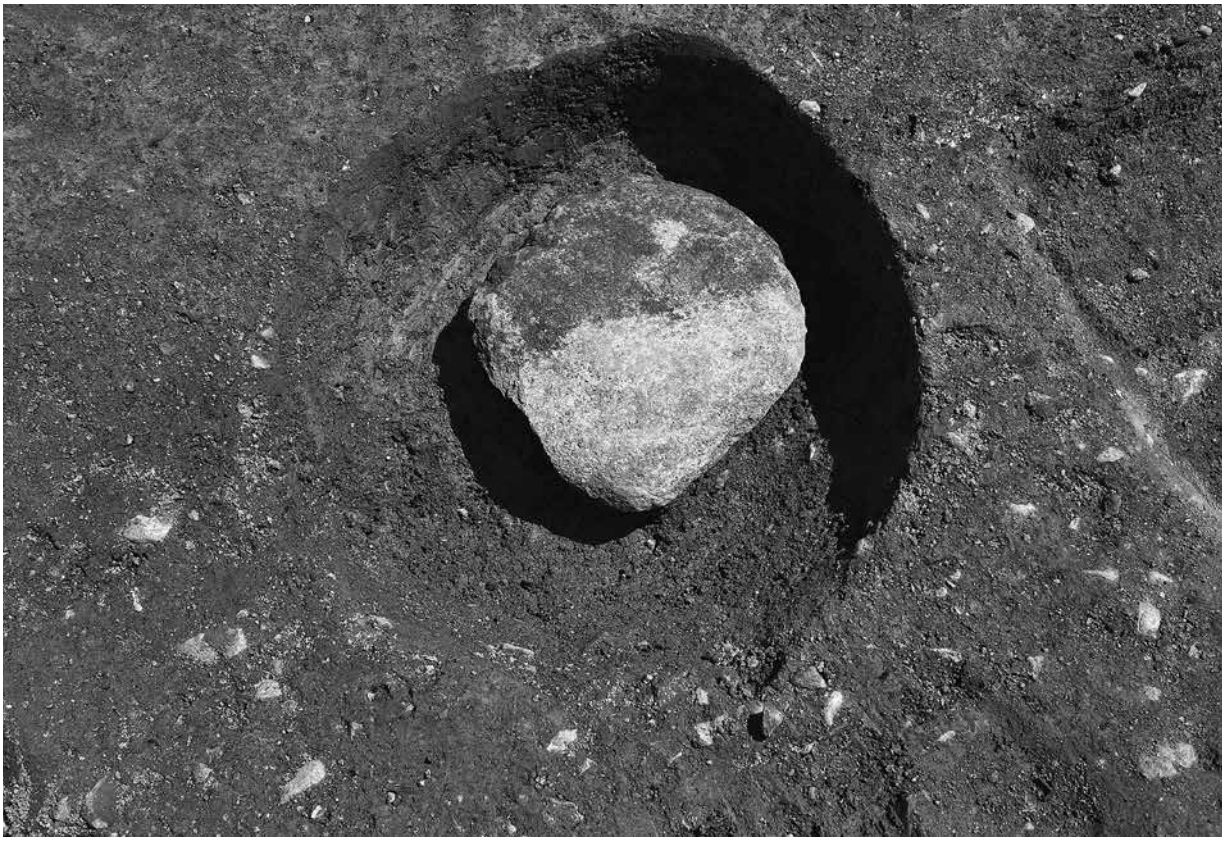


SB135c 土層断面（西から）

図版 6

SB136a 土層断面（南から）

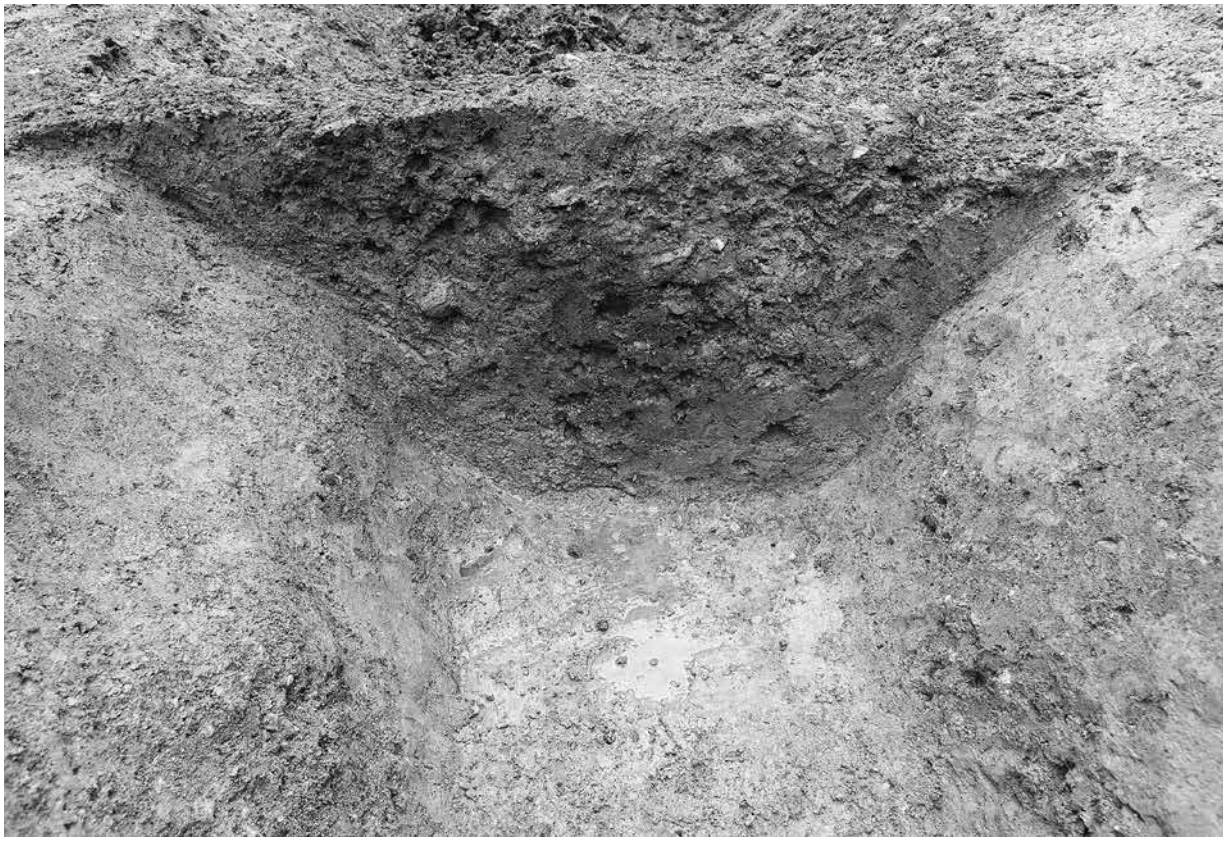
SB136b 土層断面（南から）



SB136c 礎石検出状況（南東から）

SB136d 礎石検出状況（北から）

図版 8



SD060 土層断面 a-a'（東から）

SD060 土層断面 b-b'（東から）

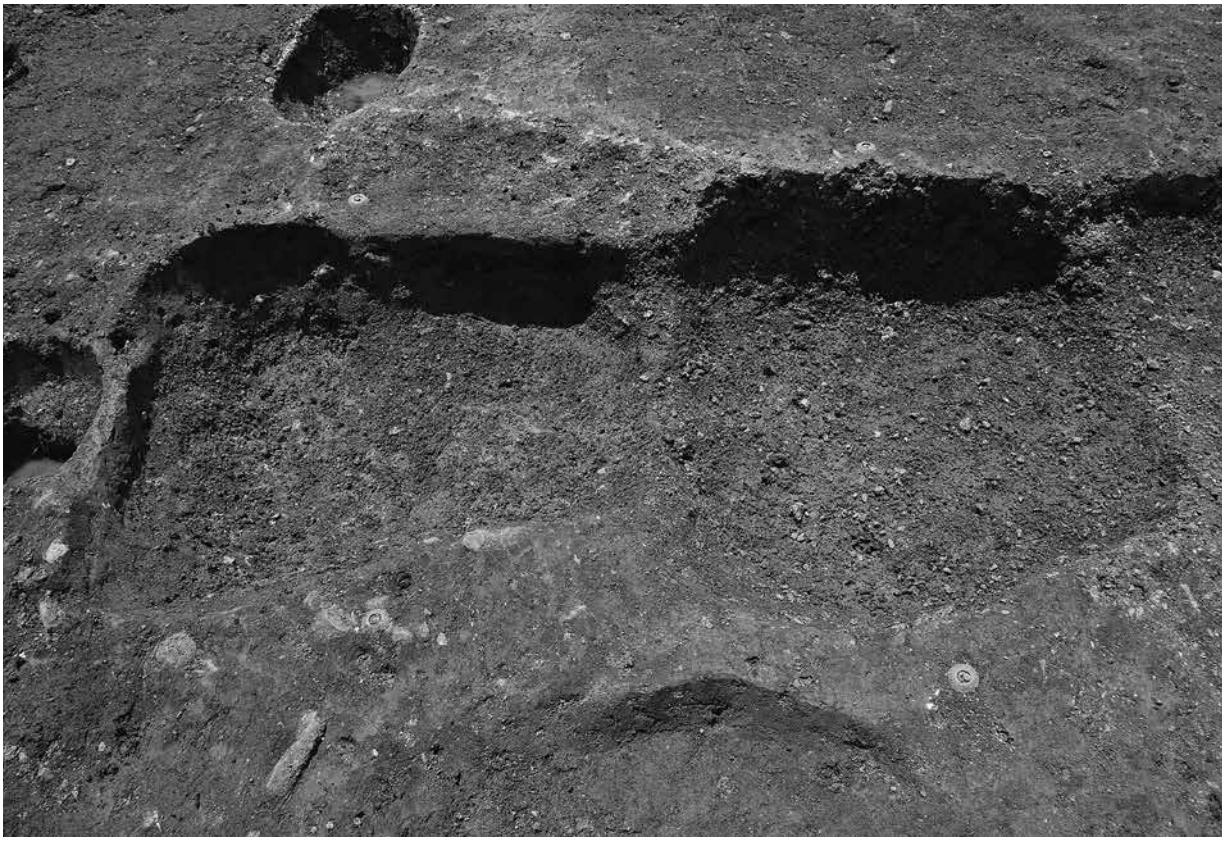
SE105 土層断面（南から）

SE105 完掘状況（西から）

図版 10

SK005 土層断面（南から）

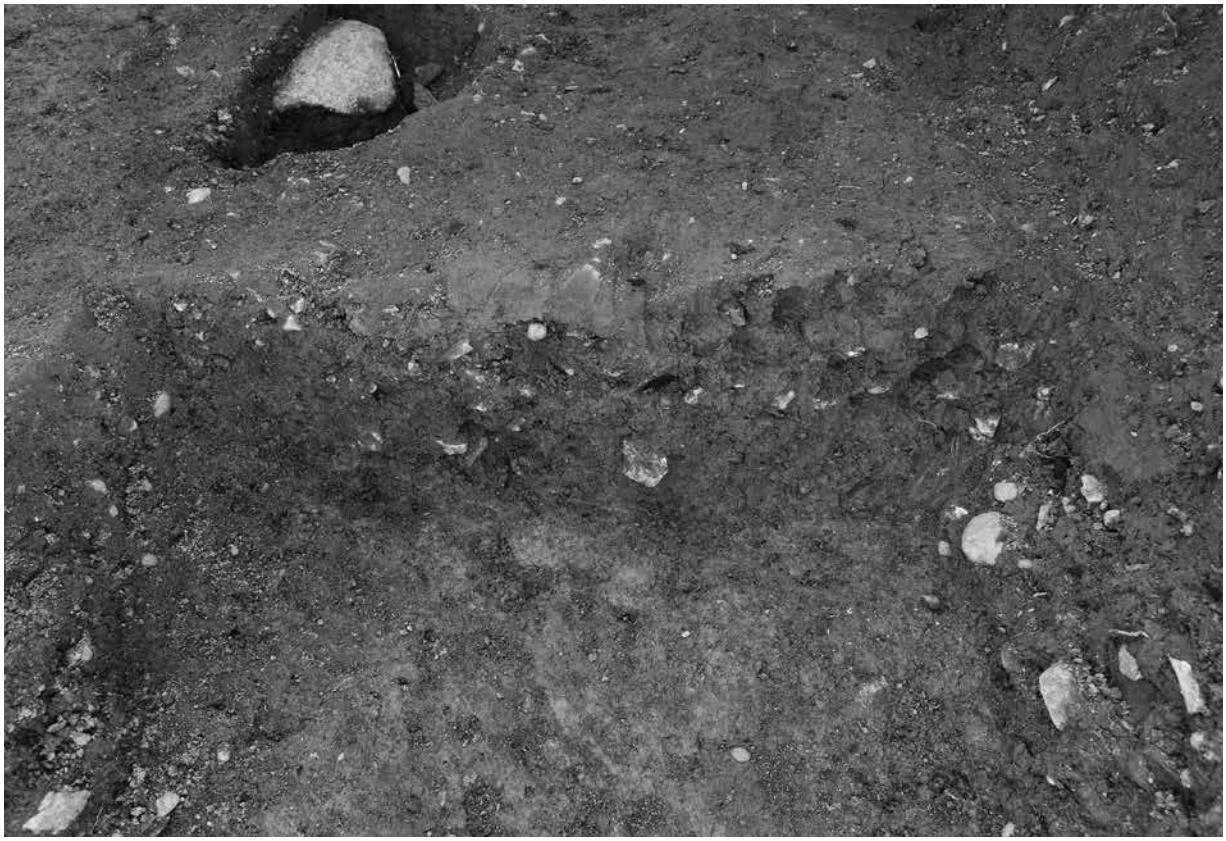
SK013 土層断面（南から）



SK005・013 完掘状況（東から）

SK068 完掘状況（南から）

図版 12



SK100 土層断面（西から）

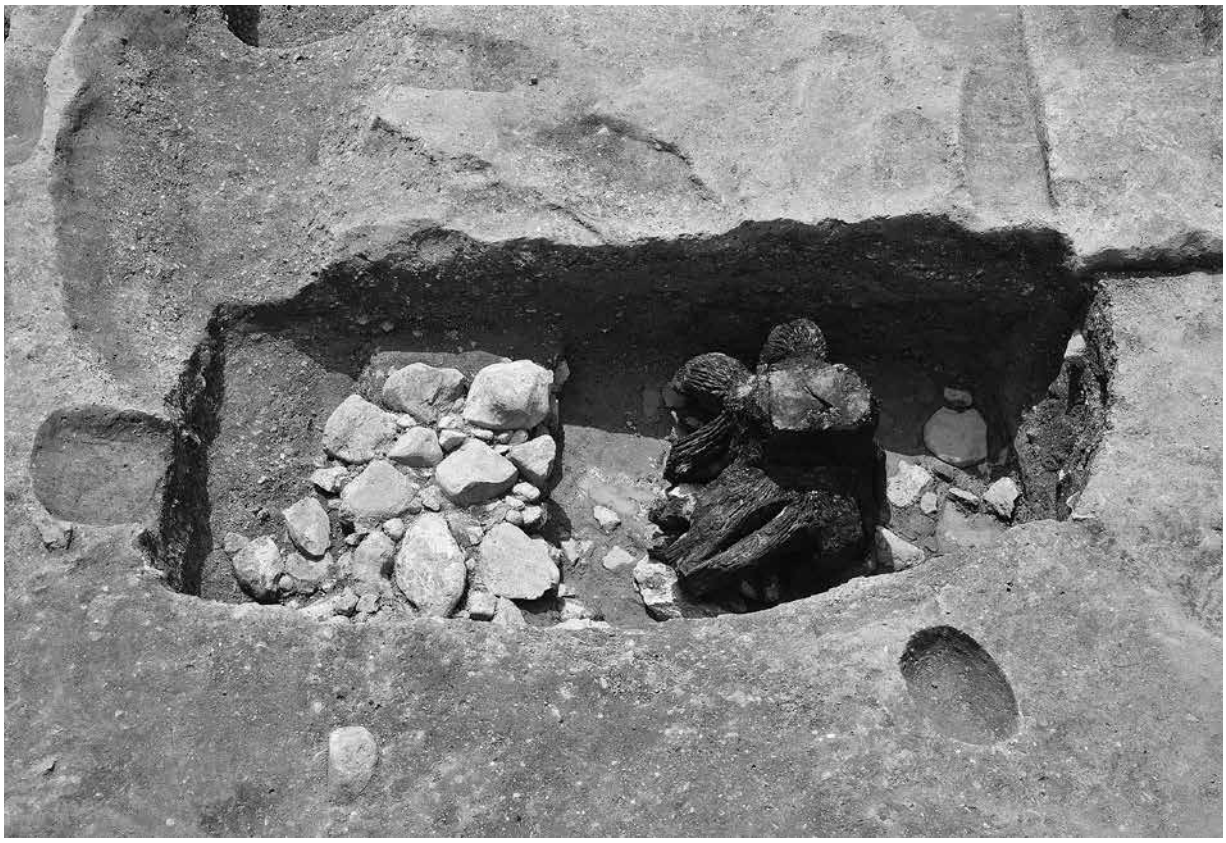
SK110 土層断面（北から）

SK020 完掘状況（南から）

SK050 土層断面（南西から）

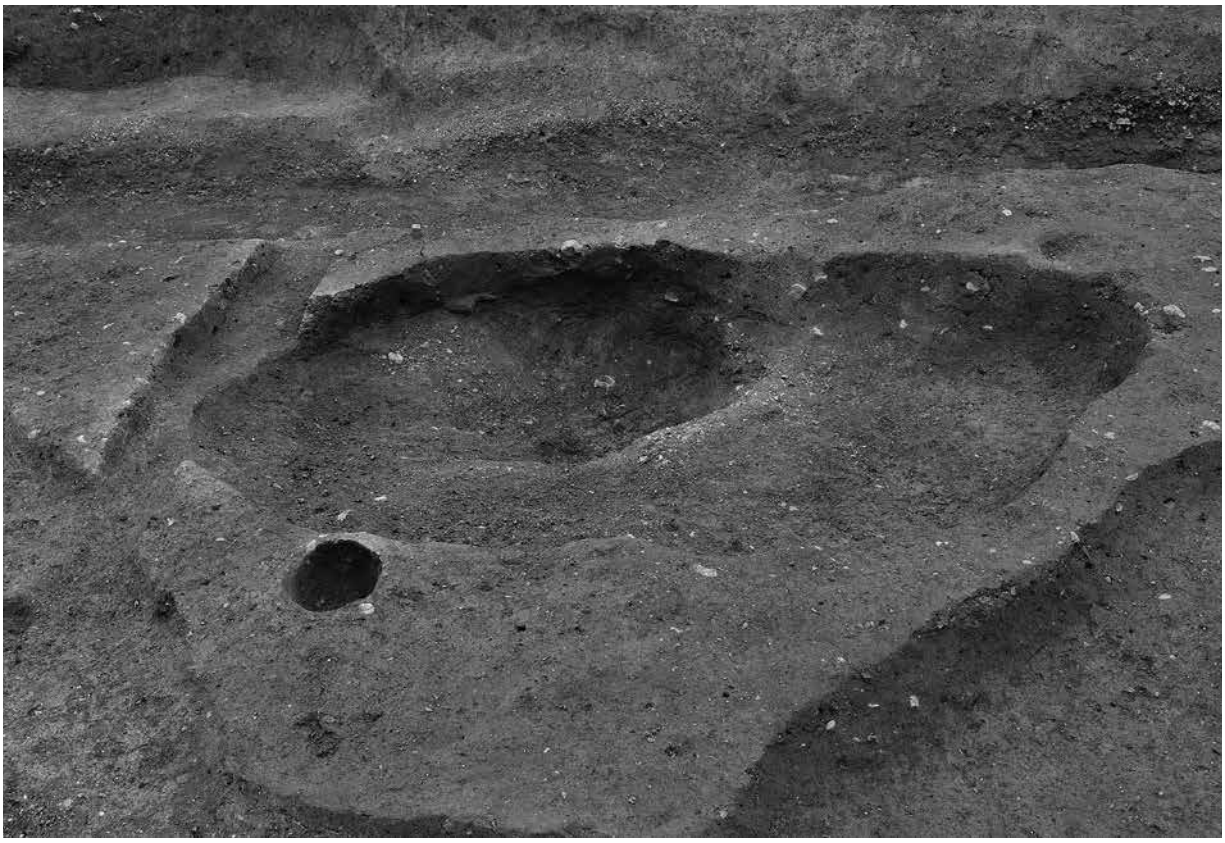
図版 14

SK050 丸太材出土状況（北西から）



SK050 完掘状況（東から）

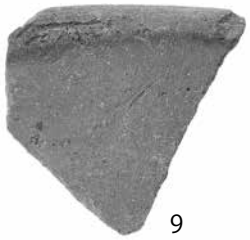
SK050 切り株除去後（南から）

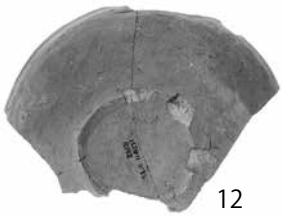


SK070 完掘状況（南から）

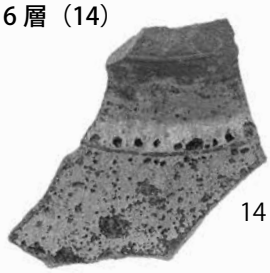
図版 16

SX080（1～7・9・10・12・14）

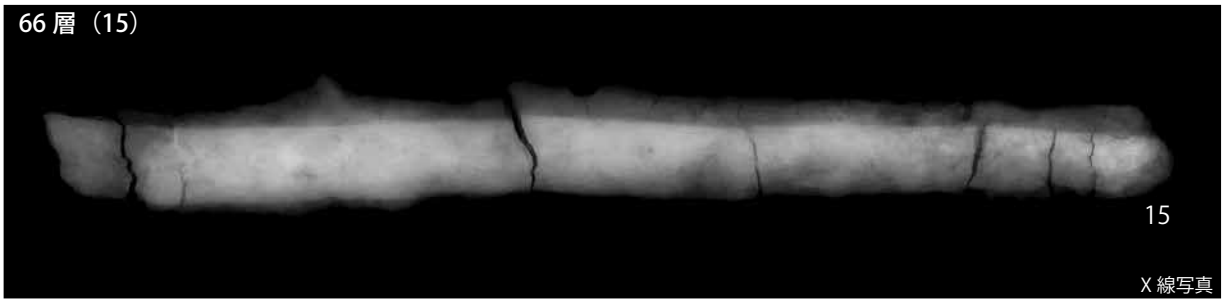




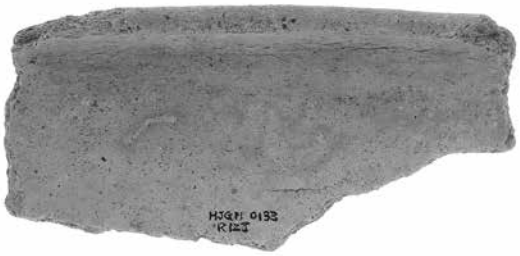
6 層（14）

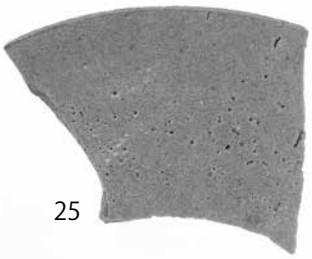


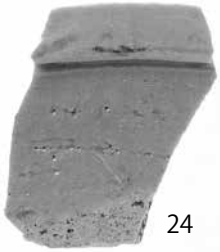
66 層（15）

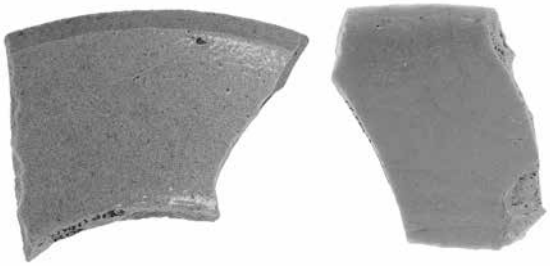


SD040（17・19・23 ～ 25）





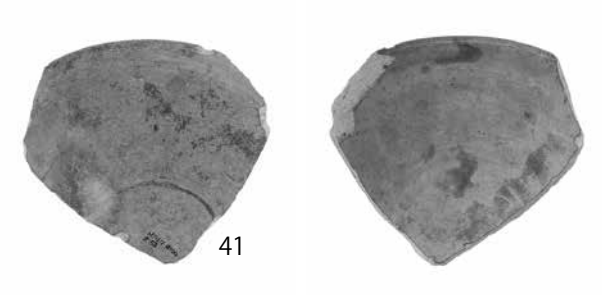




SK063（26 ～ 30）

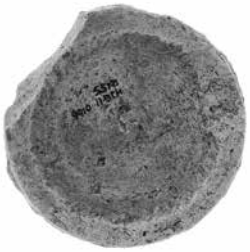
図版 18

SK090（31・33・34・36～38・40・41）



SK090（46・47）

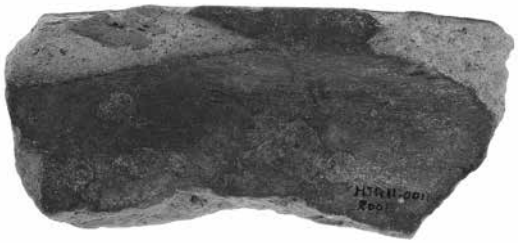
46



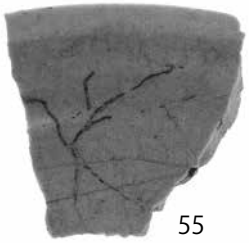
47

SB135（51）

51

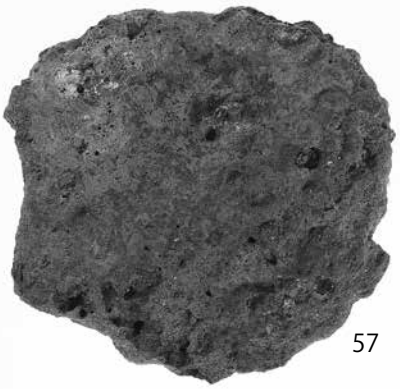


SB136（55・56）

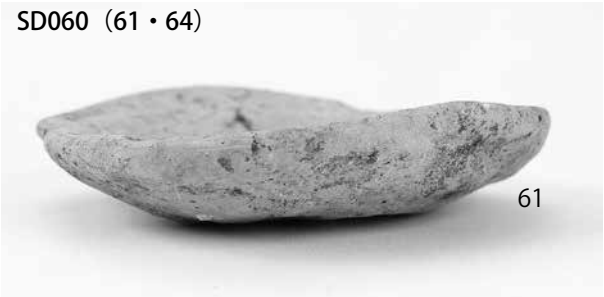

55

56

SP039（57）


57

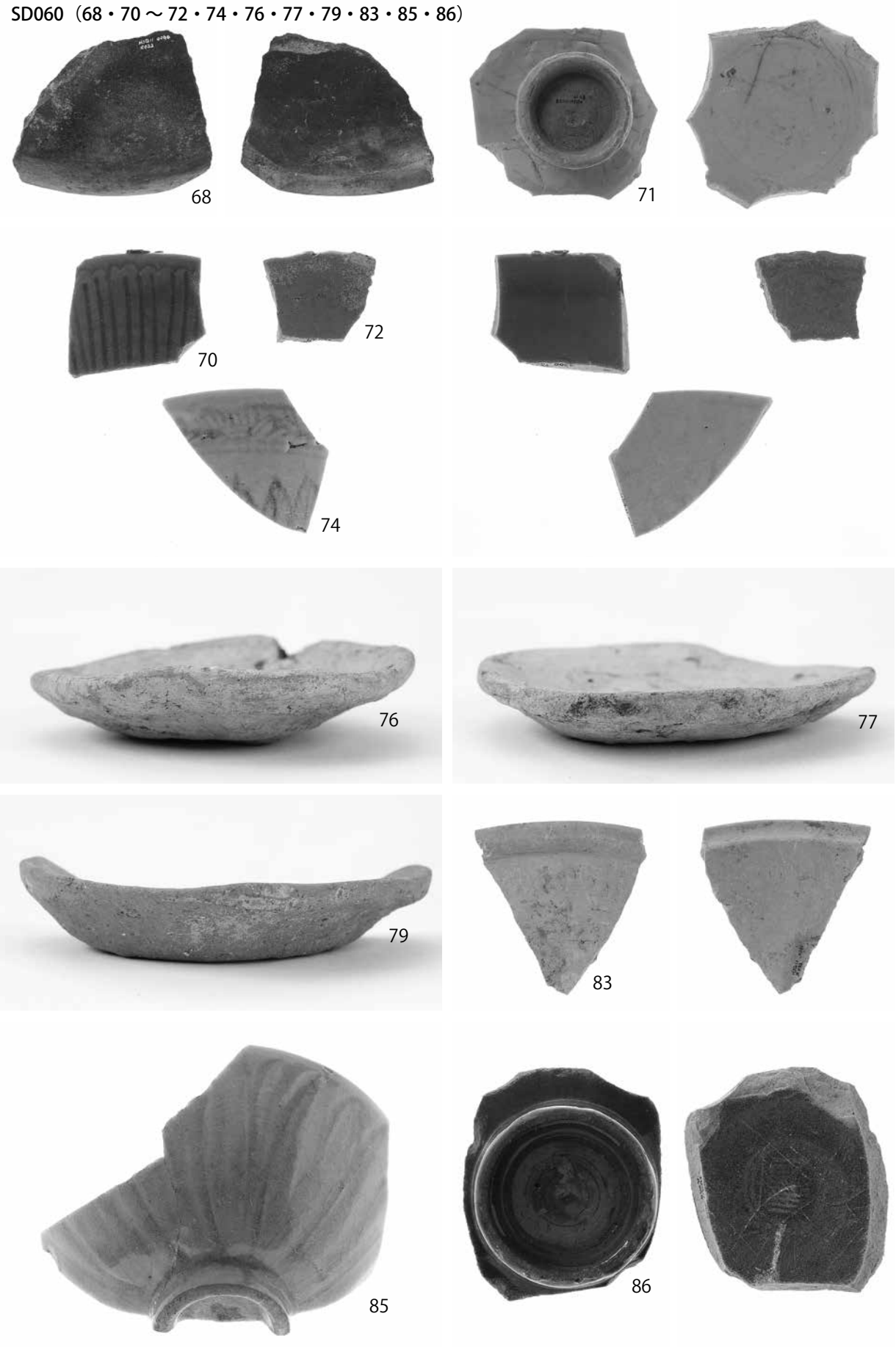
SD060（61・64）


61

64

図版 20

SD060（68・70～72・74・76・77・79・83・85・86）



SD060（87・88・90・91・94・95・98）

87

88

90

91

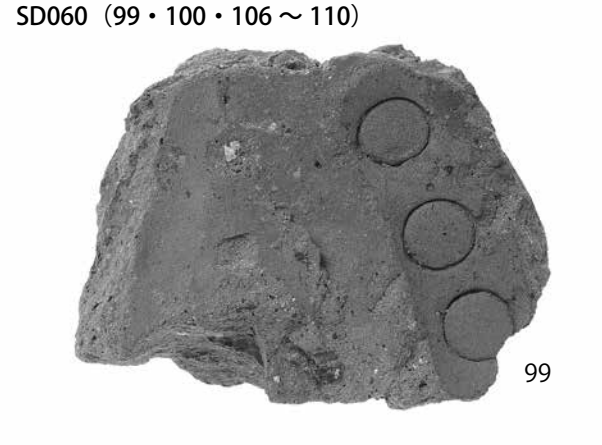
94

95

98

図版 22

SD060（99・100・106 ～ 110）


99

100

106

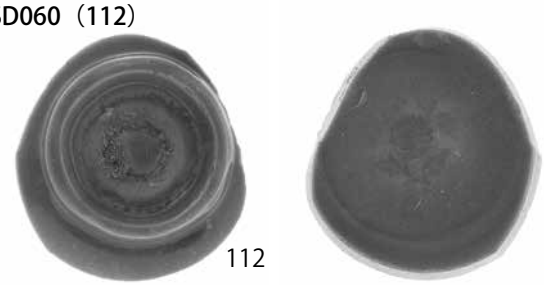
109

107

110

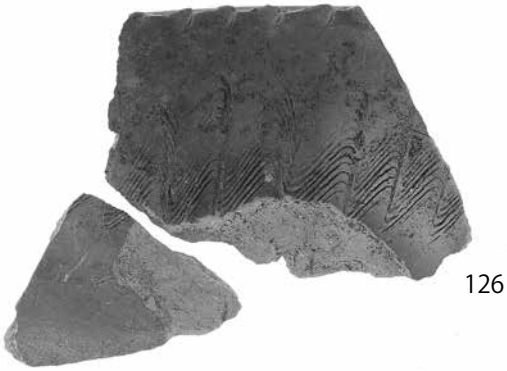
108

SD060（112）



SD071（114）

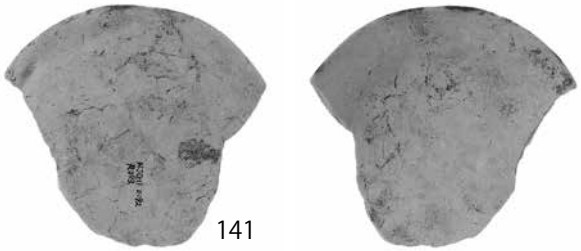
SE105（115・117・119・121・122・125・126）



図版 24

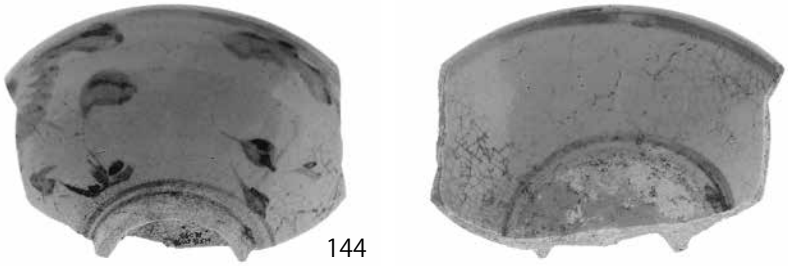
SE105（128～136・138・139）

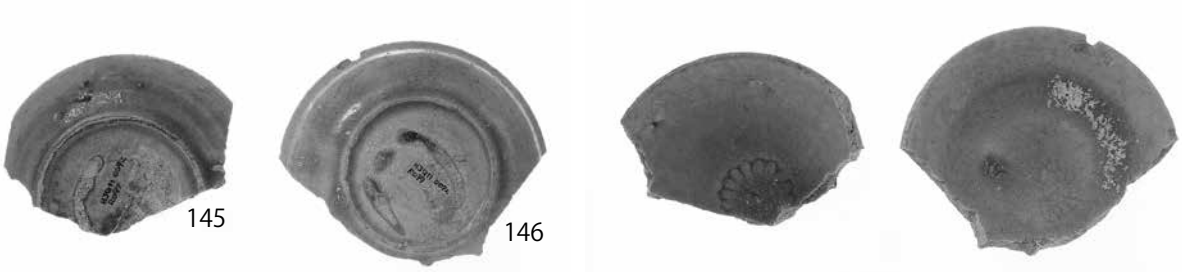
SE105（141 ～ 148）


141

142

143


144


145 146

147 148

SE105（149・150・152～159・163）

149

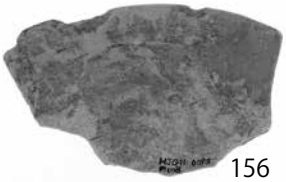
150

152

153

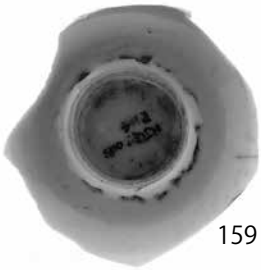
154

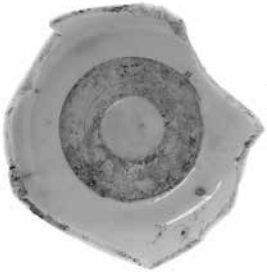
155


156

157

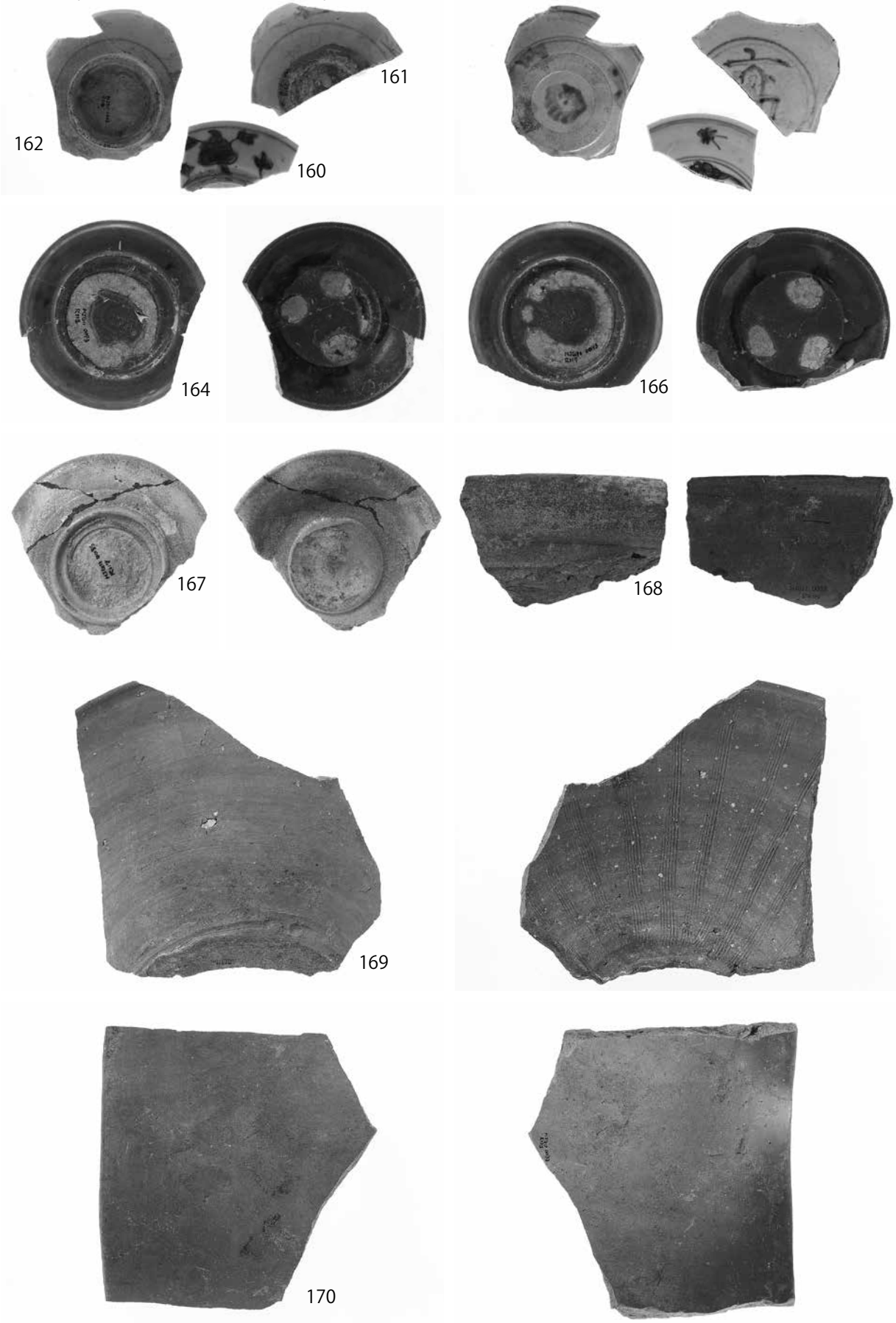
158


159



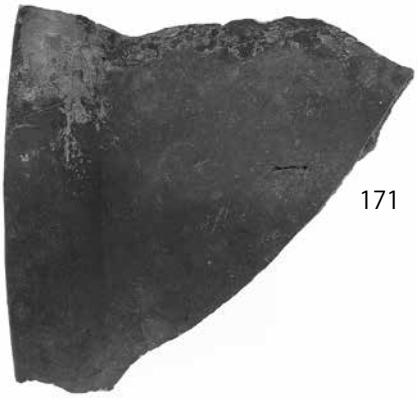
163

SE105（160 ～ 162・164・166 ～ 170）



図版 28

SE105（171 ～ 173）


171

172

173

SK068（175 ～ 178）

175

176

SK092（179）

179

177

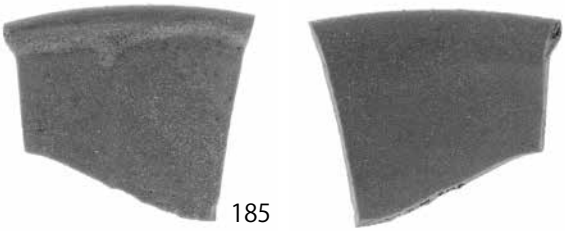
178

SK100（180・182 ～ 190）

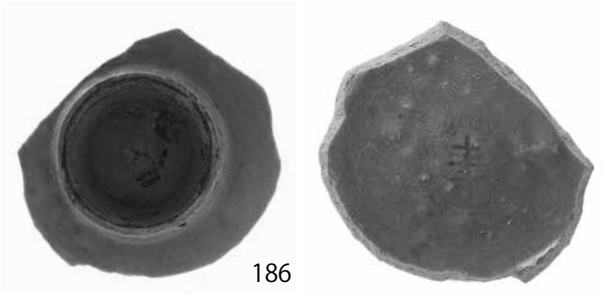
180

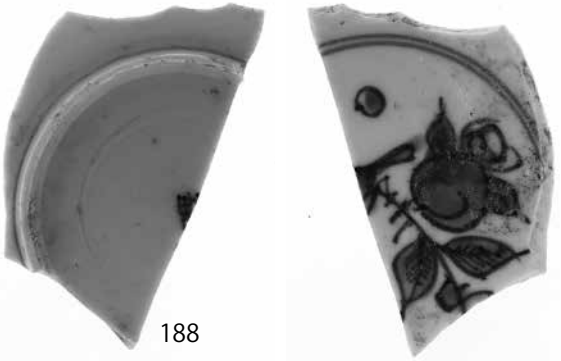
182

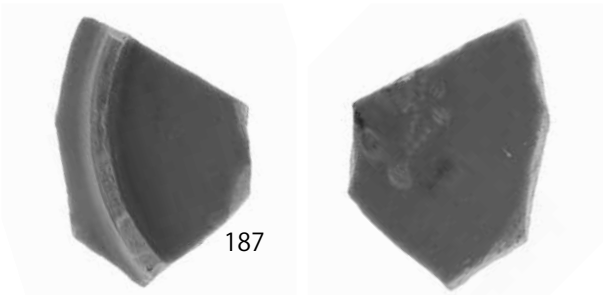
183


185

184


186


188


187

189

190

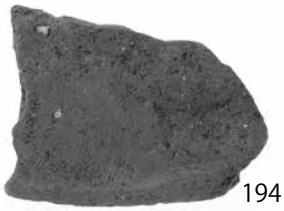
図版 30

SK100（191 ～ 195）

191

192

193


194

195

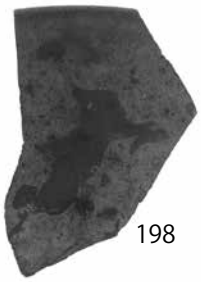
SK110（196）

196

SK050（197 ～ 199）

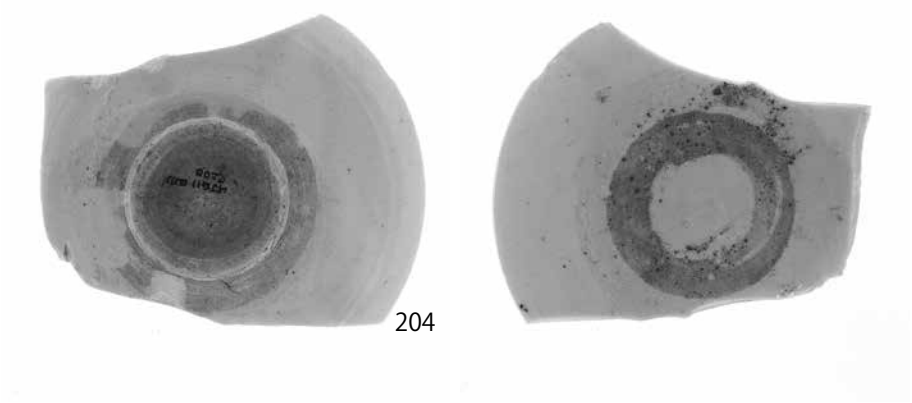
197

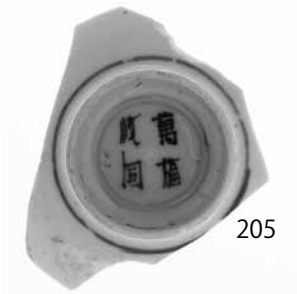
199

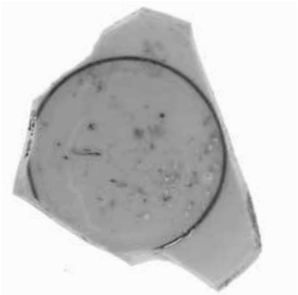

198

SK050（200）

表土（201・203 ～ 209）







報告書抄録

ふりがな	へいじょうきょうさきょうしじょうろくぼうはちつぼ・ならまちいせき	
書　　名	平城京左京四条六坊八坪・奈良町遺跡（HJG11 次）	
副 書 名	令和２年度発掘調査報告書	
巻　　次		
シリーズ名		
シリーズ番号		
編著者名	瀬戸哲也、江浦洋、佐藤亜聖、三谷智広、山口繁生、植田直見	
編集機関	公益財団法人 元興寺文化財研究所	
所 在 地	〒 630-8392　奈良市中院町 11 番地	Tel 0742-23-1376
発行年月日	西暦　2022 年 3 月 31 日	

ふりがな	ふりがな	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
へいじょうきょうさきょうしじょうろくぼうはちつぼ 平城京左京四条六坊八坪 ならまちいせき 奈良町遺跡	ならしかみさんじょうちょう 奈良市上三条町 13 番 1	29101		34° 40′ 53″	135° 49′ 32″	20200515 ～ 20200701	360㎡	店舗建設

種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
都城跡 都市遺跡	古墳時代～鎌倉時代	溝 土坑 井戸 掘立柱建物 ほか	土師器 瓦器 陶磁器 鍛冶関連遺物 瓦 銭貨 鉄刀 五輪塔 獣骨・貝・牛骨 など	中世に遡るまとまった金属生産遺物、動物骨角加工関連遺物が出土した。

要　約	本調査区は平城京左京四条六坊八坪の北東端かつ、中世から近世を中心とした奈良町遺跡に当たる。確実な土地利用は 11 ～ 12 世紀の整地土で、出土遺物が小片のため断定できないが、古代に遡る可能性がある掘立柱建物 1 基を検出している。また、埴輪が出土しており、周辺には古墳があったことも想定される。12 ～ 14 世紀には調査区東半で整地土と共に土坑や溝を検出している。15 世紀～ 17 世紀前半には全面的に遺構が展開し、掘立柱建物 2 基、溝、井戸、土坑などを検出した。東西方向に走る溝は南接する率川神社との現在の境界より北側に位置しており、当時はその敷地範囲が異なっていたことが想定される。当該期には大量の鉄滓や、加工痕がある骨、漆付不明製品などがあり、多様な生産活動が行われていたものと思われる。17 世紀後半以降は遺物・遺構が少なくなり、大規模な土地造成がなされたのと考えられる。

平城京左京四条六坊八坪
奈良町遺跡（HJG11次）
－令和２年度発掘調査報告書－

2022.3.31

（発行・編集）公益財団法人　元興寺文化財研究所
（印刷）株式会社　明新社